2018 年度・2019 年度
実践型地域研究「大学・地域連携」活動報告書
～宮津市、南丹市美山町、守山市美崎～

赤松芳郎・安藤和雄・内田晴夫・竹田晋也・坂本龍太
吉田彬人・北野清子・松原加奈・我妻俊介・森下航平・森山天貴・松井優 編

京都大学（東南アジア地域研究研究所実践型地域研究推進室、アジア・アフリカ地域研究研究科）、京都大学地域振興研究会、宮津市役所企画部企画政策課、ブータン王立大学（シェラブツェ校）、マウービン大学（地理学科）、ブータン保健省、ミャンマー保健省

大学・地域連携プロジェクト支援１まち１キャンパス事業「農山村学生実習のための『丹後アジア研修拠点』形成事業」、トヨタ国際助成「アジア農村で暮らす今日的価値の再発見―日本、ミャンマー、ブータンの当事者的交流―」、宮津市大学等連携「地域資源の活用と発信に向けた協働事業」「世代間交流促進を通じた日置コミュニティ活性化事業」「まごころ市地域にぎわい拠点事業」、基盤研究（A）「アジアの在地の協働によるグローバル問題群に挑戦する実践型地域研究」、滋賀県守山市美崎大川活用プロジェクト

もくじ

刊行にあたって　1

序章　3
　はじめに　3
　京都大学地域振興研究会　4

第１章：上宮津での活動記録（宮津市）　5
　１-１．打ち合わせ　5
　　１-１-１．第一回打ち合わせ　5
　　１-１-２．第二回打ち合わせ　6
　１-２．学生の上宮津での地域資源探索活動　19
　　１-２-１．学校ミュージアム＆盛林寺コンサート　19
　　１-２-２．舞と謡のワークショップ　19
　　１-２-３．地域歴史遺産の発掘巡検　19
　　１-２-４．今福の滝＆カフェ“Musubi”　22
　　１-２-５．空き家の活用に向けた取り組み　22
　　１-２-６．上宮津わかもの会議　23

第２章：日置での活動記録（宮津市）　24
　２-１．日置地域会議への参加　24
　　２-１-１．第一回学生合同地域会議　24
　　２-１-２．第二回学生合同地域会議　25
　　２-１-３．第三回学生合同地域会議　26
　２-２．第一回日置対面アンケート調査　28
　２-３．学生の日置での地域探索活動　33
　　２-３-１．日置文化祭視察　33
　　２-３-２．日置そば祭り視察　34

第３章：宮津まごころ市での活動記録（宮津市）　35
　３-１．まごころ市出荷者アンケート調査　35
　３-２．まごころ市出荷者アンケート調査結果報告会　42
　３-３．まごころ市消費者店頭アンケート調査　49

第４章：国際交流、その他の活動記録　54

４-１. ILAS セミナー：在地の参加型実践研究で学ぶ過疎・離農問題（宮津市） 54
４-２. ブータン×京都大学・合同フィールド実習２０１８（宮津市、南丹市美山町、守山市美崎） 56
４-３. ブータン×ミャンマー×京都大学・合同フィールド実習２０１９（宮津市、南丹市美山町、守山市美崎） 83
４-４. 宮津市観光パンフレット改善会議 101
４-５. 地域医療・保健に関する視察・交流プログラム①（南丹市美山町） 102
４-６. 地域医療・保健に関する視察・交流プログラム②（宮津市） 103
４-７. 「北近畿をいじる！アイデアコンテスト」での発表 105
４-８. 「第 2 回宮津わかもの会議」での発表 107

終章 110
おわりに～編集後記 110

2018-19 年度の主な活動（時系列）

2018 年度

6 月	京都大学学生・フィールド実習	（第１章）
7-8 月	ブータン、京都大学学生・合同フィールド実習	（第４章）
11 月	宮津市観光パンフレット改善会議	（第４章）
2 月	まごころ市出荷者アンケート調査	（第３章）

2019 年度

4 月	まごころ市出荷者アンケート調査結果報告	（第３章）
8 月	ブータン、ミャンマー、京都大学学生・合同フィールド実習	（第４章）
10-2 月	打ち合わせ（上宮津 21 夢会議、上宮津地域会議）	（第１章）
11-2 月	打ち合わせ（日置地域会）	（第２章）
12 月	まごころ市消費者店頭調査	（第３章）
	日置そばまつり参加	（第２章）
1 月	上宮津集落、杉山（普甲峠）散策	（第１章）
2 月	日置対面アンケート調査	（第２章）
	日置対面アンケート調査結果報告	（第２章）
	上宮津・古民家改修作業	（第１章）

刊行にあたって

私たちの宮津市での本格的な活動は、2016 年度より 4 年間の事業計画のもとに開始された 1 まち 1 キャンパス事業（大学・地域連携プロジェクト支援）「農山村学生実習のための『丹後アジア研修拠点』形成事業」（京都府・宮津市・京都大学）と「京都大学 ILAS セミナー」から始まりました。その後、基盤研究（A）「アジアの在地の協働によるグローバル問題群に挑戦する実践型地域研究」（2016 年度～2020 年度）、トヨタ国際助成「アジア農村で暮らす今日的価値の再発見―日本、ミャンマー、ブータンの当事者的交流―」（2019 年度～2020 年度）、宮津市大学等連携助成（宮津市）「『地域資源の活用と発信に向けた協働事業（宮津市上宮津地区）』、『世代間交流促進を通じた日置コミュニティ活性化事業（宮津市日置地区）』、『まごころ市地域にぎわい拠点事業（宮津まごころ市）』」の助成も受け、地域の多くの方々の協力を得て活動を実施してきました。

当初は、教員が履修学生を引率し、宮津市（京都府）、南丹市美山町（京都府）、守山市美崎（滋賀県）やブータン王国タシガン県などの農村地域をフィールドとした、短期セミナーのフィールドワークの一環として活動を実施してきました。そして、それらのセミナー参加者の中から有志が集まり、現在の私たちの活動は、7 名の学生（2020 年 1 月より任意団体「京都大学地域振興研究会」）の自主的かつ継続的な参画を中核とした、地域との協働事業へと大きく展開しています。7 名の学生が毎週木曜日の 18 時から夜遅くまで大学の一室でおこなっているミーティング、そしてフィールドへ向かう車内では、農村地域に対し侃々諤々と議論が繰り広げられています。そこでは多くの方が思われている農村地域の過疎や離農、高齢化といった暗い課題ではなく、地域の方々の取り組みや思い、そして地域が積み上げてきたモノ・コトを含めた、”地域“のすごさ、面白さ、将来の可能性、そして夢が前向きに議論されています。国の統計によると、平成 26 年 4 月時点で、797 の市町村（全市町村の 46.7%）が過疎市町村となっており、農村地域やコミュニティの“疲弊”、“崩壊”、“消滅”といったネガティブな言葉が先行します。しかし、学生の視点に立てば、先ず地域は様々な面で面白く、魅力的であるのです。そして学生から見た面白さや魅力を地域の方々と分かち合えるような協働活動、地域の方が発見した面白さや魅力を学生と共有できるような協働活動が、“結果”として、地域の課題解決や活性化につながっていくのではないかと、この 1 年の学生の皆さんとの活動を通して感じています。過疎や離農、高齢化といった課題の大きさを考えると、私たちの取り組みはまだ始まったばかりではありますが、小さな予感を胸に今後の活動へ繋げていければと考えています。

平成 28 年度（2016 年度）から平成 29 年度（2017 年度）の活動はすでに「大学・地域連携プロジェクト支援 1 まち 1 キャンパス事業　農山村学生実習のための『丹後アジア研修拠点』形成事業　資料集」にとりまとめ出版しました。それに引き続き、本報告書は平成 30 年度（2018 年度）から令和 1 年度（2019 年度）の宮津での「京都大学地域振興研究会」とともにおこなった地域の方々との協働活動を中心に、学生のみなさんと協力してま

とめたものです。私たちの活動は非常に多くの方々のご協力・ご支援・ご助言によって実現したものです。あまりに多すぎるためここでは団体名、個人名は割愛させて頂きますが、宮津市、南丹市美山町、守山市美崎、そして京都大学関係者の皆様に記して感謝の意を申し上げます。

京都大学東南アジア地域研究研究所実践型地域研究推進室
大学・地域連携プロジェクト・コーディネーター（連携助教）　赤松芳郎

序章

はじめに

私は小さい頃から愛媛県の片田舎の祖父母の家に遊びに行くのが大好きでした。昆虫を捕り、祖父と魚釣りに行き、農作業を手伝い、祖母とお喋りしながら昼寝をする。そんなゆるやかな時間が都会育ちの私にはかけがえのない宝物でした。成長するにつれ自らの好奇心が虫捕りから農的生活、地域経済、そして歴史地理学へと変わった今でも、そこは私に好奇心を与え続けてくれる場所であり、自らのフィールドであり続けています。

大学に進学後、履修した安藤和雄教授のゼミで改めて地域活性化について考える機会を得ました。その際に宮津に行ったことが縁となり、今日まで活動させて頂くことになりました。宮津も例に漏れず、現代日本の多くの地域が頭を悩ませる過疎や離農、少子高齢化などの問題を抱える地域の一つです。多くの他の地域がそうであるように、これらの問題に長年取り組んでいるにも関わらず、なかなか解決の糸口を見いだせずにいます。

これまで私たちは可能な限り京都から宮津へと通ってきましたが、今まで一度も無理をして活動をしていると感じたことはありません。各学生個々の興味関心に基づいた自発的な活動が、活動を持続的なものにしています。本来、地域活性化は、それ自体を目標として活動するものではなく、結果として達成されるべきものであるはずです。「活動のための活動」や一過性のイベントによってではなく、地道で自然体の活動をゆるゆると続けていくことこそが、地域活性化への一番の近道なのではないでしょうか。2 年間の活動を通して私たちは、ほんの少しずつながら地域が良くなってきているという確かな手応えを感じています。

私にとって宮津もまた、愛媛の祖父母の家と同様自分の大切なフィールドになりつつあります。ゆるやかな愛情で地域とつながりつつある実感が、私の小さな喜びです。最後になりましたが、日頃から活動を支えてくださっている先生方、いつもあたたかく私達を迎えてくださる地域の方々及び関係者の皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。私たちが地域に貢献する以上に、かえっていつも地域の方々から多くを学ばせて頂いています。今後も地域活動の主人公である地域の方々と共に活動できることを楽しみにしています。我々も精一杯がんばりますのでどうぞよろしくお願い致します。

京都大学地域振興研究会を代表して
吉田彬人

京都大学地域振興研究会

「京都大学地域振興研究会」は、京都大学が受託した京都府宮津市における大学等連携事業の実施にともない、学生の自主的な任意団体として令和 2 年 1 月に設立されました。私たちの研究会は京都大学で実践型地域研究に携わる安藤和雄教授のゼミナールを契機に学生の有志が集まった主体的なグループ活動から始まりました。継続的に地域に参加し、地域の人々との協働による活動実践を通した草の根の地域振興をめざして活動しています。

「地域振興研究会」の基本方針は、事業を実行するにあたって時間的にも金銭的にも限界があるとの認識のもと、一過性のイベントで終わらない持続的な無形資産を地域の人々とともに創り上げるべく、曇りのない目で地域を見つめることだと考えています。この方針にもとづき、機会を見てできるだけ現地に行く回数を増やし、我々での率直な現地視察とそこに暮らす地域の人々との交流の両方を偏りなく進めることを目指しています。

宮津市大学等連携事業である「地域資源の活用と発信に向けた協働事業（上宮津)」、「世代間交流促進を通じた日置コミュニティ活性化事業（日置)」、「まごころ市地域にぎわい拠点事業（宮津まごころ市)」の三案件に関わり、2018 年度の活動成果を踏まえつつ地域の方との協働活動に向けて、地域の状況を広く知ることを 2019 年度の第一の主眼として活動をおこないました。上宮津では地域資源再発掘を目的に古道・上宮津城散策、地域イベントなどに参加しつつ、地域資源を活用した新たな地域づくり活動を提案し、関連団体の方との新たな助成金獲得も視野に入れつつ提案事業の実現に向けて準備を進めています。日置では地域会議に参加し、今後の地域の在り方や取り組みに関する議論を行い、地域や地域活動への住民の意識を調査するべく対面アンケートを実施しました。2020 年度以降はこれらから得られた知見をベースに、全戸対象アンケートを含めた更に具体的な地域活動を実施する予定です。まごころ市では 2018 年度に私たち学生が中心となって実施した生産者アンケートの解析内容を踏まえ、消費者アンケートを実施しました。現在は消費者アンケートの解析を進めつつ地域の農業を中心としたまごころ市の“にぎわい”創出に向けた今後の取り組みについて議論を進めています。

最後となりましたが、我々の活動を支えてくださっている宮津市をはじめ地域の関係者の方々にこの場を借りまして厚く御礼申し上げます。今後は我々独自の視点を生かした具体的な活動をおこなっていく段階に入ります。あっと言わせるような目立つ成果を残せるとは考えていませんが、地域コミュニティのつながりを確実に深めることを目指して精いっぱい努力しますので、今後とも「京都大学地域振興研究会」をどうぞよろしくお願いいたします。

京都大学地域振興研究会
我妻俊介

第１章
上宮津での活動記録

１-１．打ち合わせ（2019 年 10 月～2020 年 2 月）

上宮津に暮らす人々、地域の現状や課題、また既存の地域づくり活動を知り、上宮津地区において 2020 年度に協働活動として実施する具体的なアクション・プランを作成するために、計３回の打ち合わせが実施された。打ち合わせには、上宮津 21 夢会議の他、上宮津地域会議、杉山・エコツアーガイドの会などの市民団体の主要な活動メンバー（５～６名）と京都大学地域振興会に所属する大学生（３～６名）らが参加し、地域の課題やこれまでの地域づくり活動についての議論がおこなわれた(第一回打ち合わせ(2019 年 10 月 14 日))。大学生側からは 2020 年度以降の活動に向けたアクション・プラン（仮）の提案がおこなわれ（第二回打ち合わせ（2019 年 11 月 17 日））、プラン（仮）に対する意見や要望を含めた協働実施の可能性が議論された。また、状況や必要、また地域の方の要望に応じて、少人数での話し合いや打ち合わせも随時おこなわれた（2019 年 8 月 27 日、11 月 17 日、2020 年 1 月 8 日、2 月 22 日、2 月 23 日）。

１－１－１．第一回打ち合わせ（2019 年 10 月 14 日）

学生（京都大学地域振興研究会）が上宮津で活動するにあたって、これまでの地域の人たちの活動や方針を理解し、また学生自身のことを知ってもらい今後の上宮津での協働活動の方向性を模索するべく、それぞれの話し合いをおこなった。話し合いの概要は下記の通りである。

1 日時：2019 年 10 月 14 日 14 時～17 時
2 場所：上宮津公民館
3 参加者：上宮津 21 夢会議等のメンバー　６名、大学生　７名、引率教員　２名
4 会議概要
(1) 夢会議の現状
- 幹部らは各部会の動向を定期会議での報告等によって把握しているがその活動に対してあまり意見を言ったりすることはない
- 何か新しいプロジェクトが持ち上がっても話が途中で頓挫することが多い
- 若者の力がほしい
- 上宮津を盛り上げていくうえで今後新しい地域ビジョンを作る予定

(2) 上宮津への希望
- 特産物があるわけではないので観光よりも定住を期待する
- 土地が急傾斜地なので国主導の大規模な農業はできないため、新規定住者向けに中規模でもやっていける施策があったらよい

・　地元の人が活動に関わるメリットをもっとつくりたい

(3) パンフレット作成について

・　現在パンフレットは 4 種類、市からの補助金を得ている

・　パンフレットを見た人からの問い合わせに対応する人がいない

・　パンフレットを用いてどうやって情報発信していくかが課題

(4) 杉山について

・　現在エコツアーガイドが登録 17 名実働 12 名程度、高齢化が進む、依頼は年に 3・4 回

・　古道が 3 本あり、すべて整備するのは忙しい

・　杉山自体が集落から遠く、4.4 km と道も長いので地元の高齢者から敬遠される

(5) 地域の若者の活動について

・　杉山で雲海ツアーを実施、地域内外イベント招致をした

・　現在、古民家を改修し地域の人が集まれる場を作ろうとしている

・　古民家の利用⇒飲食店、観光案内所、学生の宿泊施設、アーティストに活動場所の提供。これらを兼ねた場所にしたい

(6) その他

・　上宮津への移住者 3 年で 10 世帯 30 名中学以下 11 名

・　祭りなど地域の作業を子供に手伝ってもらうことで地域への愛着を。遠くの大学へ行った子供が祭りの期間そのために帰ってきて手伝ってくれた例も

・　個人で地域の歴史関連の調査で活動する人はいるが、地域で共有はされていない。

以上夢会議の方たちの意見を聞いた後、学生による発表がおこなわれた。我妻は自身が鹿児島へ行って地域活動の成功例を見学してきたため、農業やトレッキングツアーで収入を得ている地域の様子を報告した。松井・森下は京大地域創生サークル：エスの 3 ジョウで淡路島の地域活性の活動をしており、その内容を報告した。

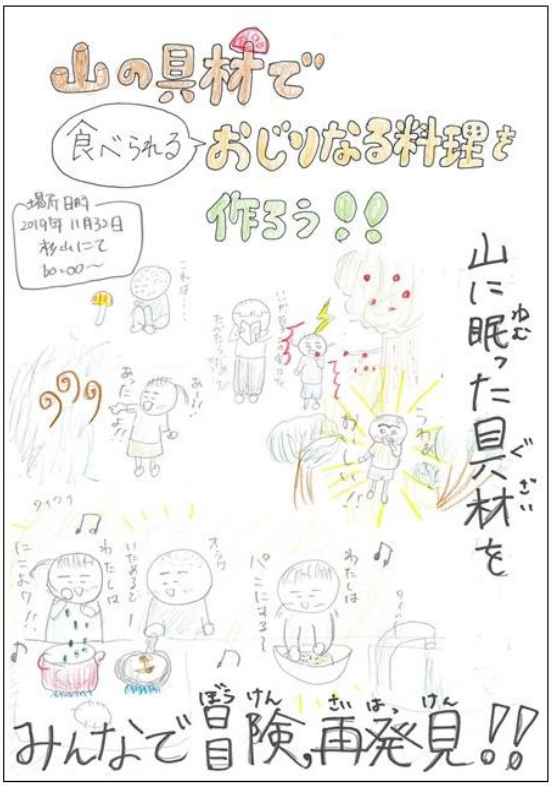
最後に安藤教授の意見。地域の当事者間で生じるしがらみを避けるには学生のような第 3 者の介入が必要。学習昼食（宿題を教える子ども食堂）など、大学生がボランティアとして参加しやすい仕組みづくりをしたらどうか。スタディ・ツアーを企画し、大学生が杉山や上宮津の歴史について調べたことを小学生に授業する。地元を出た人にも宮津を意識してもらえるようにダイレクトメールを送ったらどうか。

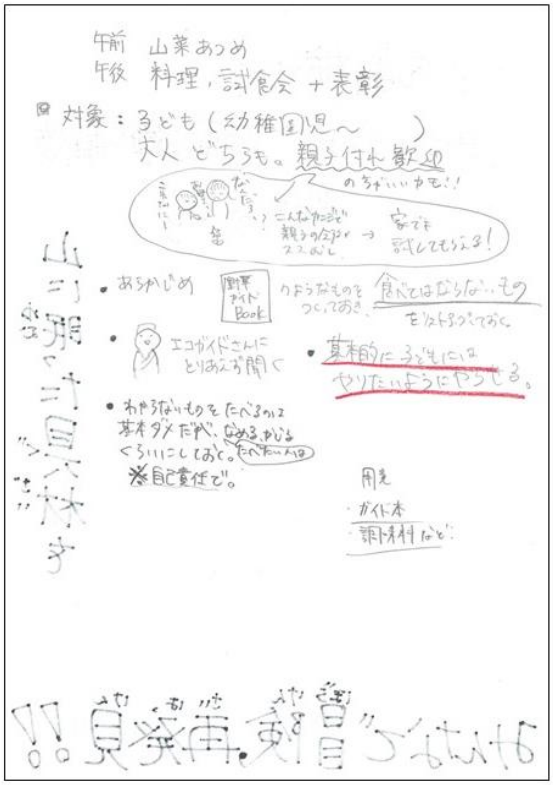
１－１－２．第二回打ち合わせ（2019 年 11 月 16 日）

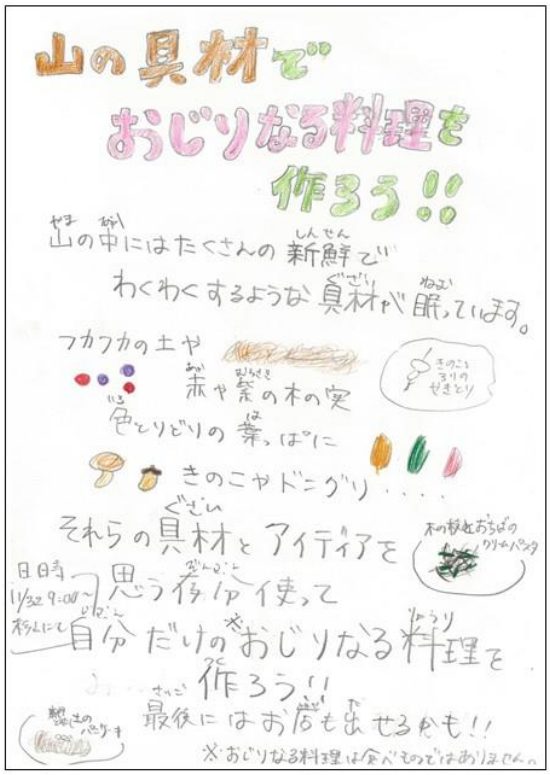
旧上宮津小学校で、上宮津 21 夢会議、上宮津地域会議の方々に向けて京都大学地域振興研究会の上宮津での 2020 年以降に実施する中長期活動計画案（仮）のプレゼンテーションをおこなった。学生 3 名がそれぞれの案（計 4 案）を持ち寄り、地域の方々と共有することでこれらの案の実現に向けた意見交換をおこなうことが目的であった。第一案は、「地域の

子供たちが地域の山で遊ぶ機会を作る」という案を発表した（打ち合わせ資料①参照）。これは、以前に比べ地域の野山で遊ぶ子供たちが減少したことに問題意識を持ち、そうした遊びを通じて単にイベントを開催するだけでなく、地域を知り、愛着を育むことが出来るのではないかという提案だった。第二案は、「ブータン・フェス」の開催の提案である（打ち合わせ資料②参照）。これは 2017 年度より「地（知）の拠点事業（COC）」、「１まち１キャンパス事業」、「トヨタ財団国際助成」、さらに 2020 年度からは「JICA パートナーシップ事業」などで上宮津とブータンの方々の交流が継続的におこなわれていることに因んだもので、こうした国際交流を拡大・発展することで、地域の魅力を外部にさらに発信できるのでないかという視点にたった提案であった。ブータン関連の出店・展示により地域のイベントに独自色が出ることで、イベントの魅力向上や地域外からの集客が拡大が見込めるのではないかという意見が出た。第三の案は、杉山の自然資源を活用するための「プチ・ジオパーク」事業案である（資料③参照）。杉山は中腹から尾根にかけてかんらん岩と蛇紋岩からなる山であり、尾根部には多くの天然杉の巨木も残存している。杉山エコツアーガイドの会などの市民団体により林道の整備などがおこなわれてきたが、今後の活動課題として杉山の資源を活用した商品開発ができないかという議論が第一回打ち合わせでおこなわれた。これを受け、杉山のかんらん岩と蛇紋岩に着目した商品開発を含めた“プチ・ジオパーク”事業の提案がなされた。第四の案は、地域の歴史遺産の再発掘・整備に関する活動である（資料④⑤参照）。上宮津地域は、多くの寺社や城跡、宮津街道（近世参勤交代の道）、伝統的祭典などが残されているものの、地域内外での認知度は高いとは言えず、十分に知られていないという現状がある。そこで、これらの歴史に関する地域資源を再発見・整備する活動をおこない、それらを通じて地域の内外の人達に興味関心を持ってもらうことで、上宮津の魅力を広く発信できるのではないかという考えである。特に上宮津城は、中世の城郭の特徴をよく表しており、その「教科書」的存在としてとても価値が高いものである。盛林寺と共に、2020 年大河ドラマ「麒麟が来る」の主人公である明智光秀とゆかりの深い場所なので、そうした面からの PR も有効かもしれない。この案についても、地域の方々から他の市民団体（喜多城倶楽部）との協働を視野に入れた積極的な意見が出たため、次年度以降実現に向けて動き出す予定である。

打ち合わせ資料①：「地域の子供たちが地域の山で遊ぶ機会を」





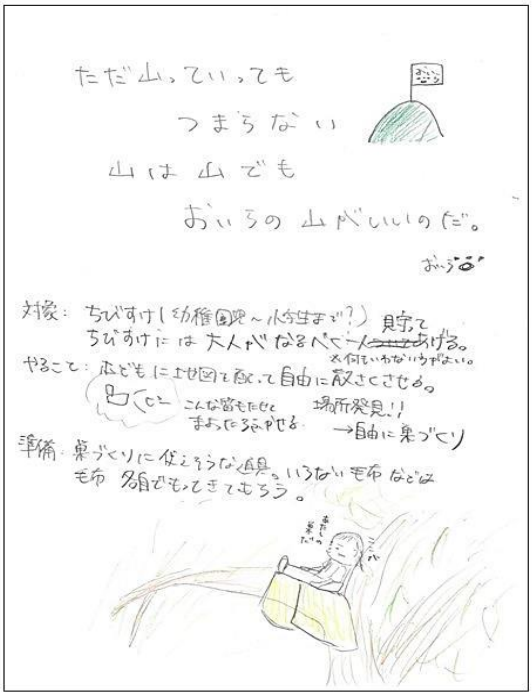


山の具材でオリジナル料理を作ろう！

左上）山でとれる食材（山菜・きのこ）を用いて料理をする。

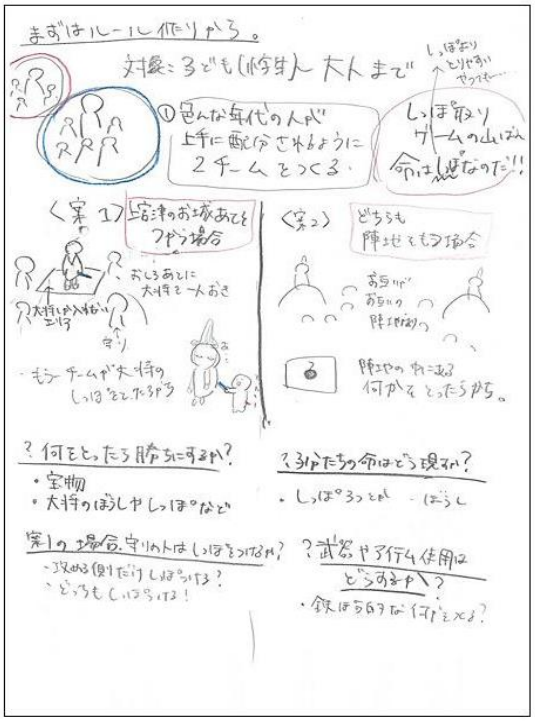
右上）企画詳細。・親子連れ歓迎・杉山エコガイドの方に協力してもらう

左下）山のものを使って子供たちが創作料理（食べられない）をつくる。葉をすりつぶしたり、切り刻んだり、土をトッピングしたり・・・。自然のものは人工のおもちゃと違って同じ葉っぱ一つとっても色々な形があるため、子供の想像力が刺激される。



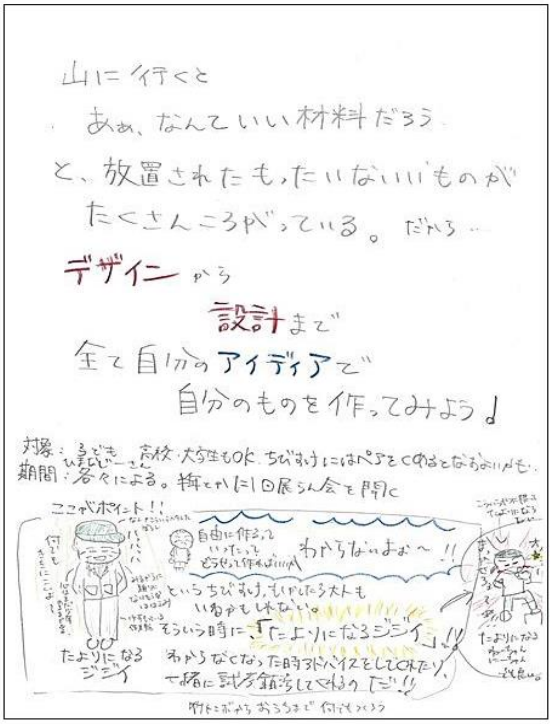
山に「自分の巣」、居心地のいい場所を作ろう

自分の秘密基地的な場所を作ることにより、地元の山への愛着がわく



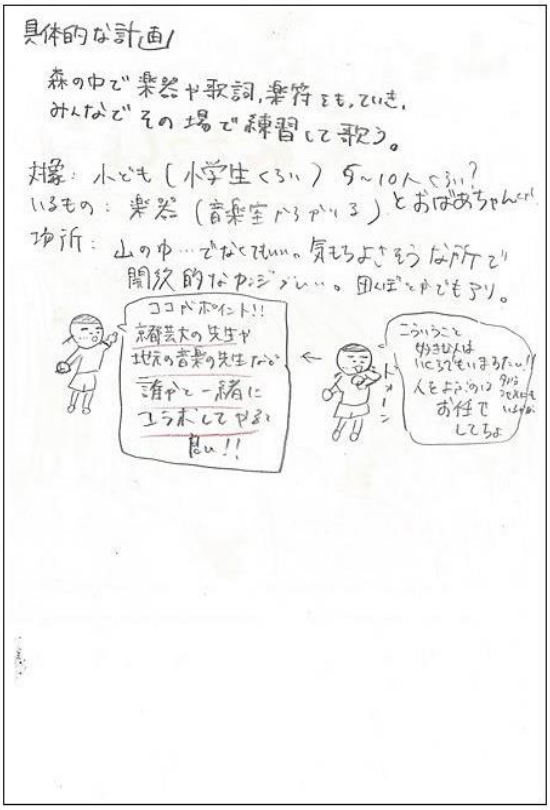
杉山で陣取り合戦

みんなでルールを決めて、山を駆け抜ける。



もの作りプロジェクト

自分で設計図を書いて山にある材料を使ってものづくりをしよう。

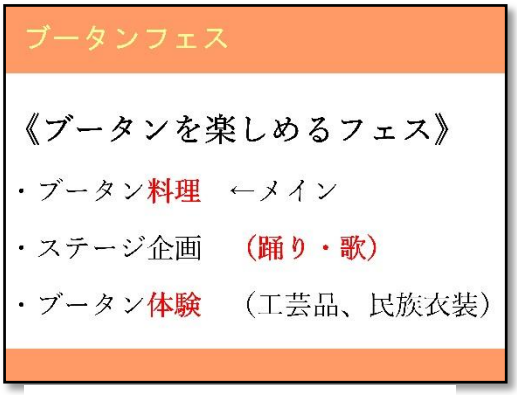


山で歌おう！演奏しよう！

自然のなかで思いっきり演奏・合唱をしよう

打ち合わせ資料②：「ブータン・フェス」

1）表紙。写真は、ブータン人学生と日本人学生の交流の様子



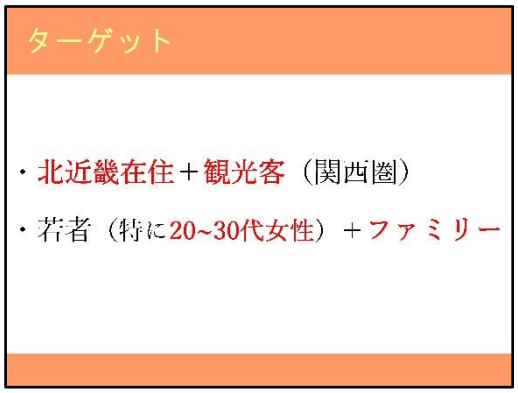
2）フェスの概要

3）ブータン料理

4）ブータンの特徴的な景観

5）会場のイメージ

6）ブータンの民族衣装

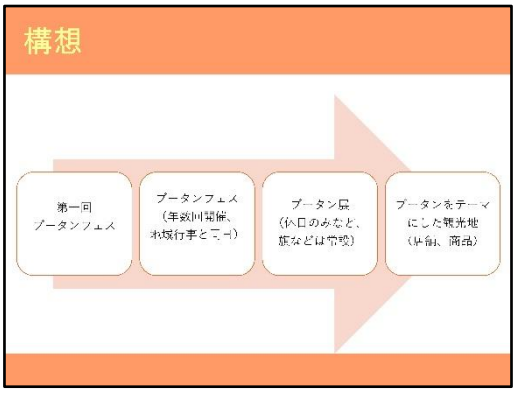


7）ターゲットの設定

8）市場分析①

9）市場分析②

１０）市場分析③



１１）スケジュール案

１２）ブータン料理イメージ①：ご飯と野菜、肉、スープ

１３）ブータン料理イメージ②：ご飯、たまごなど

１４）ブータン料理イメージ③：焼き飯

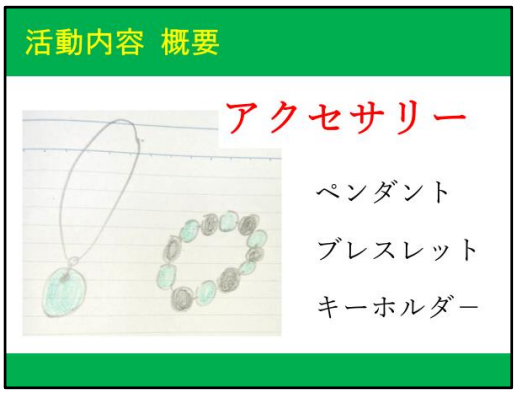
１５）ブータン料理イメージ④：ミルクティ、ザオ（煎ったおコメ）

１６）ブータン料理イメージ⑤：モモ（チベット風餃子）

打ち合わせ資料③：「プチ・ジオパーク」

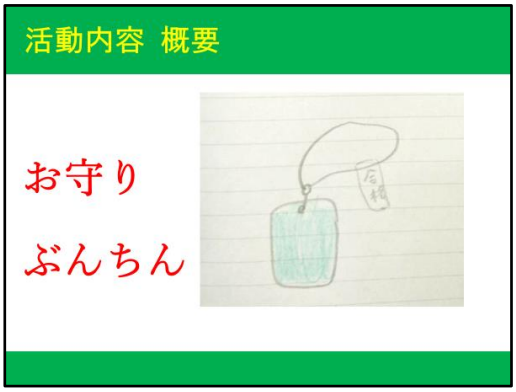
1）表紙。背景写真は蛇紋岩

2）杉山の石の写真

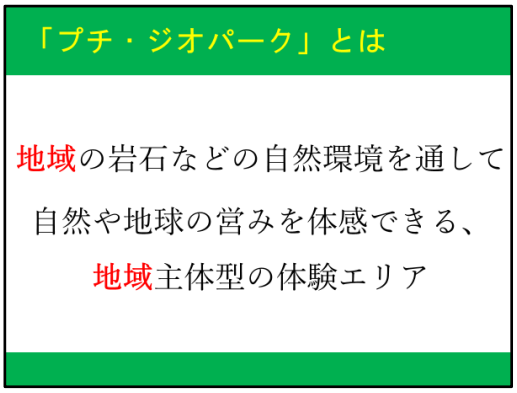


3）活用例案①：アクセサリー

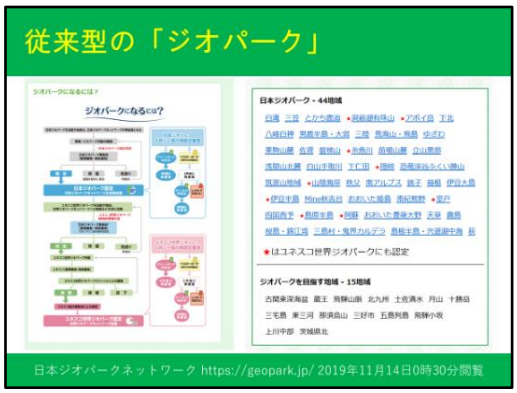
4）活用例案②：湯たんぽ（温石）



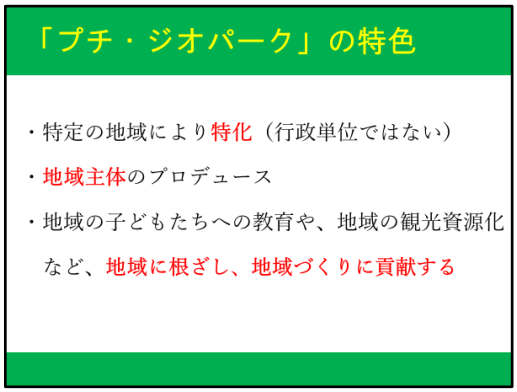
5）活動例案③：お守り、文鎮



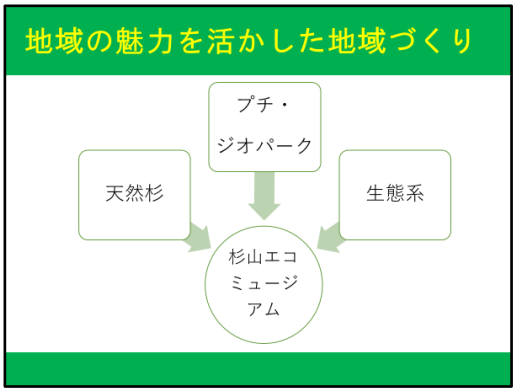
6）「プチ・ジオパーク」とは



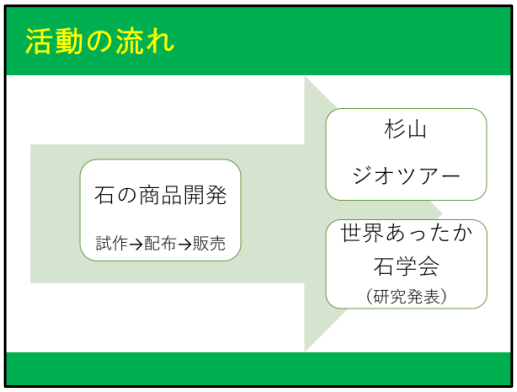
7）ジオパークの説明



8）プチ・ジオパークの特色



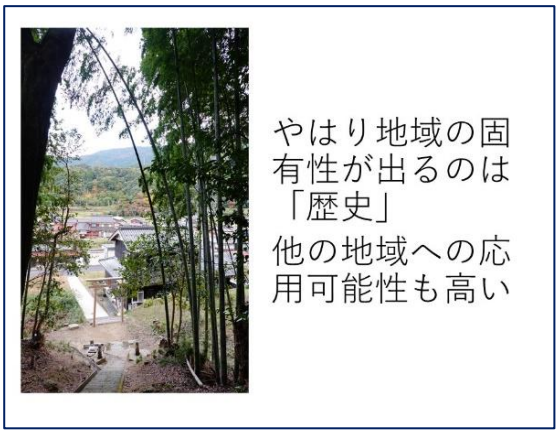
9）地域の魅力を生かした地域づくりモデル



１０）活動の流れ案

打ち合わせ資料④：歴史遺産を活用した地域づくり

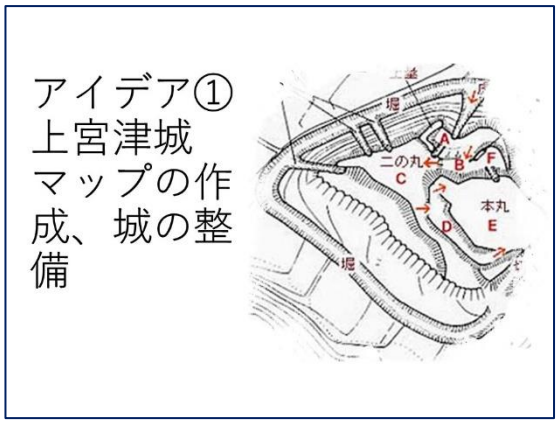
１）歴史遺産を活用した地域づくり



２）地域の固有性が出るのは「歴史」

３）上宮津城跡・・・戦国期の城の段差がここまできれいに残るのは珍しい

４）城山の下に残る大きな防空壕



５）アイデア①

訪れた人が見やすいように道、木の整備を行い、重要ポイントに看板と説明書きを立てるなど。

アイデア②上宮津パンフ、マップの作成

- 集落パンフ　上宮津の歴史を深く紹介(城郭、寺社、関所…)　地誌等の情報をまとめるだけでもそれなりの仕上がりに。
- 集落マップ　(上宮津お宝マップをベースに再構成？)「これ一枚で安心・必要十分」な地図を心掛ける
- 古道マップ　古道ハイカーに向けたわかりやすい地図の作成　(参考)：和歌山県作成の熊野古道マップ

６）アイデア②

・上宮津歴史マップ・・・城、神社、関所の他、地誌等の情報もまとめた集落パンフ

アイデア③地域子供教室(歴史)

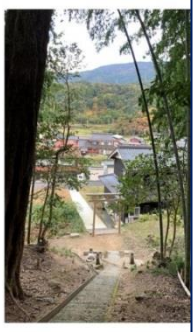
- 講義テーマ例：「歴史と地理から辿る中世の上宮津」

一日のスケジュール例

- 9時～10時45分　座学、読図＠古民家
- 11時～　盛林寺へ
- 12時～　昼ごはん＠盛林寺
- 13時～　上宮津城へ(頂上でお菓子タイム？)
- 15時～　まとめ、アンケート＠古民家

アイデア④　集落歩きツアー(大人向け)

- 現行の関野さん主催のイベントとコラボ



７）アイデア③

地域の子供たちを対象に歴史教室

８）アイデア④

既存のイベントとコラボして大人向けも

アイデア⑤ 地域展示室構想

- 公民館や小学校の一室を展示室に改造
- 地域情報を学べる場に(歴史、地質、パンフレット等入手)

９）アイデア⑤

旧小学校の一室を展示室にし、上宮津の歴史や自然について学べる場所を！

打ち合わせ資料⑤：上宮津城とその魅力（2020 年 2 月 14 日）

2020 年 2 月 14 日（金）

上宮津城とその魅力

京都大学地域振興研究会　吉田彬人

城自体の魅力

・遺跡が完全に近い形で残されていること（中世城郭の「教科書」的存在）
・城主伝承があること
・戦乱の舞台になったこと（vs 細川藤孝、一度は撃退するも 1578 年落城）
・城主菩提寺（盛林寺）が現存していること
・城下に「上屋敷」「札場」「堀ノ下」などの小字が残っていること
・様々な伝承があること
　盛林寺に残されている城の扉とされる板
　「池町」（柿ヶ成）から水を竹樋で得ていたが、敵に知られて断たれ、落城した
　白米を流して窮状を隠し、敵に水があるように見せた
　防御のため、大手川の流路を変更した

観光資源としての魅力

・アクセスの良さ（喜多駅から徒歩 8 分、比高約 80m で登りやすい）
・展望が良く、比較的整備されておりハイキングに最適
・誰でも楽しめる「程よい規模」の城郭
・2020 年大河ドラマ「麒麟が来る」の主人公・明智光秀との関わりが深い
・盛林寺とセットでの PR が可能

今後の課題

・上宮津城 MAP の制作
・地元の方々に上宮津城を知ってもらう
・伐採されたまま城山（頂上付近）に放置されている木々の撤去
・城山北側（小学校裏手側）の竹林の整備（現状：かなり荒廃している）
・遺跡の保護（林道の建設による遺跡破壊の懸念・植樹による地下遺構の破壊の進行）

⇒上宮津城は唯一無二の地域の宝！

１-２．学生の上宮津での地域資源探索活動

１－２－１．学校ミュージアム 2019＆盛林寺コンサート視察（2019 年 11 月 16 日）

旧上宮津小学校で開催された学校ミュージアムを視察した。上宮津や宮津にゆかりのあるアーティストが、各教室に展示をおこなうこのイベントには、地域内外から多くの方々が訪れており、とても活気があった。小学校自体は廃校になってしまったが、この場所を地域のにぎわいや交流の拠点にしようという思いが強く感じられた。上宮津の地域の方々の力だけでこうしたイベントを企画・実施できるというのは驚異的なことだと感じた。また、夜からは、盛林寺で行われたコンサートを見学した。その内容が面白かったのはもちろんだが、広い本堂がいっぱいになるくらいの人でにぎわっていたことに驚いた。こうしたイベントを行うことで、地域の魅力を内外に発信できるのだということを実感することが出来た。

学校ミュージアムの会場となった
旧上宮津小学校

コンサートがおこなわれた盛林寺

１－２－２．舞と謡のワークショップ（2019 年 12 月 7 日）

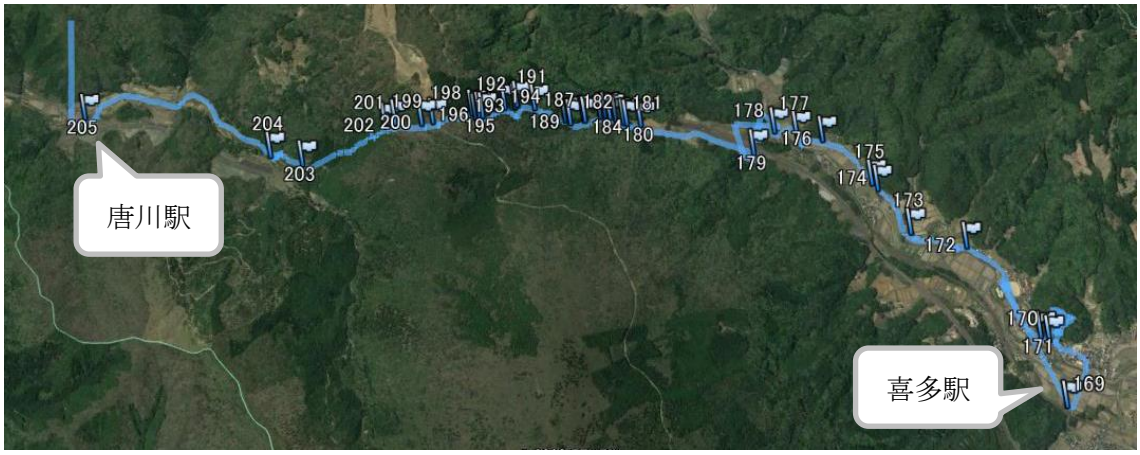
観世龍歌曲サークル「香謡会」が主催する舞と謡のワークショップに参加した。ワークショップの講師を務められた方は盛林寺コンサート（2019 年 11 月 17 日）でも舞を披露されていた方だった。ワークショップでは、能についての軽い説明と、謡と舞の基本を教えて頂いた。最後には、入門である能の一曲の一部分を踊れるようになり、舞を披露することができた。また、同日夜からは上宮津地域会議の報告会・懇親会（喜多下公民館）があり、参加させていただいた。そこでは、京都大学地域振興研究会のメンバー代表として、自分と他の人が提案したアイデアを上宮津地域会議のより多くの関係者の前で発表し、懇親会では今後の活動に関する意見交換をおこなった。

１－２－３．地域歴史遺産の発掘巡検（喜多駅～元普甲道～辛皮駅）（2020 年 1 月 11 日）

平安時代には既に開かれていたという元普甲道は、丹後から京都方面へと通じる古来よりの主要な街道である。現在でも所々に石畳が残り、往時の面影が感じられる。上宮津夢

会議では、こうした地域の重要な歴史遺産である元普甲道の保全・活用を図るため、長年草刈り等による道の整備や観光振興のためのマップ作りなどをおこなってきた。しかし、元普甲道を訪れる観光客は少なく、その資源が十分に活かされているとは言い難い。そこで、新たな地図製作も視野に学生による外部の視点からこの資産の活用を図ろうと考え、その為の調査として GPS の現地実習も兼ねて実際に上宮津地域会議が制作した観光マップを基に元普甲道を辿った。

朝 10 時頃喜多駅を出発し、中世の山城・上宮津城を訪れた。保存状態も良く、地元伝承や城主に関する史料が豊富なこの城は、一見地味ながら地域の人達によって良く整備されており、上手に PR することで観光地として売り出すことが可能なのではないかという感触を得た。その後、上宮津地区公民館でおこなわれていた子供向けイベントを見学し、普甲峠方面へと向かった。　普甲峠の手前までは、旧宮津街道（近世の街道）を通った。街道沿いには、一里塚や多くの石仏、祠、墓などが残っており、歴史を感じることが出来る点でもとても魅力のあるコースだった。峠では、石畳の道等が残っているのを確認することが出来た。こうした見どころを丹念に探し出し、地図化することで道の魅力をより内外にアピールすることが出来るのではないかと思った。



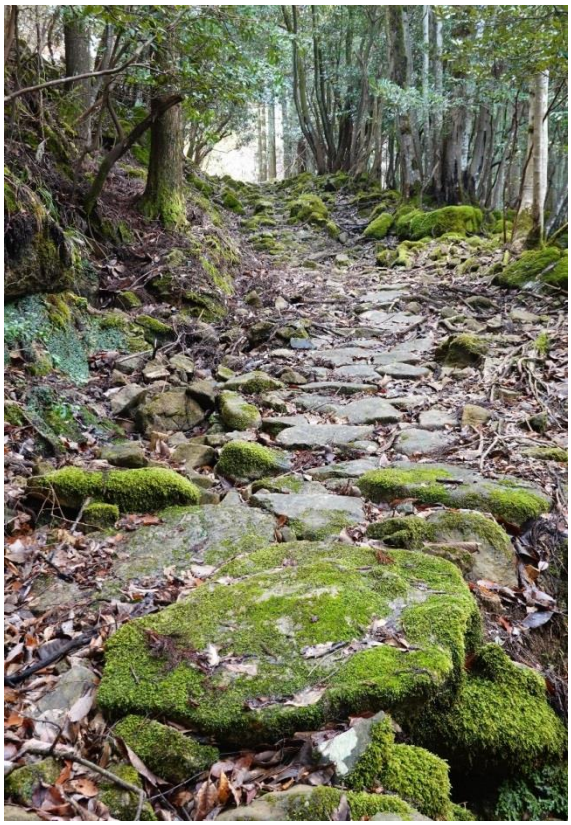
巡検ルート（青線）（喜多駅―上宮津城跡―公民館―普甲峠―辛皮駅）

道中地元の方にもお話を聞く

上宮津城跡

公民館活動に参加していた子どもたち
と交流＆昼食（上宮津公民館）

気づいたことをメモしながら進む



今に残る元普甲道の石畳

設置されていた案内板と標識

街道の分岐点。分かりにくく、改善が
必要な場所もみられた

←笹が茂り、ごみが捨てられるなど整
備の不十分な箇所も

１－２－４．今福の滝＆カフェ“Musubi”（2020 年 2 月 15 日）

今福の滝は今福集落東方の今福川にかかる７段の滝で全落差は 70m 以上にも達し、江戸時代の名所案内にも掲載されるなど、古くからその名が知れた名瀑である。数年前に市の補助金をもとに遊歩道や標識などの整備もおこなわれ、個人のホームページやブログなどでも紹介されている。しかし、現在では訪れる人も少なくなってしまっており、物悲しい雰囲気に包まれている。整備だけに終わるのではなく、情報発信の手段を含めた継続的な情報発信活動や今後の地域づくり事業のなかでの活用を模索する必要性を感じた。

上宮津在住の地域おこし協力隊員の方が上宮津喜多集落で開店予定のカフェ「musubi」を見学した。プレオープン当日とあって店内は多くの地域の人達でにぎわっており、注目度と期待の高さが伺えた。「musubi」の改装工事をおこなった大工の方（上宮津在住）から、地域の子供参加による施工や廃材の活用など、工事の具体的な話を聞くことも出来た。

「musubi」は上宮津初めてのカフェということで、地域住民が集まり交流する場として期待される。さらに、喜多駅からの好アクセスとともに周辺には多数の地域の文化・自然資源（例えば、上宮津城跡、盛林寺（明智光秀の首塚）、今福の滝など）が位置していることから、地域を訪れた人に対する情報提供や地域内・外部者の交流の場として地域づくりの一つの拠点となっていくことが期待できる。

遊歩道入口

遊歩道から望む今福の滝

１－２－５．空き家(古民家)の活用（2020 年 2 月 14 日～15 日）

増加する空き家とその活用は上宮津地区において大きな課題である。本活動では上宮津地域会議の関係者１名が 2019 年度から借り受けた古民家の活用事業に関する話し合いをおこなうとともに、地域の方とともに修繕活動に参加した。修繕作業（２階１室の床の張替え（フローリング））には、３名の学生が参加した。床張替え作業では、大学の講義では学ぶ機会のない大工道具の使い方の他、木材の性質なども地元の大工の方の指導により学ぶことができた。また作業の合間には、張替え作業に協力するために集まった地域の方々の思いを聞くことも出来た。古民家の再生が地域活性化の一つのきっかけになることを期待

する声が多かった。

古民家の外観

昼休憩

協働修繕作業（床の張替え）

１－２－６．上宮津わかもの会議（2020 年 2 月 22 日）

上宮津わかもの会議は、上宮津に住む若者の意見・要望を積極的に取り入れた新たな地域のビジョンを作成し、今後の地域づくりを推進することを目的に福知山公立大学と上宮津地域会議の協働により開催されたものである。１５歳～４５歳の上宮津在住者１２名、上宮津出身の京都市在住者１名の計１３名が会議に集まり、福知山公立大学の学生 4 名がファシリテーターとなり、地域の課題や今後の地域づくりについてのグループディスカッションがおこなわれた。京都大学地域振興研究会からは３名の学生が参加した。グループディスカッションでは様々な視点から見た地域の課題、取り組みに対する意見やアイデアが提示された。京都大学地域振興研究会のこれまでの上宮津での活動（主に話し合いや打ち合わせ）は、特定の活動団体のメンバーとして地域づくりに取り組んできた方々を中心としておこなわれてきたが、裾野を広げて地域の様々な人と協働活動していく重要性、必要性が明らかとなった。上宮津わかもの会議の結果は、上宮津地域会議、福知山公立大学の協働によって新たな上宮津ビジョンの一部に組み込まれる予定である。

第２章
日置での活動記録

日置地区での活動は、宮津市まごころ市（第３章参照）の組合長をしておられる瀬戸氏（日置地域会議・会長）との付き合いがきっかけとなり宮津市大学等連携事業の助成を受けて2019 年度秋からスタートした。連携事業として日置地域会議から提出された地域の課題は“コミュニティの元気がない”ということであった。しかし、“外部者”である我々は日置のことを全く知らないという課題にすぐさま直面した。そこで、まずは地域の話し合いの場に参加し、少しずつ日置のこと、そして日置に住む人たちのことを知り、それを踏まえて地域の課題に取り組んでいくこととした。本章は、日置を知ることに取り組んだ 1 年目の活動経過記録である。

２－１．日置地域会議への参加（2019 年 12 月～2020 年 2 月）

２－１－１．第一回学生合同地域会議（2019 年 12 月 19 日）

日置地域会議役員、及び日置での活動に参加する学生（京都大学地域振興研究会）の間でそれぞれの自己紹介やこれまでの活動が紹介された。また、これからの活動や地域づくりに関する意見交換がおこなわれた。会議の概要は下記の通りである。

1 日時：2019 年 12 月 19 日 19 時～21 時
2 場所：日置公民館
3 参加者：日置地域会議役員１０名、大学生６名、引率教員１名
4 会議概要
(1) 地域内の農業、漁業、および職について
- 漁業で生計を立てる人が減っているが、趣味で海へ出ている人は一定数いる。漁業権がない人でもとった海産物をお金にできる仕組みがあると良いかも
- 日置の農業の今後が心配。高齢化が発生している。農地からの転用などの土地活用について議論する必要がある
- 若者の目線で、一次産業を活性化できないか
- 農産物のネット販売など、流通の工夫ができると良いが、ネットでの情報発信では多くの人に注目してもらえるような特色が必要
- 日置にも、職がないわけではないはずだが、稼げる地域にしていく必要がある

(2) 地域活動について
- 敬老会などの地域活動が、あまり活発ではない
- 地域行事への参加者が少ないので、地域活動に参加するという雰囲気をつくっていきたい
- 地域に住む人が協力しあって地域を盛り上げていくような、地域内のサイクルが

生み出せないか

- 地域の祭りが残っていたり、地域の人で子供たちに声をかけたり、というような良いところも残っている
- 地域に住む人が、地域について意見を言いやすい環境や雰囲気が整っていない
- 地域のことを考えて地域のために行動するというよりも、自分のことで精一杯の人が多い

(3) その他

- 若者が日置から流出している。日置を出た若者が、日置に戻ってこない
- 中学校が廃校になったのが残念。学校の生徒数があまりに少ないと、移住しづらい、という事例もある
- 日置を大切に思ったり、気に入ってくれたりする“ファン”をつくっていきたい。地域の人、子ども、買い物客、観光客など
- 今までの地域会議の中で、参加者一人一人が最も本音で話せた会になり良かった。今後も是非ともこのような会議を継続していきたい

２－１－２．第二回学生合同地域会議（2020 年 2 月 5 日）

2 月 5 日～2 月 7 日実施の対面アンケートについて話し合いがおこなわれた。具体的には実施中の対面アンケート初日（2 月 5 日）の状況報告や 2 月 5 日時点でのアンケート実施に関する意見や感想などが話し合われた。

1 日時：2020 年 2 月 5 日 19 時～21 時

2 場所：日置公民館

3 参加者：日置地域会議役員１０名、大学生４名、引率教員１名

4 会議概要

(1) 対面アンケートに対する意見・要望・感想

- アンケートをやってみて、地域や地域に住む人たちのことを知っているようで知らない、ということがわかった
- それぞれの人の思いを共有する場がないので、それを聞いて欲しい
- この対話アンケートでは、対話をすることで、いろんなことを引き出していると思う。アンケートに答える者自身も、自分自身で考えながらインタビューに答えている。
- 対面式でアンケートを実施することそのものが、地域活性化になっているように思う。用紙にチェックするような単純なアンケートでは、様々な面で限界がある
- アンケートに若い者が入っていないのは問題ではないか
  ⇒若者は仕事の都合で無理なので、また土日など若者も答えられる時にやりたい
- 今回のアンケートを含めトップダウンでない、色々な人の意見を吸い上げていく

取り組みにしてほしい

⇒地域会議のように会議をしても、それぞれの項目（議題）だけの話し合いになってしまう。それぞれの人の地域への思いを聞けていない。地域への思いや、地域がどうなって欲しいか、自分ならこれができる、ということを聞き出せれば

- できれば、それぞれの人の、若かったときのビジョンや夢を聞いて欲しい（昔どんな思いを持っていて、それがどうなったか）
- 地域会議が何をしているのか、まだ地域の人はあまり知らない。全戸アンケートをとって、それを地域会議に反映させるのも良いのでは
- 今回の対話アンケートの内容を元に、全戸配布用のアンケートの内容を考えると良い。当たり障りのないアンケートではないものが完成するかも
- 一回の紙アンケートではなく、二回、三回とやって、より深く聞いていきたい。役員でない人の意見も聞きたい。次回紙アンケートの設問づくりは、ぜひ学生と地域の人で一緒に考えてやりたい
- 日置の農業を、それぞれの人がどう考えているかを調べて欲しい。農業の高齢化が進んでいる。協働で農業をする「農業グループ」のようなものを立ち上げるべきか、それとも、農業以外の産業にシフトすべきなのか、住民の意見を聞きたい
- 日置の地域づくりを進めていくためには、地域の人自身も、学生と一緒に、地域のいろいろな気になる人に話を聞けるようになると良い

(2) その他

- 現在、日置を出て行く若者は、将来日置に帰って来たいと思っていないのではないだろうか

  ⇒自分にも子どもがいるが、自分の子どもに「日置に帰ってきてほしい」とは言いにくい。仕事がないため

  ⇒定年になってから返ってくる人が、もっと増えれば良い。老後に日置で農業して生活していくと良いのでは

  ⇒地方で生活していくのは、お金がかかるので大変

  ⇒地域にはしがらみがあるので、戻って来ないのでは
- 農業は生きがいになる

  ⇒農業の面白さは、ドキドキ感やわくわく感があること

  ⇒自然薯のような、回転率が高く、かつ高く買い取ってもらえるものを栽培するのも良い

２－１－３．第三回学生合同地域会議（2020 年 2 月 14 日）

会議では 2 月 5 日から 7 日にかけて実施された第一回対面アンケートの結果報告（詳細は次項「２－２．第１回対面アンケート」を参照）が学生よりおこなわれた。これに対し地域会議の参加者からの感想の他、地域の課題の整理、来年度実施予定の全戸アンケート調

査の準備に関する話し合いがおこなわれた。会議の概要は下記の通りである。

1 日時：2020 年 2 月 14 日 19 時～21 時
2 場所：日置公民館
3 参加者：日置地域会議役員１１名、大学生３名、引率教員１名
4 会議概要
(1) 第１回対面アンケート結果に関する感想
・ 日置には様々な魅力や資源があり、多くの人がもったいないと思っていることがわかった
・ 地域の他の人とも積極的にこのような情報を共有していこうと思った
・ 課題とともに活動のアイデアも出ているが、活動に対して自分はこういうことができるという回答も欲しかった
(2) 地域の課題～地域の雰囲気
・「誰かがしてくれる」という雰囲気があり、なかなか殻を破ることができない
・活動している人は限界を感じているが、地域として今ひとつまとまらない
・やろうという地域全体の盛り上がりがでない（なぜかはわからない）
⇒危機感が住民の間で共有されていないのでは
(3) 地域の課題～活動の継続性
・補助金が終われば活動が終わってしまい、継続性（継続のための施策）がない
・上宮津では上手くいっているように見える
⇒なぜ日置では上手くいっていないのか、上宮津と日置のアプローチや組織運営の違いなどを学生さんが調査・報告してくれてもおもしろい
(4) 地域の課題～情報共有
・補助金などを受けて活動している人もいるが、周囲の地域の人たちへのアナウンスがなく、一部の人達の作業で終わってしまう
・なにか取り組みをしている人がいても、何をやっているのか、またその目的がわからない
・取り組みに対して地域や組織内での意識の共有がない
・以前は回覧板などで情報の周知を図っていたがあまり定着しなかった
⇒情報発信する媒体や回覧板を回す方法などを見直してみてはどうか
(5) 全戸アンケート調査の準備（来年度実施予定）
・先に出た地域の課題(2)~(4)の解決のヒントになるようなアンケート（項目）を実施する
・学生に任せるのではなく、みんなでアンケートを考える
⇒次回の会議までにどのようなことをアンケートで聞きたいか、各自１質問準備してくる

(6) 今後の予定確認

・ 2 月下旬～3 月上旬　次回地域会議の開催（日程は 1 週間以内に調整し連絡）
*3 月 7 日に決定したがコロナ感染症リスクのため延期

学生合同日置地域会議の様子（2020 年 2 月 14 日（日置公民館））

２－２．第一回日置対面アンケート調査（2020 年 2 月 5 日～7 日）

実施日：2020 年 2 月 5 日～2 月 7 日

実施メンバー：北野清子、吉田彬人、松原加奈、森下航平

主な協力者：瀬戸孝明氏、吉田悟氏

実施目的：日置の地域会議に参加する中で、地域会議内外の様々な層の方たちに日置という地域や自分達の生活についてどのような意識を持っているのか詳しく知ることで将来における日置の地域づくりや活動方針が見えてくると考え、個人に対して聞き取り調査を実施した。聞き取り調査には半構造化された質問用紙を用いた。これは質問事項にとらわれず地域の方々の日置への思いや要望を広く深く聞き出し、また日置で地域の方と協働で活動を実施する学生自身が日置についてより深く知り、興味をもって活動をおこなうためである。

聞き取り対象者：学生側で調査したい人を挙げ、アンケートに協力していただく方々のリストを瀬戸氏に作成していただいた。学生側が挙げたのは［祭りの中心メンバー・子供有家族・ワイワイグループ・日置地域会議の方］など、地域の活動に関わっている方。3 日間で計 12 組の方々に聞き取り調査を実施した。

実施方法：聞き取り調査は 4 名の学生によって実施された。瀬戸氏もしくは吉田氏の同伴のもと、対象者の自宅、作業場もしくは公民館等で聞き取りは実施された。聞き取りは４名もしくは状況に合わせて２グループ（学生２名ずつ）のグループに分かれておこなわれた。

質問内容：以下の４点を中心に聞き取り調査を実施した。

①聞き取り対象者のライフヒストリーや普段の活動
②地域に対してどんな思いや要望を持っているか
③地域会議についてどう思っているか
④廃校（日置中学校）の今後の活用について

結果：聞き取り調査のなかでは様々な話が出てきたが、その中でも１）自治会や地域会議に関する意見、２）教育・学校に関する意見、３）農業に関する意見、４）公民館活用（廃校）に関する意見、５）日置に対しての要望・理想・思い、６）その他の計６つのカテゴリーに分けてアンケート結果の報告とする。

１．自治会や地域会議に関する意見

・ 反対意見を言う人がいないので、話はとんとん進むが、それぞれ持っている意見が集約しにくいという実感がある（男性）
・ 地域会議はどのようなことをしているのか内容がわからない（男性）
・ 地域会議に入ってよかったことは地域に少しでも貢献していると思える所。また、年上の人とも知り合いになれたこと。悪かったことは仕事に支障が出ること（男性）
・ 地域会議は一部の人しか関わっていないからより多くの人が関われればいいと思う（男性）
・ 仕事をしている若い世代にも地域会議に参加してほしい（男性）
・ 日置自体にお客さんがいないと商売にならないし、地域自体が活性化しないと仕事にならないので地域のために貢献するのは自然なことだ（男性）

２．教育・学校に関する意見

・ 日置は生徒数が少ない分、役職を必ずうけもたなければならないので生徒が積極的に育つ（男性）
・ 自分が中学生だったころ、部活の選択肢も男女それぞれ一つずつしかなく、また、高校入学時も中学からの知り合いが少なく過ごしにくかった。そのため、自身の経験からある程度の規模を有し部活動の選択肢が広い中学校の合併には賛成している（男性）
・ 中学校廃校によって、地域に人が増えるチャンスを失ったと思う。子持ち移住者にとって学校があることは大事。また、人数が少なくても環境を整えこの土地で育つことが大事だと思う（男性）
・ 学校は人数も少ないがその分、先生がちゃんと見てくれるので安心（女性）

３．農業に関する意見

・ 各家庭単位での家庭菜園の余剰を気軽に売れたらみな小遣い稼ぎになっていいのではないか（男性）
・ 浜の人達はなかなか家庭菜園で作ったものを持ってこないため、直売所をやろうとしても安定した供給が難しい（男性）
・ 日置は優良農地に指定されているがゆえに転用が難しい。農業問題は一番だが、その

次は雇用問題があり、工場誘致などが切り札になるかもしれない（男性）

４．公民館活用についての意見

・ 中学校に公民館が転移することによって、上からのアクセスが悪化するし、そのあたりのことを行政は考えていない（男性）
・ 今までの公民館はトイレやキッチンが使いにくかったが、新しい公民館はバリアフリーでトイレやキッチンも綺麗になって、子どもも使いやすくなって嬉しい（女性）
・ きちんとした体制の加工グループがあれば、加工施設を作るのもよいかもしれないが、まずは加工グループの体制づくりからすべき（男性）
・ エレベーターがないため、活用すると言っても年寄りには酷な話である（男性）
・ エレベーターがなく、イベントの道具を運ぶのが大変（男性）
・ 与謝野町ではパチンコ屋の敷地が老人の憩いの場になっているように、中学校もお年寄りの憩いの場になればいいと思う。日置にはカフェが少ない（男性）
・ 公民館活用以前に、中学校が廃校になった経緯に納得していない（男性）
・ ２階もしくは３階には加工施設が欲しい。そして、加工施設は誰でも使えるようにすると良い（男性）
・ 様々な利活用があるが、無理やり何かをいれると続かない。ほっといても地域の人たちの間で勝手にまわってゆくものをいれるべき（男性）
・ とりあえず１階だけやってみて、いずれ２階３階をやっていけばいいと思う（男性）

５．日置に対しての要望、理想、思い

・ 舞鶴と比べて仕事の選択肢が少なく、日置で安定した収入を得られる生活基盤ができたらよい。例えばスイカのブランドを作るとか、山菜や駆除した害獣を気軽に売れる所を作るとか（男性）
・ 日置にもともと住んでいる人は無関心な人が多く、ボランティア精神が少ない人が多い。子育てサロンや地域の見守り隊も大体は地域の外から来た人が多い（女性）
・ こどもが「日置を出たい」と言えば出ればいいと思う。こどもに「日置に住んでほしい」とは言ってこなかったが、日置のいいところや田舎での生活が楽しいことを教えてきたので、子どもはいずれ日置に帰ってくる（男性）
・ 日置の農業の高齢化の問題は、家庭の問題だと思う。それを行政が農地にお金を出して支援しようとするが、それは本当に行政が力をいれるべき問題なのか？と疑問に思う（男性）
・ 上と浜の対立はあまりないが、上の世代だとまだわだかまりがある。お金が関わると問題が出てくる（男性）
・ 新しく日置に入ってくる人もいるがまた出て行ってしまったり、よそから来た人を受け入れる体制がない。新しく入ってきた人が相談できる場があったらいいと思う（女性）
・ 日置地域は未婚の人が多く浜では 10 人ほど。男性が多く深刻な問題だと思う（女性）

・　国道に歩道が欲しい（男性）
・　宮津湾と稲湾はモンサンミッシェルと組んで湾１００選に選ばれているので、湾を歩ける遊歩道を作ると良いのでは？
・　宮津は天橋立だけに観光資源を頼りすぎている（男性）
・　地域の人自身、何がしたいかということよりも、観光客が何を求めているかに合わせていかないと地域は活性化していかない。経済以外の豊かさ（自然、食、コミュニティ）の魅力を発信することが大事（男性）
・　日置のお米を売りたい。「にしがき」で炊き出しをしてマンションに住んでいるお金持ちのお客さんに試食してもらいリピーターをつけたらいいと思う（男性）
・　日置には使わないともったいない資源がある。すでにあるものを利用すべき。例えば、川や海を利用し、漁師と民宿が連携して民宿をより活発にする。リピート客も多い海水浴場をもっと売り出したらよいと思う（男性）
・　にしがきの営業によって地域にこぼれてくるお金をちゃんと拾えるようなしくみを作れたらよい（男性）
・　地域活性化のために何をしたらいいかわからないのが正直な所。農業は大事だが、個人的には他の道も探索したい（男性）
・　海水浴場とコスモスを日置の景観の売りにしていきたい（男性）
・　あるがままの日置を見せて観光客の方に知っていただきたい（男性）
・　コスモスを売りにしている国道に公衆トイレが一つもなく、せっかく観光バスが泊まるようになったのにもったいない。また、コスモスの取り組み自体も住民の人が知らないので周知できたらいいと思う（男性）
・　日置のお米は名古屋の JA の人もほめてくれるほどなので、上手に売り出していけたらいい（男性）

６．その他の意見

・　オリーブに関して、日置は栽培北限で不安定な所なのに、なぜオリーブを選んだのか疑問である
・　祭りは村の象徴である、村に生きる証なので残ってほしい

調査により気づいた点（実施学生の意見・感想）：

・松原加奈（文学部・２回生）

様々な案や日置の今後の方針があるがみんな自分のなかにしまっておいて共有できていないのはもったいない。それぞれ心の中にしまったままだとそれ以上にアイデアが発展しないし実現可能性も低い。住民のなかでだれがどのようなことをしているのか・したいのか、ということを明らかにしてみんなで協力して実現出来る場をつくるべきだ

・北野清子（総合人間学部・２回生）

まず、実施する中でわかったことは、それぞれの人が色んな意見をもっているものの、日

置に対して何らかの要望や思いがあるということだ。これは考えれば当たり前のことだが、地域独特の「触れてはいけない、聞いてはいけない」という雰囲気によって、それぞれの思いは案外埋もれてしまっているものだ。「外の学生」という存在はやはり、そういう雰囲気をいい意味で壊すのにとても良い起爆剤になるらしく、今回のアンケートでもだいぶ本音を聞き出せた実感がある。
また、次に対話式アンケートの他に、広く浅く聞くような各戸配布のアンケートを実施する必要性に気づいた。地域会議に参加した際、他のメンバーは各戸配布のアンケートの実施を期待していたようであったし、多くの人に地域会議の存在をアピールする上でも「各戸配布」という所に大きな意味があるだろう。また、そうしたアンケートをコチラが作るのではなく、地域会議の人達と一緒に作ることによって、地域会議の意欲もひきだすことが出来る。まさに、一石二鳥。いや二鳥といわず三鳥、四鳥とさらなる良い結果が招ける気がしている
・吉田彬人（経済学部・１回生）
今回日置の方々にアンケートを行う中で、実に多様な世代・職業・考えを持つ人がいることが分かった。皆日置のことを思い、より良くしたいと考えている一方、何をすべきかわからないという声が多かった。また、アイデアや要望を持っている人も、それを発信することに「何となく」ためらいを感じ、そうした場や機会が無い等の理由から皆に伝えられないのだと感じた。他の人が何を考えているのかがわからないことも、具体的な行動・活動を始めづらい一因なのではないかと思った。
一方、日置には実際に何か具体的な活動（例：国道沿いにコスモスを植える）をされている方も多いのだが、そうした活動が日置の内部で十分に知られていないという現状もあった。
私個人の感想として、日置をより良くするための第一歩は、日置の中で情報共有が進むことだと思った。隣の人が、あるいは別の団体が、①どのような思いを持ち②何を考え③どのような活動を行っているのか。これを日置の皆さんが相互に理解・把握していることが重要だと思った。こうすることで、より日置が内部から活性化していくことが出来るのではないか
・森下航平（総合人間学部・１回生）
　日置の魅力を熱く語り、日置にある素敵なものや環境を楽しみながら生活する人や、日置で自分のやりたいことに挑戦して自分らしく生活している人にたくさん出会えたのが印象的だった。「日置にはこんな魅力があるんだ」「この地域では、実はこんなふうな暮らしもできるんだ」「ここでは自分のやりたいことに挑戦して自分らしく生きることができるんだ」ということを、多くの人に発信していければ、それが日置の活性化につながる可能性があると感じた。特に、日置の子どもたちや、北近畿を出ていった人、移住に興味がある人などに伝えていければ、日置に住む人を増やしたり、日置につながりをもって生活する人を増やしたりするきっかけになりうると感じた。ツアー、映像、マップ、SNS など、い

ろいろな方法が考えられるが、日置で自分らしく生活しているそれぞれの方の思いや生き方を直接感じられるようなものがおもしろいと思う。
また、これから挑戦したいことがある方や、まだ始めていないが何かやってみたいと思っている方もいらっしゃるのもわかった。そういったチャレンジしたい人を支援できるような組織や環境があれば良いと感じた。支援の方法は、金銭、技術、情報、人の紹介、など様々なものが考えられるが、まずは、気軽に相談したり思いをシェアし合えたりできるような場をつくるのも良いかもしれない。どのような地域づくりをおこなっていくか、制度面などに関する、地域全体での議論を進めて行くのと同時に、日置の魅力や日置で自分らしく生きている方の存在を発信することや、日置に住む人が自分らしく生活できるようにサポート体制を整備することも進めていければ、それぞれの人に寄り添った地域づくりができると思う

雪の中、アンケートへ

対面アンケート実施後

２－３．学生の日置での地域探索活動

２－３－１．日置文化祭視察（2019 年 11 月 17 日）

文化祭会場の日置小学校体育館内には地元産の自然薯や獅子柚子、オリーブの販売の他、日置生花グループなどの作品も展示されており、地域でおこなわれている農業活動や住民活動の一端を知る機会となった。また、会場であわもちかきもちなどの出店販売をおこなっていた日置地域の活動団体「わいわいグループ」のメンバーの方に、日置のことをはじめ､グループ設立の経緯や活動についてお話を聞く機会を得た｡｢わいわいグループ｣は 2010 年に女性２人の立ち話をきっかけに発足した活動団体であり、あわやそばなどの雑穀の栽培、またそれらを用いたそば祭りやそうめん流しなどのイベントを開催している。夏におこなわれているそうめん流しイベントでは日置の各家庭から無償で野菜などの材料提供がおこなわれており、団体の活動メンバーそして日置に住む人々の“支え”や“思い”の繋がりから作り上げられている地域イベントの側面を知ることができた。

文化祭会場の日置小学校

地域の方の作品展示（上婦人会）

２－３－２．日置そば祭り視察（2019 年 12 月 8 日）

日置地区公民館では日置でとれたそばを使って毎年 12 月にわいわいグループや婦人会などの地域の方々が十割そばを打って販売している。そば以外にも地元産の野菜や手作りのパン・お菓子が並んでおり、当日は地元の人達や日置外からのお客さんもおり、にぎわっていた。公民館の２階で朝早くから婦人会の方がそばを打っている。にぎやかで楽しそうな中、地域会議メンバーや市長さんが見に訪れる。出来たそばは順次一階でふるまわれ、その間も婦人らはそばづくりにいそしんでいた。私たち学生も今回そば作りを手伝わせてもらい、できたそばを食べながら地域の方たちのお話を伺った。作っても作っても足りないくらい多くの方が訪れ、日置の女性たちの活発さや地域の人と人とのつながりを見ることができた。

地域の人たちに教えてもらいながらのそば打ち

地元産の加工品

第３章
宮津まごころ市での活動記録

「宮津まごころ市」は、宮津市中心部近くに位置する農産物等直売所である。もともとは週末にテントが設置され、生産者による対面販売がおこなわれていたが、その後現在の形で店舗販売がおこなわれるようになった。2017 年度よりブータンやミャンマーからの招へい者や学生の地域の農業振興や地産地消取り組みを学ぶ視察先として継続的に利用させて頂いている他、2018 年度からは宮津地域の農業、また地産地消の現状や課題を可視化、把握するために購買者や出荷者に対して調査を実施している。また、2019 年度からは宮津市大学等連携事業（宮津市）の助成を受け、まごころ市生産者組合と京都大学（京都大学地域振興研究会）の協働のもと取り組んでいる。

３－１．まごころ市出荷者アンケート調査（2019 年 2 月）

実施日：2019 年 2 月 4 日～2 月 6 日

実施者：北野清子、森山天貴、吉田彬人、我妻俊介

調査概要：2018 年に実施した消費者店頭アンケート（調査結果は「農山村学生実習のための『丹後アジア研修拠点』形成事業 資料集」の資料 14（P.310-322）を参照）に続き、農産物出荷者の現状や課題を明らかにするための聞き取り調査を実施した。また、事前打ち合わせの席においてまごころ市出荷者組合・組合長である瀬戸氏らから「生産者が元気のでるようなアンケート調査を実施して欲しい」との要望を頂いた。これを踏まえ、学生が出荷者から直接生産の現状や課題、夢などの話を聞き、共有した課題を一緒に考える場を創出することで“元気”の一歩目とすることを目的に、学生（現・京都大学地域振興研究会メンバー）の協力のもと、出荷者の対面式聞き取り調査を 2019 年 2 月 4 日～6 日にかけて実施した。

調査方法：まごころ市出荷者のなかでも特に農産物（加工品は除く）の出荷をおこなっている２７名を対象に対面による聞き取り調査を実施した。聞き取り調査は４名の学生が２グループに別れ、それぞれのグループが自宅や作業場を訪問し、およそ１時間～1 時間半にわたる聞き取りをおこなった。対面式聞き取りには半構造化されたアンケート用紙を用意し、項目に沿った聞き取りを進めながら質問者（学生）が気になった点があれば、自由に質問、話し合いをおこなう方式をとった。また対面による聞き取りの他に別途アンケート用紙への記入を依頼し、後日郵送により回収をおこなった。また、まごころ市の売上データなどの収集もおこなった。

＜半構造化アンケート＞

以下に示す５つのテーマとそれに関連した質問項目を設け、対面による聞き取り調査をすすめた。

A）農業とまごころ市への農産物の出荷状況

⇒農業を始めたきっかけ、まごころ市に出荷している農産物、栽培しているが出荷していない農産物と出荷していない理由等

B）まごころ市への出荷

⇒まごころ市への出荷理由、他の出荷者との交流状況、購買者との交流状況等

C）農業、まごころ市に対する将来の展望

⇒今後の考えている挑戦（農業やまごころ市に対して）、どのような農産物を販売していきたいか、どのような人に購入してもらいたいか、今後のまごころ市の取り組みとして期待すること等

D）地域と地域の農業問題

⇒地域の過疎や離農について、宮津市が取り組んでいる農業政策などについて等

E）農業、まごころ市の良い点について

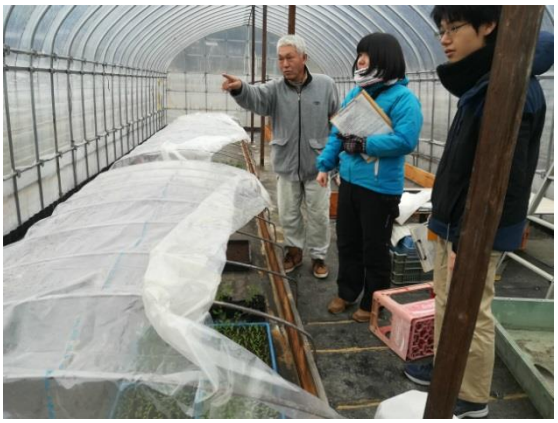
⇒やりがいや満足感などについて

調査の様子

事前打ち合わせ

聞き取り調査①

聞き取り調査②



栽培の様子も見せ頂く

資料：配布アンケート（後日回収用）

まごころ市を元気にするアンケート アンケートNo.

(組合員の方御本人がご記入下さい)

あなたとご家族についてお聞きします

問１．あなたを含めて同居（同一敷地内を含む）している家族構成はどれですか。(当てはまるもの**ひとつ**に✓をつけてください)

□一人暮らし　□夫婦のみの世帯　□親と子どもの２世代家族
□祖父母と親と子供、もしくは親と子供と孫の３世代家族
□その他

問２．あなたを含めて同居している家族の人数を教えて下さい。(当てはまるもの**ひとつ**に✓をつけてください)

□1人　□2人　□3人　□4人　□5人　□6人　□7人以上

問３．お住まいの地域を教えて下さい。(当てはまるもの**一つ**に✓をつけてください)

□養老地区　□日ケ谷地区　□日置地区　□世屋地区　□府中地区
□吉津地区　□宮津地区　□上宮津地区　□栗田地区　□由良地区

問４．あなたのお生まれの地域を教えて下さい。(当てはまるもの**ひとつ**に✓、もしくはご記入ください)

□養老地区　□日ケ谷地区　□日置地区　□世屋地区　□府中地区
□吉津地区　□宮津地区　□上宮津地区　□栗田地区　□由良地区

宮津市以外の方(ご記入ください)：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（都・道・府・県）（市・町・村）

問５．農業以外にされている、またはされていたお仕事はありますか。(各項目当てはまるもの**ひとつ**に✓をつけてください)

	従事していない	従事している（現在）	従事していた（退職・離職）
漁業	□	□	□
林業	□	□	□
畜産業	□	□	□
旅館・ホテル経営	□	□	□
飲食店経営	□	□	□
その他自営業	□	□	□
公務員	□	□	□
会社員	□	□	□
団体職員	□	□	□

＜１ページ目＞

NPO などの非営利団体	□	□	□
パート・アルバイト	□	□	□
その他 （ありましたらご記入ください： ）	□	□	□

農業についてお聞きします

問６．あなたは何年農業に従事されていますか。(ご記入ください)

（　　）年

問７．あなたが農業をはじめたきっかけをお教えください。(当てはまるものを **3 つ以内**で選び、かっこ（ ）内にきっかけとして重要なものから **1 から 3 の番号**をご記入下さい)

（　）実家が農家で引き継いだ　（　）収入を得るため　（　）以前、従事していた仕事があわなかった　（　）農業がしたかった　（　）農地を放棄地にしないため

（　）自家消費の農作物を作るため

（　）親類・ご近所へのおすそわけ　（　）趣味　（　）健康やストレス解消のため

（　）地域活性化のため　（　）知り合いにすすめられた

その他のきっかけがあれば下にご記入ください：

問８．農業を始めるにあたって、農業の技術は主に誰から教わりましたか。(当てはまるものを **3 つ以内**で選び、かっこ（ ）内に重要なものから **1 から 3 の番号**をご記入下さい)

（　）祖父母　（　）親　（　）兄弟姉妹　（　）親戚　（　）家族以外の農業をよく知る人

（　）農業普及員　（　）JA　（　）学校（職業訓練や農業大学校など）

（　）書籍や雑誌　（　）法人　（　）NPO などの団体

（　）誰からも教わっていない(ご自身の試行錯誤)

（　）その他（具体的にご記入ください：

）

問９．現在、農業の技術はどのように習得されていますか。(当てはまるものを 3 つ以内で選び、かっこ（ ）内に重要なものから 1 から 3 の番号をご記入下さい)

（　）他の生産者（個人）との情報交換　（　）産者団体（グループや法人）との情報交換

（　）家族以外の農業をよく知る人　（　）農業普及員　（　）JA

（　）学校（職業訓練や農業大学校など）　（　）書籍や雑誌　（　）インターネット

（　）ご自身の試行錯誤

（　）その他（ご記入ください：

）

問１０．あなたの耕作面積をお教えて下さい。(ご記入ください)

＜２ページ目＞

土地形態	自作値（所有地）	受託地	委託地
水田	アール	アール	アール
普通畑	アール	アール	アール
果樹園	アール	アール	アール
その他	アール	アール	アール

＊ １反=10 アール、１町歩=100 アール

問１１．一年におおよそ何品目、作付されていますか。(ご記入ください)

おおよそ（　　）品目

問１２．あなたが生産している農作物（穀類、葉菜類、根菜類、果菜類等）について、作付面積が大きなもの（第１位～第３位）を教えて下さい。（**作物名と品種名、おおよその作付面積**をご記入ください）

第１位：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（おおよその作付面積：＿＿＿＿＿＿アール）

第２位：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（おおよその作付面積：＿＿＿＿＿＿アール）

第３位：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（おおよその作付面積：＿＿＿＿＿＿アール）

問１３．あなたが出荷している農作物（穀類、葉菜類、根菜類、果菜類等）について、出荷金額の大きなもの（第１位～第３位）を教えて下さい。（**作物名と品種名**をご記入ください）

第１位：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

第２位：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

第３位：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

問１４.あなたの世帯の農業と収入の関係を教えてください(当てはまるもの**ひとつ**に✓をつけてください)

□ 農業が世帯の主な収入源となっている
□ 農業が世帯の副収入源となっている
□ 農業を世帯の収入源としてあまり期待していない

問１５.主に農作業に従事している方を教えてください。(当てはまるもの**すべて**に✓をつけてください)

□自分自身　□父　□母　□配偶者　□兄弟姉妹　□子供　□孫　□営農組合員

＜３ページ目＞

□援農　　□法人
□その他（ご記入ください：
）

まごころ市への農産物出荷についてお聞きします

問１６．いつからまごころ市へ農産物を出荷されていますか。(当てはまるもの**ひとつ**に✓をつけてください)
□今年から　　□１～２年前から　　□３～４年前から　　□５年以上前から　　□設立時から
□設立前の朝市のころから　　□覚えていない

問１７．まごころ市へはどのような農産物を出荷されていますか。(当てはまるものを**３つ以内**で選び、かっこ（）内に出荷量の多いものから**１から３の番号**をご記入下さい)
（　）出荷目的で栽培した農産物　　（　）規格外品　　（　）少量生産の農産物
（　）試験的に栽培した農産物　　（　）家庭内で消費しきれなかった農産物
（　）他の朝市などで売れ残った農産物

問１８．どのような理由からまごころ市へ出荷されていますか。（当てはまるものを**３つ以内で**選び、かっこ（）内に重要なものから**１から３の番号**をご記入下さい）
（　）販路のひとつとして　　（　）将来の販路拡大のため（出荷品の PR）　　（　）他の販路よりよく売れるため
（　）出荷するのにアクセスがよいため　　（　）規格外品でも販売できるため　　（　）少量でも販売できるため
（　）地域の人に食べてもらうため　　（　）観光客に購入してもらうため　　（　）自分で価格設定できるため
（　）出荷したい日に出荷できるため　　（　）手数料が安いため
（　）その他（ご記入下さい：

）

問１９．あなたがまごころ市へ出荷される農産物の売上は、あなたの年間農産物売上額のどの程度を占めていますか。（各項目の当てはまるもの**一つ**に✓をつけてください）
□ほぼすべて（９割以上）　　□８割～６割　　□およそ半分　　□４割～２割　　□１割以下

問２０．まごころ市への出荷物に対してどのような購買者を想定していますか。（各項目の当てはまるもの**一つ**に✓をつけてください）

＜４ページ目＞

	全く当てはまらない	当てはまらない	どちらとも言えない	当てはまる	強く当てはまる
地域の人(家庭)	□	□	□	□	□
地域の法人・商店関係者	□	□	□	□	□
観光客（日本人）	□	□	□	□	□
観光客（外国人）	□	□	□	□	□
その他に想定されている購入者がありましたらご記入ください					

問２１．農産物のまごころ市以外の主な出荷先を教えて下さい。(当てはまるもの**すべて**に✓をつけてください)

□まごごろ市以外に特になし

□宮津市内のスーパー、商店　□JAへ出荷　□宮津市外のスーパー、商店

□宅配・インターネット販売　□無人（露地）販売

□その他（ご記入下さい：　）

問２２．最近は農産物に対して農薬の使用などを気にする消費者の方が増えています。減農薬や有機栽培についてどのように考えておられますか。

□ 既に取り組んでいる　□ 将来的に取り組もうと思っている

□ 興味はあるが現時点では考えていない　□ 特に興味もなく、今後取り組む予定もない

質問は以上になります

ご記入ありがとうございました

＜５ページ目＞

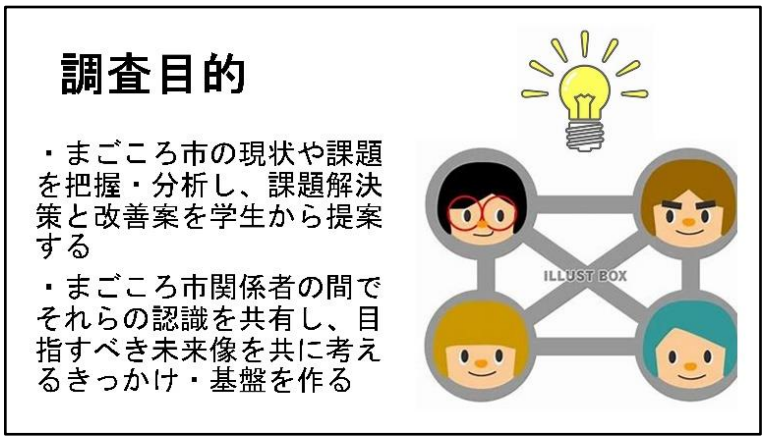
３－２．まごころ市出荷者アンケート調査結果報告会（2019 年 4 月）

2019 年 2 月に実施したまごころ市出荷者アンケート調査の結果をまごころ市出荷者組合総会の場をお借りし報告した。

日時：2019 年 4 月 26 日（金）19:30~
会場：宮津シーサイドマートミップル 3 階第 1 コミュニティールーム
発表者：北野清子、松原加奈、森山天貴、吉田彬人、我妻俊介
発表内容（調査結果）：

１）発表タイトル

２）２０１９年２月４日～６日にまごころ市の農産物出荷者計２７名に対して聞き取り調査を実施



３）調査目的について
まごころ市の現状や課題を把握、分析すること、またそれらの結果をまごころ市関係者で共有することを通じて、まごころ市の将来を考えるきっかけをつくることを目指す。

調査方法

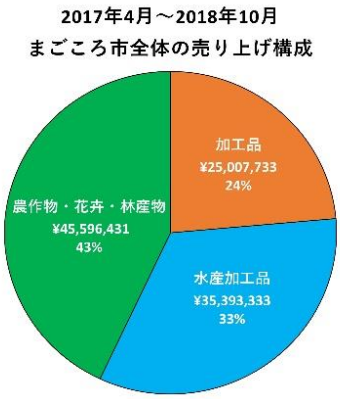
- 宮津市から御提供頂いたまごころ市の売り上げデータを分析した。
- まごころ市出荷者全115組のうち、農作物出荷者27組に直接訪問し、30分～1時間程度口頭アンケートを行った。
- その際、簡単な筆答アンケートをお願いし、訪問した27組のうち22組から回答を得た。

４）調査方法について
まごころ市出荷者のうち２７組を対象に、学生による対面アンケート（インタビュー調査）を実施した。

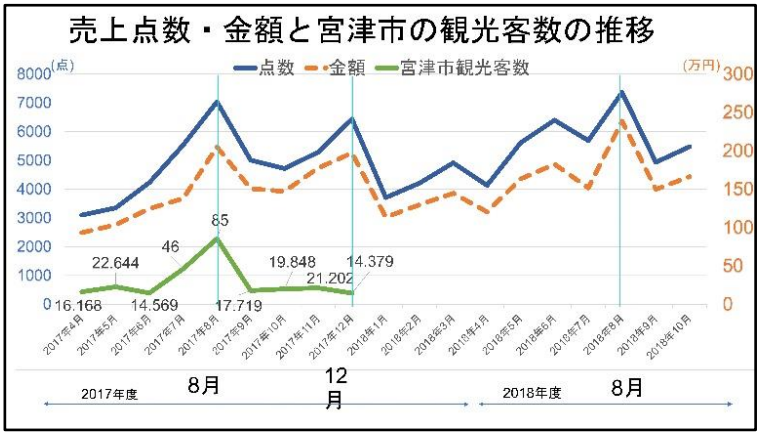
口頭アンケートの注目すべき意見

- （加工品に比べて）農作物は売れない
- お客さんが少ない
- 消費者の声が聞きたい、消費者の声が生きがい
- まごころ市への継続的な出荷を皆が望んでいる
- 販売スペースが少ない（特にシーズン期）
- 観光客にも買ってほしい
- 地元ならではの特産品を売りたい
- 新しいことに挑戦したい

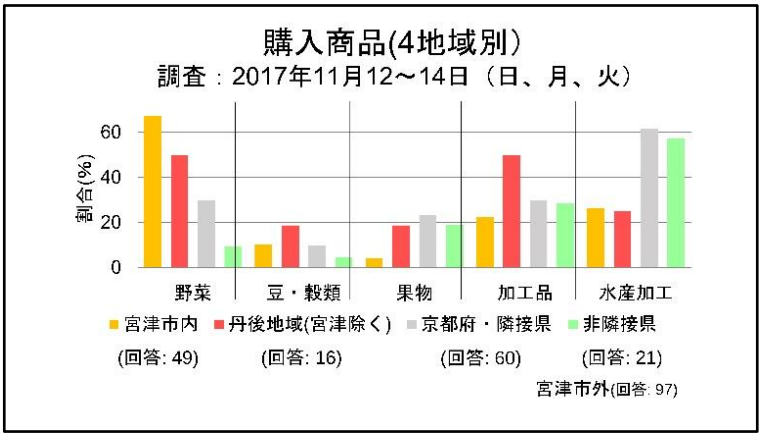
５）対面による聞き取り調査の結果
出荷者の立場から見た、様々な課題が明らかになった。特に気になった課題としては、「農作物は売れない」「お客さんが少ない」



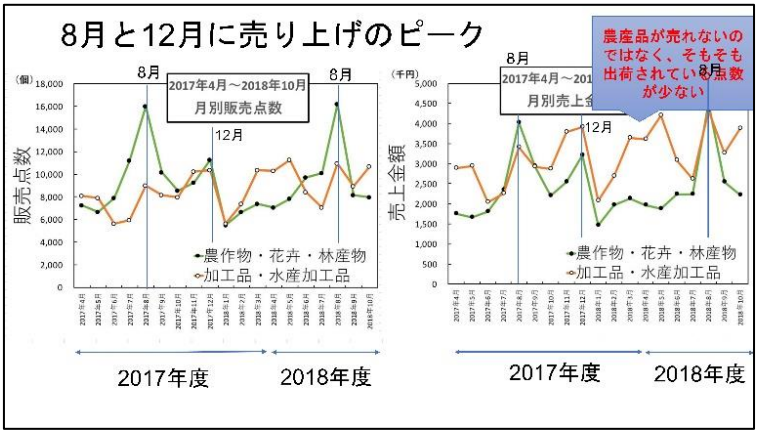
６）果たして売れないのか？？ 2017 年 4 月～2018 年 10 月のまごころ市の売上のうち、農産物・花弁・林産物の売り上げが４３％を占めている。



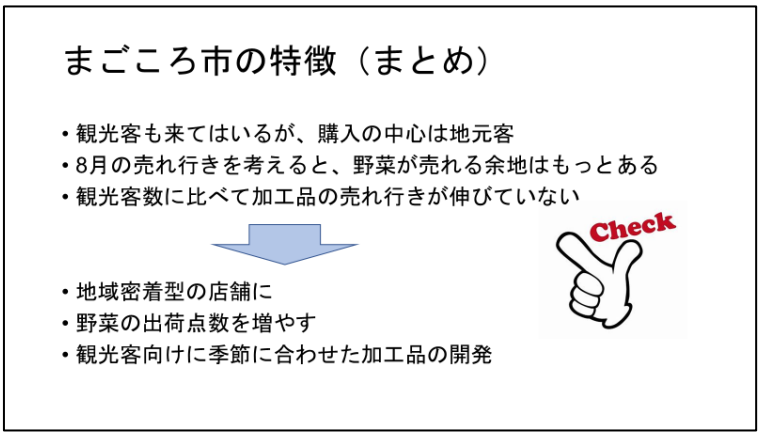
７）まごころ市売上点数・金額と、宮津市の観光客数の推移。シーズンによって観光客数の増減幅は大きいが、売上点数・金額は観光客数の増減ほど振り幅がない。



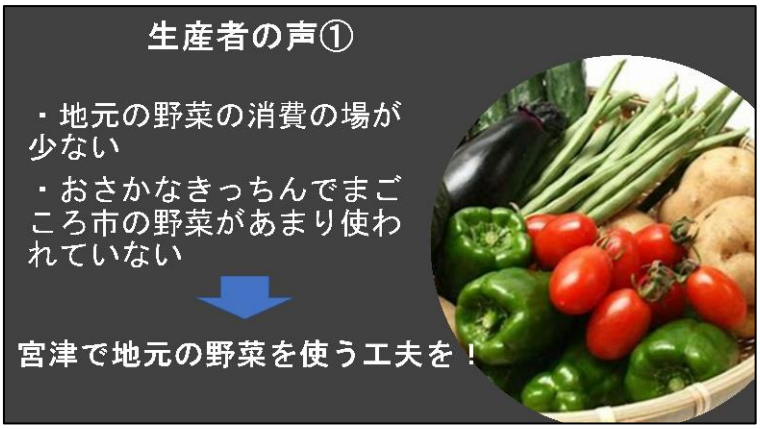
８）まごころ市で購入された商品種類について、購入者地域別にまとめたもの。宮津市内からの来客は野菜を、地域外からの来客は加工品を購入する傾向が強い。



９）農作物・花卉・林産物の売り上げが少ないのは、出荷量が少ない時期である。まごころ市利用が特に多い地元住民は、農産物をよく購入している。今後は一年を通して農産物を一定量供給できるよいになると良いのでは。

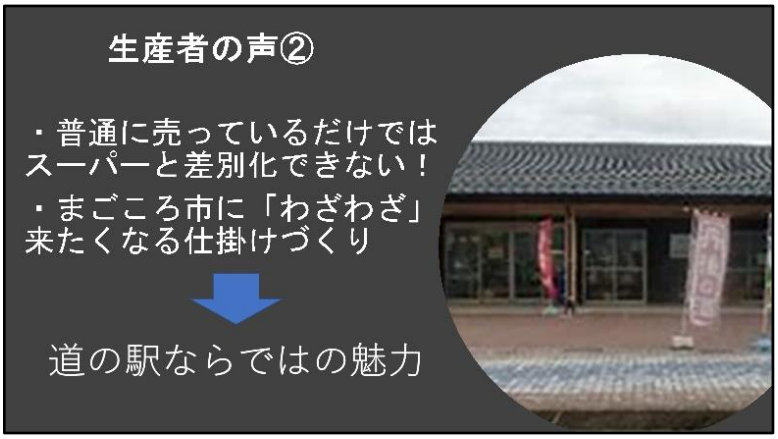


１０）まとめ。利用が多い地域住民に対する満足度向上や、野菜出荷数の増加（一定化）、観光客向け加工品の開発などを提案。



１１）聞き取りで明らかになった生産者の声①：野菜消費の場がない⇒宮津で地元の食材を活用する工夫ができるとさらに農産物の消費（購入）が高まる可能性あり！！

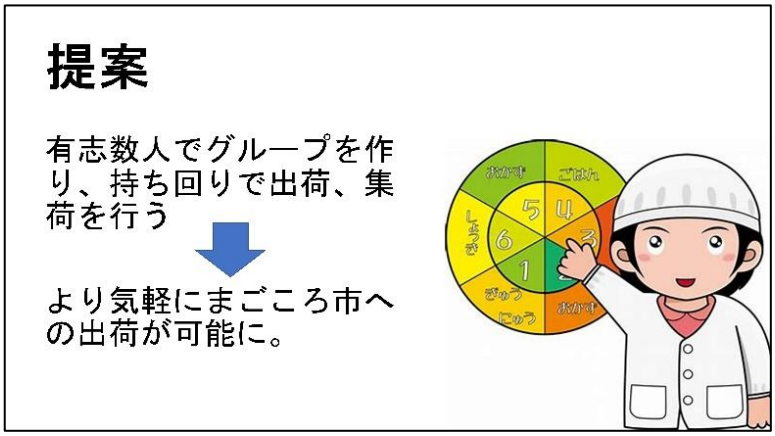
１２）食材活用の提案として・・・プチ野菜バイキングなどを設けて宮津産の農産物を楽しめる機会を増やす。



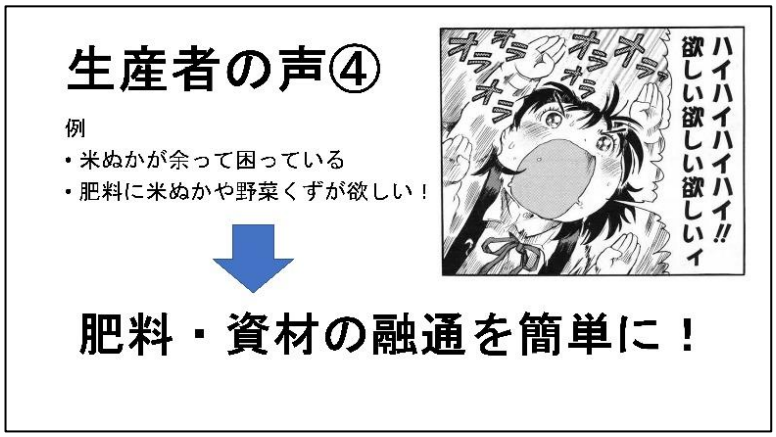
１３）生産者の声②：他店舗との差別化。
⇒道の駅ならではの魅力を。

１４）生産者の声を受けた、学生の提案。まごころ市の店内で、よりお客さんに楽しんでもらい、かつ宮津産の食材について体感してもらえる工夫を。

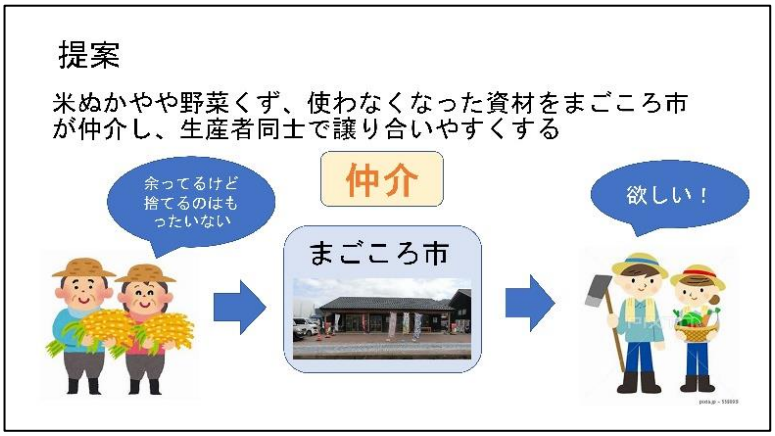
１５）生産者の声。まごころ市への出荷が大変。



１６）生産者の声を受けた、学生の提案。出荷者でグループを作り、当番制で特定の人がまとめて出荷する。

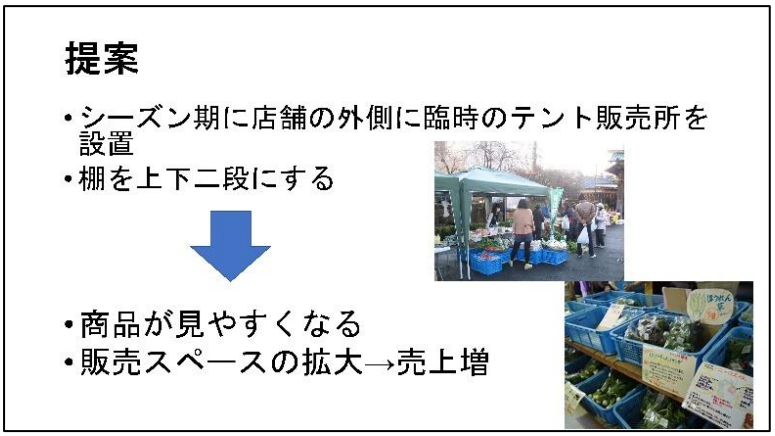


１７）生産者の声。肥料や資材など、それぞれの人がいろいろな思いを持っている。

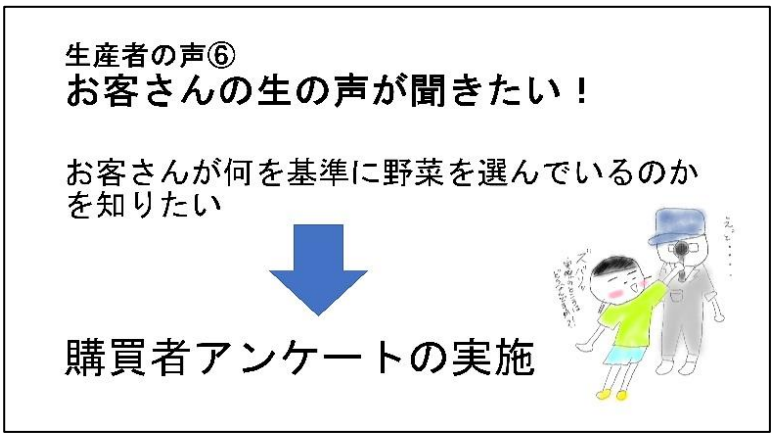


１８）生産者の声を受けた、学生の提案。地域での交流にもつながる。

１９）生産者の声。売り場面積が小さい。



２０）学生からの提案。臨時テントの設置や棚の上下活用をおこないスペースを確保。



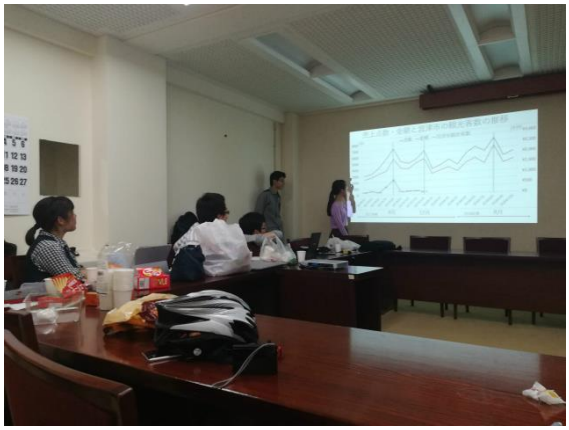
２１）生産者の声。お客さんの声が聞きたい。

２２）学生からの提案。来客に対する調査の実施。

２３）学生の感想。宮津の自然の豊かさ、人のあたたかさを感じた。農業を生きがいにしている人が多いことが実感できた。

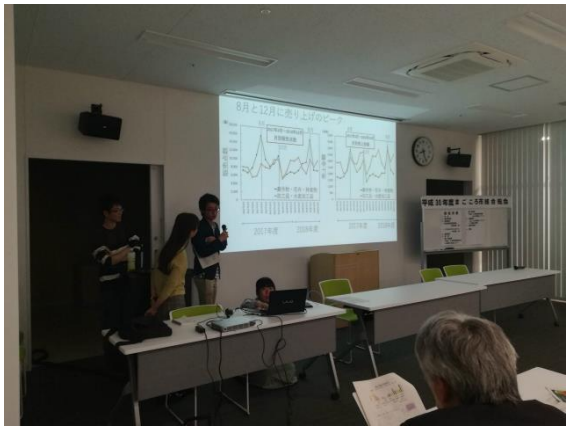
２４）学生の感想。宮津には何かチャレンジしたいと思っている・チャレンジしている人もいるが、より多くの人がチャレンジできるような環境になってほしい。

報告会の様子：



大学での発表準備

報告会の様子①



報告会の様子②

３－４．まごころ市消費者店頭アンケート調査（2019 年 12 月）

実施日：2019 年 12 月 14 日～12 月 15 日

実施者：北野清子、森下航平、吉田彬人、我妻俊介

調査概要：2019 年 2 月に実施した聞き取り調査では消費者の声（要望）を聞きたいとの声が、生産者を含めまごころ市から上がった。また、2018 年度に消費者アンケートをまごころ市店頭にて実施したが、その後のデータ解析から時間帯によって訪問客層が異なることも示唆された。これらの課題を踏まえ、京都大学地域振興研究会のメンバー４名が 12 月 14 日～15 日にかけてまごころ市店頭もしくは店内にてまごころ市訪問者に対してアンケート調査を実施した。また、14 日の調査後には、定期的におこなわれているまごころ市出荷者の定例会に出席し、意見交換、調査の進捗、また今後の活動に関する打ち合わせをおこなった。

調査方法： 2 月 14 日（11 時 30 分～17 時）と 2 月 15 日（9 時～14 時）の２日間にかけてまごころ市を訪れた宮津市内および宮津市外からの訪問者に対して店頭アンケートを実施した。アンケート用紙を事前準備し、訪問者（訪問グループ）に対してアンケートを配布し、記入終了後に店内にて回収をおこなった。また状況に応じて、口頭でアンケートを読み上げ、質問者自身がアンケート用紙に回答を記入した。基本的に調査中にまごころ市を訪れたほぼすべての訪問者に対してアンケートを取るよう心がけた。結果、計 193 名（組）のまごころ市訪問者から回答を得た。

調査結果： 調査結果は 2020 年度のまごころ市総会（2020 年 4 月開催予定）において発表予定であり、現在データの集計および解析をおこなっている。本書ではそれらの結果の一部を報告するに留める。

１．訪問者

訪問者 193 名（組）の住まいの内訳は、宮津市内が 39（20.2%）、宮津市外が 154（79.8%）と宮津市外からの訪問者が多く、休日（土・日）においては市外から多くの人が訪れていることがわかる。宮津市内からの訪問者の住まいの内訳としては、宮津地区 57.6%、吉津地区 15.2%、栗田地区 9.1%、府中地区 6.1%、上宮津地区 6.1%、由良地区 3.0%となっており、まごころ市に近い宮津地区在住者が訪れていることがわかった。また市内からの訪問者はひとりでまごころ市を訪れる人が多かったが、家族もしくは友人と訪れる人も 33.4%と決して少ないわけではなかった。宮津市外からの訪問者 154 のうち、宮津市を除く京都府内からの訪問者が 31.2%、次いで大阪府が 26.0%と近隣県からの訪問者が多かった。市外からの訪問者の多くは家族と訪れており（66.9%）、次いでひと

訪問者の住まい上位５県

住まい	人数	%
京都府（宮津市を除く）	48	31.2
大阪	40	26.0
兵庫	27	17.5
滋賀	9	5.8
岐阜	5	3.2
三重	5	3.2

り（14.3%）、友人（12.3%）、家族及び友人（1.9%）、その他（3.9%）であった。

２．訪問者の満足度

訪問者に対して、まごころ市における１）農産物の品数、２）加工品の品数、３）地元産の商品数、４）商品の探しやすさ、５）商品の価格、６）商品の魅力、７）生産者情報について得た満足度の回答は下記表の通りである。

	非常に満足した	やや満足した	どちらとも言えない	あまり満足しなかった	全く満足しなかった
農産物の品数	30.4%	49.7%	13.8%	6.1%	0%
加工品の品数	24.9%	48.6%	21.5%	4.4%	0.6%
地元産の商品数	28.1%	48.9%	19.1%	3.9%	0%
商品の探しやすさ	27.5%	47.8%	20.2%	3.9%	0.6%
商品価格	17.5%	46.3%	31.1%	4.5%	0.6%
商品の魅力	18.2%	41.2%	30.0%	9.4%	1.2%
生産者情報	15.0%	36.4%	36.4%	9.8%	2.3%
商品の説明	15.5%	39.1%	31.8%	10.0%	3.6%

農産物の品数、加工品の品数、商品の探しやすさ、地元産の商品数に対しては、「非常に満足した」「やや満足した」をそれぞれ足し合わせると、80.1%、73.5%、77.0%、75.3%と多くの訪問者からはある程度の“満足感”が得られている。一方で、特に商品の魅力、生産者の情報、商品の説明に関しては、59.4%、51.4%、54.5%と訪問者の過半数からはある程度の“満足感”が得られているものの、上記４項目に比べると満足感を得ている訪問者は相対的に少なく、今後の改善の余地があることが示唆されている。

活動の様子：

店頭でお客さんを待ち構える

アンケートの実施

組合員の方と打ち合わせ

店内の売り物もチェック

資料：アンケート用紙

解答月日:　　月　　日　　時　　分

京都大学学生まごころ市アンケート

本アンケートは、まごころ市を介した地場産物等流通の実態調査をおこない、今後の地域市場の発展の可能性を検討する材料に使用します。アンケートにより回収した情報は、上記の目的以外に使用されることはありません。本調査は「ーまちーキャンパス事業」（京都府・宮津市・京都大学）および「宮津市大学等連携事業」（宮津市・京都大学）の一環として実施しています。

質問1. あなたの性別と年齢を教えて下さい

性別:　□男性　□女性　□その他　□無回答

年齢:　□10代　□20代　□30代　□40代　□50代　□60代　□70代以上

質問2. お住いの地域はどこですか(当てはまるもの一つに✓をつけてください)

宮津市内の方:□養老地区　□日ヶ谷地区　□日置地区　□世屋地区　□府中地区
□吉津地区　□宮津地区　□上宮津地区　□栗田地区　□由良地区

宮津市外の方は都道府県と市町村をご記入下さい

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿都・道・府・県＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿市・町・村

質問3. 今日はどなたと来店されましたか

□ひとりで　□ご家族と　□ご友人と　□その他（ご記入下さい＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

質問4. あなたを除いてご一緒に来店された方の年齢と人数を教えて下さい（年齢・性別ごとに下表に人数をご記入ください）

	10歳未満	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
男性	人	人	人	人	人	人	人	人
女性	人	人	人	人	人	人	人	人

質問5. ご購入された大まかな合計金額を教えてください (当てはまるもの一つに✓をつけてください)

□購入していない　□～499円　□500～999円　□1,000～1,999円　□2,000～2,999円
□3,000～3,999円　□4,000～4,999円　□5,000円以上

質問6. 下表の1～8の各項目について満足度を教えて下さい（あてはまる満足度に✓を入れて下さい）

	非常に満足した	やや満足した	どちらとも言えない	あまり満足しなかった	全く満足しなかった
1.農産物の品数	□	□	□	□	□

＜1ページ目＞

解答月日:　　月　　日　　時　　分

2.加工品の品数	□	□	□	□	□
3.地元(宮津)産の商品数	□	□	□	□	□
4.商品の探しやすさ	□	□	□	□	□
5.商品価格	□	□	□	□	□
	非常に満足した	やや満足した	どちらとも言えない	あまり満足しなかった	全く満足しなかった
6.商品の魅力	□	□	□	□	□
7.生産者情報	□	□	□	□	□
8.商品説明	□	□	□	□	□

【宮津市外にお住まいの方にお聞きします(質問7～8)】

質問7. 宮津に来られた目的を教えて下さい(複数回答可)

□宮津観光(天橋立)　□宮津観光(天橋立以外)　□食事を楽しむ　□買い物を楽しむ　□寄り道

□仕事　□通院　□その他(ご記入ください)

質問8. 観光で来られた方で観光する場所、宿泊する場所を教えて下さい。(複数回答可)

	宮津	伊根	城崎温泉	出石	たい間人ざ	久美浜	舞鶴	その他(ご記入ください)
観光する	□	□	□	□	□	□	□	
宿泊する	□	□	□	□	□	□	□	

***日帰りの方は右に✓をいれてください⇒□**

【宮津市内にお住まいの方にお聞きします(質問9～12)】

質問9. まごころ市をご利用されている頻度を教えてください(当てはまるもの一つに✓をつけてください)

□2日に1回以上　□週1～2回　□月に2～3回　□月に1回以下

質問10. スーパーではなく、まごころ市に来店された理由は何ですか(複数回答可)

□価格が安い　□鮮度がいい　□味がいい　□出荷者を知っている　□スーパーにない商品がある

□安心感がある　□地元産のものが欲しい　□その他(ご記入ください＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿)

質問11. 普段野菜をどこで購入しますか?それぞれご利用の頻度を教えて下さい

	とてもよく利用する	よく利用する	時々利用する	あまり利用しない	利用しない
スーパー	□	□	□	□	□

解答月日:　　月　　日　　時　　分

まごころ市	□	□	□	□	□
宅配（生協等）	□	□	□	□	□
露天販売	□	□	□	□	□
その他	□	□	□	□	□

質問12. まごころ市への要望は何ですか？（最大3つまで）

□価格を下げる　□タイムセールをやる　□営業時間の延長　□陳列の工夫　□移動販売・宅配
□生産者の対面販売　□宮津産の商品の拡充　□有機野菜の拡充　□イベントの実施
□少量販売（野菜のカット販売など）　□新品種・新商品の拡充　□生産者に関する情報（顔写真など）
□その他（ご記入ください＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

ご協力ありがとうございました

＜３ページ目＞

第４章
国際交流、その他の活動記録

４－１．ILAS セミナー：在地の参加型実践研究で学ぶ過疎・離農問題（宮津編）

引率教員：安藤和雄、赤松芳郎（京都大学）

参加大学生：8 名

実施日程：2018 年 6 月 17 日～6 月 18 日

セミナーの概要・目的：日本の農村部で進行している過疎・離農の問題は、小・中・高校の授業で触れられているにもかかわらず、全国版や都市版のテレビ、新聞、インターネットの報道で取り上げられることが少ない。したがって、農村の問題は都会に住む人々にとって日常生活の外の出来事であることが多い。日本における過疎・離農は、すでに農村部での廃屋、耕作放棄地を増加させ、農村景観を変えつつある。この問題は 1970 年代から注目されてきたが、問題を克服する決め手となる対策はほどこされていない。過疎・離農地帯では集落機能や耕地の維持さえも村の外部者のボランティアなどの支援なしにはなりたたなくなってきているところも少なくない。近代的な都市的暮らしが田舎暮らしに優越するという「単純な価値観」は、経済開発のグローバル化に伴い、今や日本だけではなく、ヒマラヤの秘境と呼ばれるブータンを含めた多くのアジア諸国でも広がりつつある。経済発展のグローバル化に伴い、今や世界が火急に取り組まなければならないグローバル問題群の一つとなっているといっても過言ではないだろう。単純な価値観を打ち崩し、この問題にアプローチするためには、過疎・離農の問題に直面しながら現場で暮らしている人々に接する必要がある。現場での活動に参加し、現地の人々から学び、五感を通じて実感としてこの問題を理解することが重要なのである。そして、その中で糸口を模索するためには、参加型の実践研究を参加型農村調査と学習（ＰＬＡ）を通して「学び」から「創出」を生み出す実践的な地域研究をおこなうことがもっとも有効となる。過疎・離農問題へのアプローチは、一方で自分自身の生き方を再考する機会にもなるだろう。本セミナーは、１まち１キャンパス事業（大学・地域連携プロジェクト支援）事業『農山村学生実習のための「丹後アジア研修拠点」形成事業』（京都府・宮津市・京都大学）の一部としても企画されたものである。

（2018 年度シラバスより（安藤執筆、赤松・内田一部改変））

実施内容：

6 月 17 日：京都大学出発（午前）
杉山・エコツアー体験実習（午後）
上宮津における森林資源活用の取り組みと課題（上宮津公民館）（午後）

6 月 18 日：森林資源の整備・活用に関する現地実習（上世屋集落）（午前）
実習及び課題報告会（宮津市役所）（午後）

セミナーの様子：

地域のエコガイドによるエコツアー実習（杉山）

上宮津の地域活動家の方々との意見交流（上宮津公民館）

地域の方の案内による森林資源の整備・活用に関する現地実習（上世屋）

実習を終えての意見交換・報告会（宮津市役所）

４－２．ブータン×京都大学・合同フィールド実習２０１８

参加者：京都大学・教員　３名
　　京都大学・学生　８名
　　ブータン王立大学シェラブツェ校・教員　１名
　　ブータン王立大学自然資源校・教員　１名
　　ブータン王立大学シェラブツェ校・学生　２名

実施日程：2018 年 7 月 27 日～8 月 8 日

実施地域：京都府宮津市、京都府南丹市、滋賀県守山市等

実習の概要・目的：過疎や離農、高齢化などの問題は日本の農村だけでなく、近年ではアジアの発展途上国の農村でも顕在化しつつある大きな問題でもある。ブータン王国は国民総幸福（Gross National Happiness: GNH）を発展の指針として掲げるヒマラヤの小国であるが、近年、農村部から都市部への人口の流出、耕作放棄地の増加や高齢化などが特にブータン東部の農村で深刻化している。これらの問題を解決するためには、行政だけではなく、地域住民が主体となった取り組みが早期の段階から重要であると考えられる。本実習では、地域住民が主体となった取り組みが活発な京都府・滋賀県の農村地域をフィールドに、農村問題とその解決に向けた取り組みを、ブータンからの参加者とともに京都大学の大学生も交えながらグローバルな視点から学び、考えることを目的としている。本実習は、１まち１キャンパス事業（大学・地域連携プロジェクト支援）事業『農山村学生実習のための「丹後アジア研修拠点」形成事業』（京都府・宮津市・京都大学）、科研費基盤 A「アジアの在地の協働によるグローバル問題群に挑戦する実践型地域研究」（代表：安藤和雄）の助成を受けて実施されたものである。

実施内容：

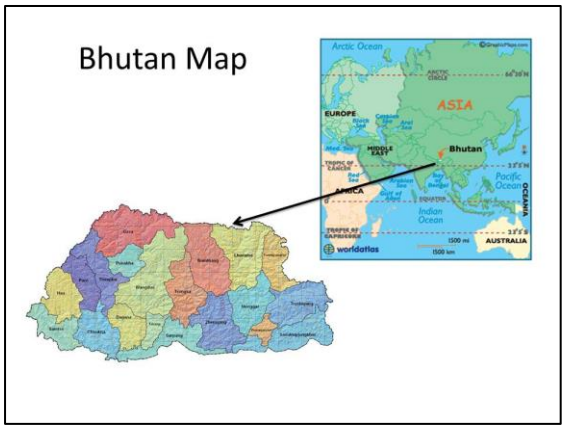
7 月 27 日：京都大学・稲盛財団記念館にてキックオフ・ミーティング
7 月 28 日：奈良女子大学訪問・意見交換
7 月 29 日：移動（京都市から南丹市へ）
7 月 30 日：美山町民俗資料館において聞き取り（午前）
　　知井振興会において講習会（午後）
7 月 31 日：地井地区の農村集落視察
8 月 1 日：移動（南丹市から宮津市へ）
8 月 2 日：旧上宮津小学校において宮津高校生らと桟俵づくり体験（午前）
　　上宮津公民館にて地域住民、宮津高校生らと発表・意見交換会（午後）
8 月 3 日：世屋・木子集落視察
8 月 4 日：杉山林道整備事業視察（午前）
　　成相山歴史トレッキング参加（午後）

８月５日：オリーブ園（由良地区）活動視察（午前）
飯尾醸造の酢造りと取り組み紹介（午前）
地域おこし協力隊の概要紹介（午後）
上宮津公民館にて地域住民と交流会（夕方）
８月６日：宮津フィールド実習での感想報告会（午前）
移動（宮津市から京都市へ）
８月７日：滋賀県守山市美崎地区において夏休み大川自由研究室視察
８月８日：京都大学・稲盛財団記念館にてラップアップ・ミーティング

資料①：ブータンからの参加者による発表スライド（8 月 2 日@上宮津公民館）

＜ブータンの紹介＞

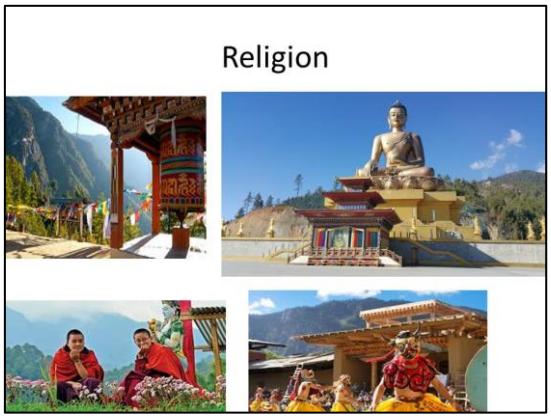
１）ブータン～雷龍の国～



２）ブータンの位置

３）ブータンの歴代国王（中央：現五代目国王）

４）ブータンの人々（約２０の異なる言語があり民族衣装も様々です）



5）宗教（ブータンの国教は仏教と定められています）

6）服装（ナショナル・ドレス（男性：“ゴ”、女性：“キラ”））

5）国のスポーツ（国技は“ダツェ”と呼ばれるアーチェリーです）

6）食事（トウガラシをふんだんに使った辛い料理が好まれます）

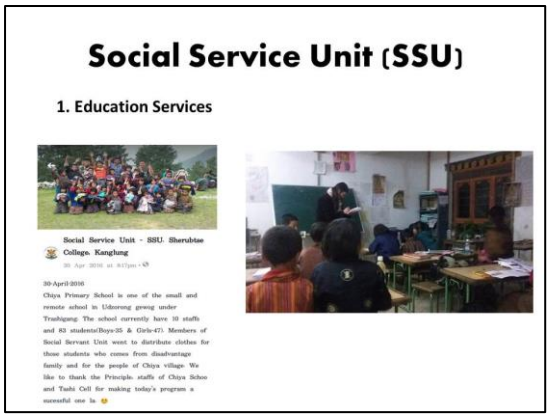
7）建物（左上：民家、右上：仏塔、左下：寺院：右下：寺院内部の装飾）

8）文化と伝統（様々な民族がそれぞれの文化・伝統を持っています）

9）ブータンと日本（地理的にインドと親しい関係にありますが、日本とも良い関係を築いています）

＜ブータンの大学生らの地域活動紹介＞

1）大学生らの社会貢献活動



2）学内には社会奉仕サークル(Social Service Unit)があり、学生たちは積極的に社会活動に取り組んでいます

3）貧困世帯の家の修繕活動

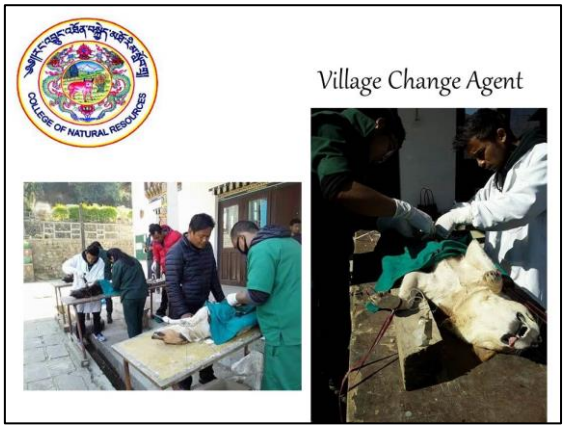
4）貧困世帯やハンディキャップを抱える世帯に対する物資支援活動

５）仏塔などの修繕活動（塗装）

６）高齢者や病人に対する福祉活動

７）構内及び周辺の清掃活動

８）集落での飲料水用配管の敷設事業



９）集落への学生の生活改善委員としての派遣活動

１０）野良犬の去勢補助活動

１０）農家へのハウス栽培導入活動

１１）荒廃地への植林活動

１２）ゴミ分別活動

資料②：ブータンからの参加者４名による実習レポート

Royal University of Bhutan

STUDY TOUR REPORT ON
"JAPANESE RURAL ISSUES AND COMMUNITY-BASED DEVELOPMENT/REVITALIZATION"

DEPARTMENT OF PRACTICE-ORIENTED AREA STUDIES,
CSEAS, KYOTO UNIVERSITY, JAPAN
25 – 12 AUGUST 2018

"What We Cherish Today Is By Remembering the History"

Report Prepared by:

Jigme Singye, Sherubtse College, RUB
Monika Pradhan, College of Natural Resources, RUB
Phub Dorji, Sherubtse College, RUB
Choki Wangmo, Sherubtse College, RUB

日本の農村問題とコミュニティを基盤とした地域づくりに関するスタディ・ツアー報告書

"今、私たちにとって大切なことは、地域が歩んできた道のりを思い起こすこと"

報告書作成者

ジミー・シンゲ（ブータン王立大学シェラブツェ校・教員）

モニカ・パラダン（ブータン王立大学自然資源校・教員）

プッブ・ドルジ（ブータン王立大学シェラブツェ校・学生）

チョキ・ワンモ（ブータン王立大学シェラブツェ校・学生）

INTRODUCTION

Since Bhutan is in the developmental phase, it has been experiencing various challenges regarding sustainable development trajectory such as; increasing trend of rural-urban migration, lack of proper planning and related issues, increasing youth unemployment, etc. Several attempts are put in place by the Royal Government of Bhutan (RGoB) to curb the issues related to sustainable development, but to deliver appropriate outcomes has become critical which demands development planners, researchers and academician to explore various methods for sustainable programs. Therefore, the capacity development at the university level is found crucial to guide the future development practitioners through various programs such as education exchange program and study tours within and outside Bhutan　these programs would be useful to gauge certain propitious gambit.

The purpose of the study tour is to gain experience and understand some of the rural community issues and development stratagem, and maneuver of development partners like Japan. There are two main reasons for choosing Japan: (i) Japan have been experiencing rural-urban migration related issues like ageing population in rural areas, abandoned farmland, underutilized resources and many more. Further, Bhutan shares many challenges and issues related to rural development but the pertinent discussion has just begun in Bhutan and this needs proliferated methods to provide stratified strategies and road map for rural community development; and (ii) To understand the rural development or revitalization programs administered in Japanese rural communities, Practice Oriented Area Studies specifically Center for Southeast Asian Studies in Kyoto University (CSEAS) had signed the Memorandum of Understanding (MoU) in 2011 with Sherubtse College, Royal University of Bhutan (RUB) delivering understanding to invite few faculties and students from Sherubtse for summer and winter exchange program in Japan.

Since the inception of the concept of exchange program, CSEAS have invited 13 groups of delegation from Sherubtse College, Bhutan. The study tour exhibits that the policy makers in Bhutan need to learn much from the experiences of Japanese rural communities.

＜要約＞

ブータンは発展途上にあり、農村から都市への人口流出、不適切な農村計画、青年層の失業率の高さなどに悩んできた。これらの問題解決に向けてブータン王立シェラブツェ大学は取り組んできたが、これまでのところ明確な成果を出せていない。そのために大学関係者自身の能力・経験を高めることを目指し、ブータン内外での学術交流と人的交流の重要性が言われるに至った。このプログラムが現状打破に役立つことが期待される。

日本でスタディ・ツアーを行うのは　第一に日本では農村から都市への人口流出に伴い、農村での高齢化、耕作放棄、地域資源の不活用などの問題を経験していることにある。ブータンも農村開発に関わる様々な問題を抱えているが問題への取組は端についたばかりであり、地域社会を発展させるための効率的な方法が必要となっている 第二に、日本におい

て行政指導で行われている 農村開発・農村活性化プログラムを理解するため、京都大学東南アジア地域研究研究所(CSEAS)はブータン王立シェラブツェ大学の学生らを夏冬に日本へ招待してきた。CSEAS はこれまでシェラブツェ大学からすでに 13 回にわたって交換派遣をしてきた経験を持つが、今回のスタディ・ツアーによって、ブータンの政策立案者が日本の地域共同体の経験からさらに多くを学ぶ必要がある。

OBJECTIVE

The principal purpose of this study tour is to investigate, understand and practice on the Japanese rural development issues and stratagem involving:

a. Ageing and Development－the future development prospects of rural communities
b. Tourism and Development－the preservation of traditional and cultural values
c. Environment and Development－the conservation and sustainable use of natural resources
d. Migration and Development－the issue of depopulation and abandoned farmland
e. Agriculture and Development－Value Chain and Market-Based Approaches

The study tour also tries to realize the functions and vitality of independent local associations for rural planning, development and renaissance of the rural communities.

＜要約＞

本プログラム（合同フィールド実習）の主な目的は、日本の農村開発問題と高齢化、ツーリズム、環境、人口移動及び農業との関わりを理解するとともに、自治体と地域共同体が地域の開発計画に参加する可能性を検討することにある。

METHODOLOGY

Study Area: The study tour was conducted in four main rural communities: (a) Nara Prefecture observation of old temples/Shrines and Nara Women's University; (b) Miyama community folk museum, Chi Rural Development Association, Kita and Sasari villages; (c) Miyazu straw art and craft, observation of activities and exchange of opinions with local people, depopulation and abandoned farmland, culture and natural resource-based development, and youth activities (Community Reactivation Cooperator Squad and youth immigrants and return migrants); and (d) Misaki, Moriyama school kids summer education program.

The selection of these study areas were based on the current situational change in demographic characteristics and level of socio-economic development. Moreover, the presence of the local institutions like independent community development associations has been playing pivotal roles in triggering most of the community development activities.

Data Collection and Analysis Methods: The study is basically directed towards qualitative research an exploratory research and has employed field visit and observation, one to one interview with villagers and interaction with the stakeholders like Chief Director of Chi Rural

Community Development. Moreover, to perpetuate the essence of information collection, the note taking (maintained dairy) technique was also used by the participants to record all the events/activities everyday to gather detailed information on various aspects of rural issues and developmental paradigm.

Schedule of the Study Tour: The study tour was organized meticulously (Appendix 1). For the successful flow and admirable outcomes of the study tour to villages in Japan, a systematically structured program schedule was being developed by the organizers of CSEAS, Kyoto University.

＜要約＞

調査地域：スタディ・ツアーは次の４地域で実施された。1.奈良市（神社仏閣、奈良女子大学）　2.美山町（地域民族博物館、知井地域振興会、北・佐々里村）　3.宮津市：伝統民芸品、地域住民の活動視察及び人口減少・耕作放棄地、文化・自然資源による農村開発等々についての地元住民との意見交換　他　4.守山市美崎町（夏休み子ども教室プログラム）

データ収集と分析：調査地域での農民との会話や地域組織の長とのインタビューなどを通して主に質的なデータを集めるとともに、地域の問題や農村開発に関わるより詳しい情報を集めるため、参加した行事や活動に関しては日記形式で詳細に記録した。

STUDY TOUR DESCRIPTION

The exchange program commenced on 27th July, 2018, with an introduction and a brief presentation at CSEAS on the need, expectations and program schedule of the study tour. The Bhutanese team also provided an overview of the transition of Royal University of Bhutan (RUB). For example, to understand the functions of Kyoto University and RUB, we discussed on various professional development programs such as development of new HR rules and regulations that RUB has mandated. The introductory session was observed by: (1) Director of CSEAS; (2) Professor Kazuo Ando, Head of CSEAS; (3) Dr. Yoshio Akamatsu (PhD), Coordinator; and (4) the Bhutanese team members.

The kick-off meeting started at 2:30 pm and concluded at 5:00 pm in the evening. The discussion was intensive and challenging as it demanded diligence during field works for the achievement of the intended aims and objectives. Moreover, for such programs to understand the rural issues, development and revitalization programs one needed to have sound knowledge and experience on the rural development standpoint.

＜要約＞

スタディ・ツアーは 2018 年 7 月 27 日に京都大学東南アジア地域研究研究所(CSEAS)での会議から始まった。会議ではツアーの目的とその間にすべき調査内容について議論され、農村の直面する問題解決のための開発プログラムと活性化プログラムを正しく理解することの重要性が強調された。

A. Field Observation and Learning

Conservation of Historical Spots: On 28thJuly, 2018 the study tour began with the observation of old temples and shrines at Nara prefecture, which was once the capital of ancient Japan for about 300 years, where we explored century old shrines and temples like the Todaiji temple, Tamukeyama Hachimangu Shrine, Kasuga Taisha Shrine and Kohfukuji temple. Todaiji's main hall, the Daibutsuden (Big Buddha Hall) is the world's largest wooden building, despite the fact that the present reconstruction of 1692 is only two thirds of the original temple hall's size. The massive building houses one of Japan's largest bronze statues of Buddha (*Daibutsu*). The 15 meters tall, seated Buddha represents Vairocana and is flanked by two Bodhisattvas. It was an overwhelming moment for all of the Bhutanese team members to observe such invaluable ancient historical place and learn about the history behind. This trip also made us realize how the preservation of such historical place helps in boosting rural development through tourism.

Apart from the structures, the presence of numerous wild deers in and around the shrine was seen to beautify the area and increase tourist attraction. The legality to hunt wild animals in Japan is in fact a very interesting concept. It is legal to hunt wild animals since there are no single predictors like tigers in Japanese forest. It is more interesting to know that Japanese don't eat deer meat which is one of the finest and nutritious foods (meats) the cultural and traditional believes intact plays critical role in the avoidance of deer meat consumption. Moreover, to be a hunter in Japan people needs to have certified in shooting and licensed. The whole of the concept is in contrast with Bhutanese society.

Similarly, Fuchu area in Miyazu City also has several historical spots which are revived by the community association called the 21st Dream Council and Chi Ki Kai community council for the rural community development project aims at conserving cultural and historical spots to attract tourists in the community.

＜要約＞

A.現地調査

歴史的遺跡：2018 年 7 月 28 日に奈良の東大寺をはじめとする神社仏閣を訪問したが、農村開発と歴史的遺跡の保存をいかに結び付けるかについて考えさせられた。また公園には多くの鹿がいたが、日本では鹿肉を食べないこと、狩猟には免許が必要だとのことなどブータンとの違いを知った。また、宮津市でも文化・歴史の保存を観光客の集客に用いたプロジェクトが行われていることに注目した。

The Road Station: The concept of 'Road Station' is a similar concept to Bhutan's One-Stop Shop, and Farmers' Farm Stall located along National Highway (NH). However, there is great difference is inception and conceptualization of these road stations or one stop shops. In Japan,

the Road Station provides its residents, nationalities and tourists an opportunity to explore various local products like wooden crafts, local-organic vegetables, and other prodigious local creativities

which are all designed and oriented towards market demand the concept of Value chain Approach (VCA) and Market Based Approach (MBA) was found carefully disseminated to the local people by the concerned stakeholders. Although, the concept is similar, the products available at those shops in Bhutan, are sold at less market value which in-turn has negative implication like; farmers earning less from hard earned farm labor. Moreover, other aforementioned local items are not available and the shop is also not standardized for tourist attraction. The figure depicts even installation of small vegetable shed along the road can help boost rural economy especially those people with small farm land.

＜要約＞

道の駅：これに似たものはブータンの国道沿いにもあるが、そのあり方には大きな違いがある。日本では、地域住民のみならず内外からの観光客に木工品や有機野菜、その他の生産物が売られているが、いずれも市場原理に沿った需要のある産物となっている。一方ブータンでは、販売価格が生産農民の労働を上回る利潤を生み出すものとなっているとは言えない。さらに販売品は観光客を引きつけるほどの魅力があるとは言えないが、小規模農民にとっては経済的助けにはなっていると考えられる。

Designation of Forest to Individual Household: This concept is alternatively known as “Community Forest Management” implemented in Bhutan to conserve forest resources and maintain sustainable use of available resources. In Japan, certain portion of forest is designated to individual household to avail the resources and maintain it’s sustainably. However, in Bhutan it is handed to the community as “Community Forest Management (CFM)”. The framework for the sustainable use of CFM is being devised by government. Therefore, the community forest members have to follow guidelines while availing forest resources, but have an authority to certain issues like when and where to avail the resource services. Whereas, the concept is found opposite in Japan individual household has the authority to avail forest services and they are not regulated by any government framework and guidelines. Nonetheless, both methods implemented in these two countries have equal negative and positive impacts.

＜要約＞

私有地の森林：日本では森林の保存と利用のためにある程度私有が認められているが、ブータンでは森林資源の保存と継続的な利用のため、地域共同体によって「共同森林管理」が行われている。これは政府によって枠組みが作られたもので、共同体のメンバーは森林資源の利用にあたってはガイドラインを守らなければならないが、いつ、どこの森林を利用するかは自分達で決めることができる。しかし日本では、自分達に決定権があり、政府

によるガイドラインもない。両国のやり方には一長一短がある。

Development of Folk Community Museum: The session began with narration of the background history of village museum at Kita, by Mr. Teiche Nakamo 76, who has been serving as manager of the museum since 4 years after the establishment of community folklore museum. He also shared certain facts about the museum which includes; declaration of Kita village as a conservative area by the government 25 years ago. Since then, an abandoned house has been used as a community folk museum attracting as many as 30 thousand tourists annually. This community museum is run by a 6 member staff committee consisting of all elderly people above the age of 65 years. Apart from the management and maintenance of the museum, the antique pieces stored inside were also being contributed by the people of same locality. It was impressive
to know that they have a planned disaster management program to combat fire disaster in future, as a lesson learnt from the past; for the 200 years old original building was burned down by fire 18 years ago and had to be restored and renovated before being utilized as a museum. However, the financial and manual contribution made by the community people to restore this important building indicates a strong community consciousness among the villagers.
＜要約＞
民俗資料館（京都府南丹市北集落）：資料館設立の４年後から館長を務めてきた北集落の方から話を聞いた。北集落は 25 年前に保全地区に指定され、その時から廃屋を利用した民族博物館に毎年３万人の観光客が訪れ続けている。博物館は自治会の 65 歳以上の６人で運営されており、内部に所蔵されている古いものも地域の人々からの提供である。彼らが将来の火災に備えて準備していることは印象的だった。18 年前に築 200 年の旧館が火災で焼失し、博物館を復旧するために大変な苦労をしたのである。そのために村の人々が払った努力は、「強い共同体意識」を感じさせる。

Essence of Independent Local Associations: With increasing aged population and negligible percentage of children, the existing Chi Primary School ran out of students and hence a 200 years old school had to be closed down in 2015. However, there exists a committee to make optimum utilization of available resources. Mr. Kohno Kenji, Chief of Community Development Association is a dynamic person who plays a very important role in developing their community and strengthening relationship between the people of rural and urban area. This committee consisting of 10 members is run with a small contribution of 300 yen per month from each household and some subsidy from the local government.
The Chi Rural Development Association conducts various activities such as (a) Building Recreational House for Interlinking Rural and Urban lives; (b) Conservation of Traditional

Houses and other Infrastructures; (c) Actively Involving in Village Development Planning; (d) Conducts Research and other Local Government Functions; (e) Established Three Sub-groups like Rural Community Development, Management of Public Activities and Linking local government; (f) Bridging Local Office and Local Voice; (g) Encouragement of Youth rendezvous in Social Lives through Internet; (h) Addressing Human-Wildlife Conflicts; (i) Protection of Elders and Children; (j) Organizes Local Festivals and Cultural Events; (k) Development of Social Pages; (l) Rethinking planning on Primary schools; and (m) Coordination of Elderly Recreational Activities. All of these activities are local community-based which is an important component in participatory approach for rural development. Most of the activities are successful in Chi village because of peoples' ideology called "What is in their hand, they must do it themselves not depending upon some external agent here it is government agencies" which is missing in Bhutanese nature this may be the major hurdle that RGoB is experiencing. For example, government initiate the development of rural farm roads but even for maintenance of the rural farm road people leave it for government. Therefore, the essence of establishment of such independent local associations for rural development/revitalization is tremendously regarded.

However, the Association face many problems in their community like aging population, less youth population, danger of wildlife, natural disaster, gender inequality- less female participation in the community work, abandoned land without cultivation, lack of proper planning, resources are not utilized to its optimum level, and conservation of natural resources.

＜要約＞

独立した地域の自治会・振興会 : 少子化に伴い 200 年続いた知井小学校が 2015 年に廃校となったが、施設の有効活用を目指す委員会組織がある。地域振興会は委員会を強化し、都市部と農村部の人々の絆を強めることに尽力してきた。委員会は 10 人のメンバーからなり、各家庭から会費として月 300 円を徴収し、地方自治体からも補助金を受けている。一方、知井振興会は以下のような様々な活動を行っている。a)都市と農村を結ぶリクエーションハウスの建、b)伝統的な家や施設の保、c)農村開発計画への参加呼びか、d)地方自治機能の調査研、e)地域共同体の発展、公共事業、自治体との関連付け、f)地域の意見の自治体への橋渡し、g)ネットを用いた若者たちの付き合いの推奨、h)獣害対策の広報、i)子供と老人の保護、j)地域の祭りと文化行事の開催、k)社会面の充実、l)小学校の再建計画、m)高齢者のリクエーション活動

これらの活動は自分たちでできることは自分たちするという考え方に基づくものである。この地域では成功しているが、ブータンでは失われた考え方である。

The Mobile Shop Service: The most amazing nature of Japanese to learn and appreciate is the methods to obtain solutions to every issue that they face in their locality.

During interaction in a field work at Sasari village, Mrs. Akiko 92 was observed working in the garden in scorching sun. She refuses to stay at home because she thinks she will forget things, and wanted to be independent and contribute as much as she can until her very last strength. Another 82 years old lady from the same village also sees farming as her passion apart from making Kimono for her grand-daughters. She is aged now and doesn't have much strength to do farming work like before and so goes to buy vegetables from a mobile car shop which comes every Tuesday and Friday.

Due to increasing ageing population and lack of proper general grocery shops in the locality it has become difficult for elders to go to near-by shops for household items. The provision of mobile shop suffices various needs of the elders in the community. The conceptualization of such initiative in Bhutan is in contradiction since it is oriented for the commercial purposes as whole sell dealers usually the mobile shop dealers sell their products in small towns but not in rural communities to deliver services to elders and community people. Moreover, the purpose of mobile shop is mainly commercial. But in Sasari village the mobile shop service has both implications helping elderly people as well as the dealers earn well which is an indication of good stratagem that serve economic development and foster human well-being.

＜要約＞

移動販売車：日本人が地域の問題に対して解決策を見出そうとする姿勢には驚くべきものがある。農村地域では高齢化と雑貨屋不足のため、高齢者は近くの店で日用品の買い物ができない。これに対して移動販売車がその必要を満たしてくれるものとなっている。ブータンでは、移動販売車は利益優先のため地方の小都市には行くが、農村部の高齢者のもとを訪れることはない。しかし佐々里では移動販売車は高齢者のためであるとともに、販売者の経済的利潤と人間の幸せを考えた手段となっているのである。

Conservation of Traditional Herbal Practice The Local Tea: At the Kita Village Museum, we were served tea which is made locally from seven herbal grasses and leaves available in locality. When we observed those herbal grasses/leaves, most of the grasses/leaves were also seen to be available in Bhutan but due to lack of transmission of traditional methods to younger generation or lack of scientific research knowledge on the varieties of available herbal plants in the country, it has now resulted in the negligence of its importance at the community level. Therefore, it's interesting to note that Japanese locality still has preserved the traditional knowledge on herbal plants. This initiative of showcasing the use of traditional knowledge designates Bhutan to rethink on the proper use of its available natural resources herbal plants which is an invaluable rural development conjuncture.

＜要約＞

伝統薬草利用の保全～地元のお茶：北集落民俗資料館で地元の７種の植物からなる薬草茶

をいただいた。これらの薬草の多くはブータンにもあるが、若者に受け継がれていないのとこれらの植物の科学的知識がないため、現在では地域社会でもその重要性が忘れられている。そのため、日本ではまだ薬草の知識が伝統的に伝えられていることは興味深い。ブータンでも自然資源（薬草）を農村開発に関連して有効利用することが考えられる。

The Road Infrastructures and Urban Planning: The road infrastructure in Japan is remarkable. The design and architecture of roads and other planning processes has indicated that the Japanese engineers and urban planners have advanced to the next level of the developmental phase. Throughout the journey (way towards every study tour areas/destinations) even in rural communities, the road infrastructures and the methods employed to prevent soil erosion demonstrates sustainable methods of community development. Similar to Bhutan, the Northern part of Japan like Miyazu and Miyama cities are mountainous regions amongst many but the road infrastructures towards these regions exhibits one of the most palpable infrastructures. As observed and experienced, the sustainable road constructions on the hilly landscape had been a challenge for Bhutan to achieve for years of development plans and maximum of the government budget has been allocated for construction and maintenance of those roads annually. The road towards Miyama and other study tour areas have given some of the most prominent answers for achieving sustainable road constructions such as the use of tunnels, building retention walls with different designs and use of iron net over it, etc. Such embodiments evinces that the Bhutanese engineers and development/urban planners need to learn to endow with sustainable infrastructure development in the country.
＜要約＞
道路インフラと都市計画：日本の道路インフラはよく整備されており、そのデザインと建築構造は次世代の域に達している。全旅程を通して目にした道路インフラと土壌浸食防止の技術は、地域共同体の開発の持続的方法を示唆する。ブータンの山間・丘陵部での道路建設は長年の計画と莫大な予算を必要とするものであった。美山へ向かう道路は、持続的道路建設のためにはトンネルとともに鉄網に覆われた擁護壁などを用いる必要があることを示している。それを実現するためには、ブータンの技術者と農村・都市計画専門家による持続的インフラ開発計画が必須となる。

Agriculture to Industrialization: The establishment of Miyazu Olive Oil Association at Yura area and the Vinegar Company called Eoieo Company at Kunda area in Miyazu City has attracted researchers, academicians and local administration to devise its capacity to promote agricultural production into diversified industrialized products. The industrialized products here mean the “value addition” to the local produce to generate higher income from the market.
The Olive Oil Association has currently 16 members and 3000 Olive plants. Through field work,

it was observed that Olive plantation doesn't require attention and the plants grows well in sandy soil (dry) which mostly the barren land has the composition. By looking at some of the features that the plants grows, it was found that some of the regions like Rangjung, Radhi, Bartsham, etc. in Bhutan have high viability of Olive Oil Plantations. The head of association Mr. Aika said that the company can produce more than 150 liters of olive oil annually and for every 0.1
liter (100 ml) it cost Yen 2000. Therefore, through simple calculation the association's income annually is expected to cross Yen 3,000,000 just for oil production. Similarly, Mr. Toshiro Akiyama a brewery maker at a vinegar company called Eoieo Company at Kunda area in Miyazu City works closely with the farmers for the promotion of rice and sweet potato production. Although, the conceptualization of vinegar processing methods is different from that of the advanced factories, the final produced of the company has high return of income due to its well planned value addition systems and market-based approaches.
The findings depicts that these two rural development activities are viable in Bhutan. However, for the successfulness of the programs the concern stakeholders necessitate to develop action plan/framework for the capacity development of farmers in Bhutan.
＜要約＞
農業から産業化へ：宮津オリーブ組合が設立された時には研究者や地方行政官が、さらなる付加価値を持った製品を目指した。オリーブ組合は 16 名のメンバーからなり、三千本のオリーブの木を栽培している。我々の観察によれば、オリーブ栽培は手間をかけずに砂地ででき、ブータンでもできそうである。組合長によれば毎年 150 リットル以上の生産が可能で、0.1 リットル当たりの生産費は 2000 円とのことなので、単純計算すれば油販売だけで年三百万円の収入となる。また飯尾醸造では、案内して下さった方の話によると、最終生産物による収入は付加価値の高さと市場での流通の在り方から価値が高いとのことである。このような会社の在り方はブータンでも有効と考えられる。その成功のためには、農村に住むブータンの人材の能力を高める必要がある。

Others　An Interactive Session at Miyazu: Mr. Syunsuke Terada, a member of Community-Reactivating Cooperation Squad and a talented baseball player who works to solve local issues by promoting tourism, distributing information through some news-letters and by initiating community activity.
We have also learned how to make Sandawara, a traditional Japanese candle holder which can be used to float candles in water while praying to the ancestor's soul. It's a straw art and craft and to get a beautiful final product, we need to have immense patience, dexterity and hard-work. Moreover, a session in the afternoon with community people and Miyazu high school students was also conducted. The high school students are from the program called Field Exposure Unit

which was established in 2015 and officialized in 2017. The unit focuses on engaging the students in various development programs like natural environment and locality conservation, group or individual research on bio conservation and environmental science, measuring the diameter of tree to survey big tree species, repairing trekking roads and cleaning fossils.

The session was also enriched by 21st Century Dream Council presentation. The council has 106 voluntary members from different villages within Miyazu city. The main goal of the community member is to focus on enhancing security and sustainability in the community, recognize village value to encourage tourism, resource collection and collaboration with youth project. And in order to achieve their goals, they have divided themselves into 3 groups (i) Information group: to distribute information in the community; (ii) Social service division: carry out social work in the community like grass cutting and planting flowers to beautify the community, and (iii) History and Culture division: to promote the culture and preserve the tradition in the community. The Miyazu community also has another community called Chi Ki Kai Community Council and members are mostly retired people above age 65. The unit focuses on the proper utilization of resources by using closed school building for holding community functions, raising 'Ayu' fishes and branding.

Mr. Yu Sekino, local administration officer is a youth project coordinator in Miyazu area. His activities like preservation of historical spots in and around Miyazu city has also contributed to local revitalization.

The 700 meter trekking has led the participants to explore one of the oldest Buddhist temples and some of historical monuments used as a demarcation during 18th century.

A tour to Seya region introduced us to yet another concept of depopulation. There are 5 villages in Seya region and most of the houses in the village are abandoned. The Kigo village is one among these 5 villages in Seya region, which is being abandoned by the ethnic inhabitants due to harsh weather condition during winters (4meter high snow fall in 1993) and the job opportunity in a hand loom industry in Miyazu city. Nonetheless, there are some evidences of in-migration from other regions to the area. It is also observed that the community people leave vindication utterance on the stone. For example, Tsakano family left their home 2 years back with an apology carved on the stone for letting go of a house inherited by 12 generations.

The participants also visited the historically Kamimiyazu to observe the preservation of the famous 1200 year old footpath from Kyoto to Miyazu. The footpath is a stone paved with some provision for horses and other animals to walk comfortably. Mr. Toru Jyoke (92 years old man) led us to the mountain to share the history of footpath. Until 1939, people used to travel on foot for 3 days to reach Kyoto to carry marine products and for other purposes as well. The view of Miyazu bay from the resting place is beautiful and we could find many remnant checkpoints or teahouses.

The final visit to Misaki, Moriyama city was indeed a much awaited moment for all the participants to see and observed Japanese children. The Summer Education Program observed around 60 primary school children. It was a very interesting interactive session where cultural values were being exchanged through various programs such as the famous Japanese summer game of splitting the water melon, fetching the noodles and exhibition of Bhutanese tea (suja) and snacks (zaw, & seap) and the traditional dance performance.

＜要約＞

その他：上宮津地区、美崎地区での交流プログラム

先祖を供養する際に用いる伝統的な藁のロウソク立て「桟俵」の作り方を教えてもらい、また、地元の人々や宮津高校の生徒たちとも意見交換した。生徒たちは地域環境保全に取り組むグループで、樹木の太さの計測や遊歩道の修繕活動をしているという。「上宮津 21 世紀夢会議」は若者たちのグループと連携して地域の安全と持続性をめざした活動を行っている。会議は 106 人のボランティアを 3 グループに分け、1) 広報活動　2)草刈りなどの奉仕活動 3)地域の伝統を守る活動　を実践している。さらに宮津には主として 65 歳以上の退職者からなる廃校の再利用活動を行うグループなどもあり、神社仏閣や史跡巡りなどのプログラムも行われている。

世屋地区では人口流出の実態を目にした。積雪の深さや就労機会を求めてなど離村の要因はいくつかあるが、「12 代続いた家を捨てるのは先祖に申し訳ない」と離村に際して石碑に残した村人の悲しみはいかばかりであったろうか。ただそのような村にも、わずかではあるが流入者がいることは救いに感じられた。

上宮津では 92 歳になる老人に 1200 年前からある京都市まで続く山道を案内してもらい、歴史を聞いた。道は馬などが歩きやすいように所々石で舗装され、1939 年まで地元の人々が京都まで海産物などを運ぶために利用していたと言う。

最後の守山市美崎地区では 60 人の小学生が集まる夏休み子供教室に参加して一緒にゲームをしたり、ブータンの食べ物やダンスを提供して交流を深めた。楽しく過ごしながら日本の子供たちを知る良い機会となった。

Points to Note:

- Besides all these available socio-economic development/facilities in the rural areas, Japan has been challenged with increasing trend of internal migration from rural communities to urban.
- It is observed that the population of Japan is expected to decrease due to drastic decline in the fertility rate.
- Members of all community associations are above 65+. Therefore, with increasing out-migrants and less child birth the panorama of these community associations are at risk of dissipation.

＜要約＞

その他気づいた点：農村の社会経済的発展と整備された施設にも関わらず、日本では農村から都市へ人口が移動し続け、現在でも出生率の減少によるさらなる人口減少が予想されている。自治会のメンバーは全て 65 歳以上で、人口流出と出生率低下のために自治会は消失の危機にある。

B. Policy Recommendations for Rural Development in Bhutan

1. Tourism Tax: For the development of rural communities in Japan, the independent associations in every community work effortlessly. They work closely with the local administration for the framework development and planning. The activity such as folk museum development, environment conservation, landscaping, etc. have played pivotal role in inveigling the increasing number of tourist in the locality. Therefore, all the tourism tax is being collected by the concern locality not by the government. For example, to enter into the Shrine or some other historical/traditional revived spots or for the sight-seeing spots like observation deck of Miyazu City tourist pay the entrance fee at the gate of each visiting place. Thus, it is very crucial for RGoB to critically emphasize and develop standard framework for tourism tax by reviewing the tourism policies.

2. Independent Rural Community Development Association: As aforementioned, the presence of independent rural community development associations has greater impact on the rural development and revitalization programs since this promotes local participation participatory approach is strengthened prodigiously. Despite having local government chosen by the local people the local participation in the sustainable development planning is observed to be a failure in Bhutan. This is because as observed, the chosen local government/administration after election works as a government body not as a local body. However, the introduction of independent local/rural development association/body like Japan could boost bottom-up decision making and actions.

3. Road Constructions and Re-plantation Program: As observed in Bhutan, after the construction of roads or other infrastructures there is lack of programs triggering towards re-plantation of trees destroyed. With collaboration of local administrations, the local development associations plan the re-plantation of destroyed environment and are very successful in achieving the objective. The concern government, private and other agencies like Ministry of Works and Human Settlement (MoWHS), Royal Society for Protection of Nature (RSPN), etc. in Bhutan necessitate collaboratively working and device stratagem for reviving the destroyed environment immediately.

＜要約＞

B.ブータンでの農村開発政策に対する提案

1.観光税

日本の農村社会の改良改善は、村の自治会と自治体（行政）が連携協力して行われている。民族博物館の設立や環境保全活動によって観光客数は増加することが期待されるが、観光税は政府ではなく地域の実施主体によって徴収されことが望ましい。例えば宮津で観光スポットを訪れる観光客は、各観光地の入り口で入場料を払っている。ブータン政府も観光税に対する基本的枠組みを明確にする必要がある*。

*ブータン政府は海外からの旅行者に対して公定料金を設定している（夏季：290 ドル/日/人、冬季 : 240 ドル/日/人）。公定料金の約 2 割弱は直接国庫に納入されるが（その他は宿泊・食事代、移動費、ガイド費など）、直接地元に落ちるお金は限られている。（赤松追記）

2.農村開発のための自治会の重要性

農村開発や農村活性化のためには、住民参加を促すための自治会の存在が重要となる。ブータンには選挙で選出された人々からなる地域政府は存在するが、地域住民の参加による農村開発行政は成功していない。これは「自治体」が政府としての仕事をすることを優先し、地域の「自治会」として存在しないからである。日本のような自治会を設立すれば、地域住民からの意見集約とそれを反映した施策が可能となる。

3.道路建設と再植栽プログラム

ブータンの道路をはじめとするインフラ建設では、後の再植樹の可能性が考慮されていない。地方行政と協働することにより地方の自治会は、環境整備のために再植林を計画することができる。関連する労働入植省や自然保護協会等は、悪化した環境の復興のために協働作業を進める必要がある。

OUTCOME

This project has brought several important outcomes at the end. The following are some of the significant achievements of the study tour program.

a. Capacity Development - Knowledge and Skills: The study tour program has familiarized the participants' on various concepts on rural development and revitalization programs. Most of the programs have taught the participants about: (1) The population, environment and development linkages; (2) The implication of change in demographic variables on socio-economic development and recent development in relation to rural community development. The training helped participants to look at emerging population and development issues from the broader perspective and addressing this issues demands the multidisciplinary approach. All the skills and acknowledge acquired during the stuyd tour will help in the effective delivery and to maintain the quality of rural development and revitalizaton programs in Bhutan.

b. Action Plan Development　The GNH Center: The participants have been actively involved in developing action plan for the GNH center in Sherubtse College with the CSEAS team and

finalised that the first project for US$ 3000 will be initiated either on December 2018 or January, 2019.

c. Collaboration: To strengthen the collaboration between Sherubtse College and CSEAS, Kyoto University, the participants also discussed vigorously on various aspects of rural community enhenacement programs such as identification of the vital initial phase activities like conducting action research in the identified community as pilot project, formation of Student Rural Association, etc. From much deliberations, Mr. Jigme Singye assured to carry out research project on "Feasibility Study on Independent Rural Community Development Associations" either in Radhi or Bartsham Gewog to kick start the GNH Center. Moreover, actvities such as "Field Exposure Unit", and "Beautification Unit" in Sherubtse College and "Course Based & Internship Program" in CNR will be initaited.

＜要約＞

結果

a. 能力開発～知識と技術：スタディ・ツアーを通して農村開発と活性化プログラムについての様々な考え方を知ることができ、また、人口と農村開発の問題はより広く学際的な視野でみる必要があることを学んだ。ここで身に着けた知識と技術はブータンでの農村開発と農村活性化のプログラムに役立つものとなるだろう。

b. 行動計画～GNH センター：参加者はシェラブツェ大学における GNH センター設立プログラムに関わってきており、2018 年 12 月もしくは 2019 年 1 月から 3,000 ドルの予算で最初のプロジェクトが始まることになっている。

c. 共同研究：シェラブツェ大学と京大の連携を強めるために、参加者は地域共同体の最初の調査内容や学生の農村開発組織の設立などについて多くの議論をし合った。その結果、ブータンの二か所で農村振興自治会設立のための予備調査を行うことになった。さらに農村活動ユニットと美化ユニットをシェラブツェ大学に、学習・実習プログラム課程を自然資源センターに設立することを目指している。

SCOPE OF THE PROJECT

This project is a multidimensional in nature as it deals with the development prospectives. For the rural development or revitalization programs, the invitation of Planners, District and Local Administrators, Lecturers/Researchers from Engineering Colleges (JNEC and CST), farmers, etc will furnish holistic results (outcome) in a deliberated mode.

Moreover, the establishment of GNH Center in Sherubtse College will encourage development researchers and learners to explore and initiate programs in rural communities. Since Bhutan is in the conjuncture of all development related issues, the sustinence of this project will be at par with the country's development plans. However, the success of the project depends critically on the level of framework development.

＜要約＞
プログラム（合同フィールド実習）の展望
本プログラムは多面的な側面を持ち、農村の開発・活性化のために計画立案者、地域の行政官、大学の研究者、農民等の参加によってはじめて可能になる。さらに、シェラブッチェ大学の GNH センター設立は、開発関係者による地域コミュニティでのプログラムを促進することにつながる。本プログラムの成否は、プログラム枠組みの完成度次第にかかっていると言える。

ACKNOWLEDGEMENT
All of the Bhutan team members would like to thank CSEAS, Kyoto University, Japan for the wonderful opportunity to explore and learn from the experiences of Japan. We indeed had various escapade. Similarly, our appreciation also goes to the college management who relieved us to participate in this program.
Thank you all! Aray Gatoo Gozai Mas!
＜要約＞
謝辞：私たちブータンから来たメンバー全員は、日本でのプログラムに参加できたことを京都大学東南アジア地域研究研究所と日本の地域の方々、ブータン王立シェラブツェ大学に感謝します。大変ありがとうございました。

フィールド実習の様子：

＜京都府南丹市地井地区＞

北集落（かやぶきの里）視察

民俗資料館の設立経緯や運営に関する聞き取り調査

地域の現状や住民活動に関する講習会及び意見交換会（知井振興会）

フィールド調査（佐々里集落）

フィールド調査（佐々里集落）

＜京都府宮津市＞

松尾の棚田から眺める宮津湾

地域の方の指導による桟俵づくり体験（旧上宮津小学校）

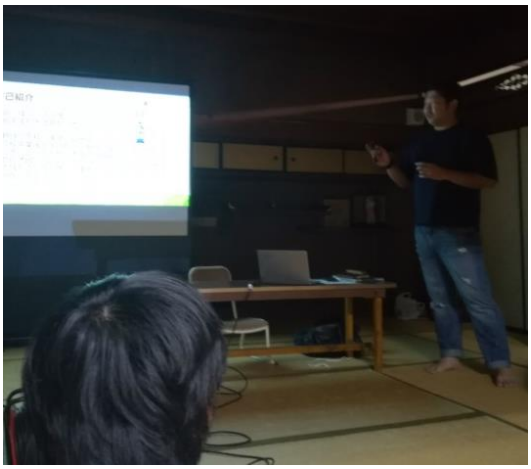
上宮津 21 夢会議×上宮津地域会議×宮津高校フィールド探求部×ブータン・取り組み発表及び意見交換会（上宮津公民館）

杉山・エコツアー実習

成相山歴史トレッキング（案内人：関野氏）

オリーブ園視察（案内人：秋鹿氏）

酢づくりと地域活動（案内人：秋山氏）



地域おこし協力隊活動（案内人：寺田氏）

上宮津実習後の地域の方を交えた感想発表及び意見交換会（上宮津公民館）

＜滋賀県守山市美崎地区＞

地域の子供たちとの交流

文化交流プログラム（歌と踊り）

文化交流プログラム（ブータン料理）

ラップアップ・ミーティング（京都大学）

４－３．ブータン×ミャンマー×京都大学・合同フィールド実習２０１９

参加者：京都大学・教員　３名
京都大学・学生　８名
神戸女学院大学・教員　１名
神戸女学院大学・学生　１名
ブータン王立大学シェラブツェ校・教員　１名
ブータン王立大学シェラブツェ校・学生　２名
ブータン・タシガン県バルツァム郡・農家　３名
マウービン大学（ミャンマー）・教員
ミャンマー・エーヤワディー地方域・マウービン県・農家　１名

実施日程：2019 年 7 月 29 日～8 月 9 日

実施地域：京都府宮津市、京都府南丹市、滋賀県守山市等

実習の概要・目的：過疎や離農、高齢化などの課題を克服していくためには、既存の先入観にとらわれない先見性に富んだ新しい視点が必要である。過疎や離農、高齢化問題の先進国である日本では近年、経済や物質的発展に偏重しない、自然・文化などの地域資源の積極的な活用、また地域密着型の高齢者ケアなどの福祉・保健活動を通した地域づくりが進められており、徐々にではあるが農村で暮らす価値が見直されてきている。ブータンでは国民総幸福（GNH）の理念に基づき農村問題に取り組もうとしており、またミャンマーの農村では、日本やブータンで薄れてしまったもしくは薄れつつある伝統的な文化や価値観が今尚息づいている。本実習は 2018 年度に実施された「ブータン王立大学シェラブツェ校×京都大学・合同フィールド実習」に続き、ミャンマーと国内他大学からの参加者を加え、京滋の農村地域をフィールドにして、大学生も交えながら実習や交流などを通して日本、ミャンマー、ブータンの視点から“農村で暮らす価値”を相互に再発見し合うことを目的としている。

本実習は、トヨタ財団助成金「アジア農村で暮らす今日的価値の再発見―日本、ミャンマー、ブータンの当事者的相互交流―」（代表：坂本龍太（京都大学））、科研費基盤 A「アジアの在地の協働によるグローバル問題群に挑戦する実践型地域研究」（代表：安藤和雄（京都大学））の助成を受けて実施されたものである。

実施スケジュール：

7 月 29 日：京都大学・薬学研究科総合研究棟においてキックオフ・ミーティング及びワークショップ

7 月 30 日：移動（京都市から守山市（滋賀県）へ）
守山市役所表敬訪問
速野区公民館訪問
移動（守山市から宮津市（京都府）へ）

7月31日：世屋地区視察（午前）
世屋公民館訪問（午前）
日置公民館において地域の概要説明会（午後）
8月1日：日置地区農家見学（午前）
世屋・木子地区視察（午後）
8月2日：上宮津地区盛林寺において座禅・お茶体験（午後）
上宮津公民館にて地域の活動紹介（午後）
8月3日：杉山・エコツアー（午前）
地域住民との協働による杉山林道整備作業（草刈り）（午後）
飯尾醸造見学（酢造りと地域での取り組み紹介）（午後）
上宮津公民館において意見交換・懇親会（夕方）
8月4日：伊根町視察（午前）
移動（宮津市から京都市へ）
8月5日：夏休み大川自由研究室参加（滋賀県守山市美崎地区）
8月6日：奈良女子大学訪問、研究に関する意見交換
8月7日：移動（京都市から南丹市美山町（京都府）へ）
知井地区集落、民俗資料館等見学（午前）
知井振興会において地域の現状・取り組みに関する講習会（午後）
8月8日：知井振興会において地域の現状・取り組みに関する講習会（午前）
移動（南丹市から京都市へ）（午後）
8月9日：京都大学・薬学研究科総合研究棟においてラップアップ・ミーティング

資料①：ワークショップ（7 月 29 日）発表資料

INTRODUCTION OF BARTHSAM GEWOG & RURAL DEVELOPMENT ISSUES:
out migration, gungton, wild human conflict, and activity of happy farmer's group

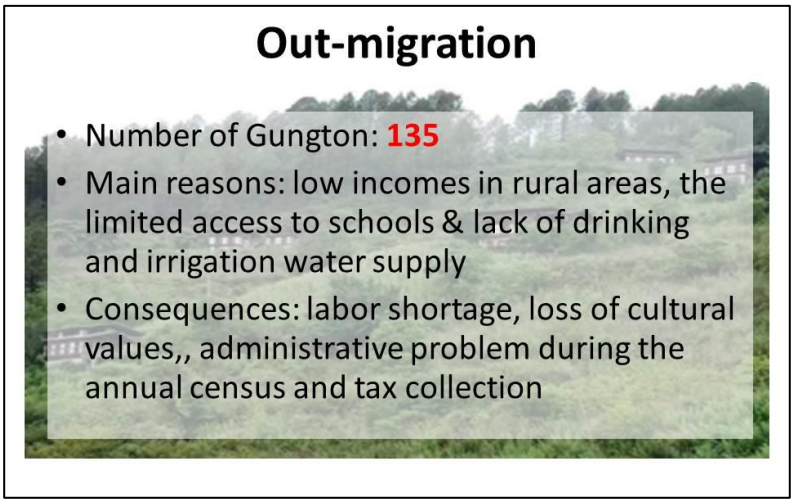
１）バルツァム行政地区と農村開発問題の紹介～離村、空き家、獣害、そして「ハッピー・ファーマーズ・グループの取り組み」～

- Bartsham gewog is located in the north of Samkhar, west of Bidung and east of Yangneer gewogs and has border with Ramjar, kamkhar and Yalang gewogs of Trashi Yangtse Dzongkhag.
- area of 35.1 square kilometers.
- It is 25 km away from Trashigang Dzongkhag with gewog centre road measuring to 19.5 km.

２）バルツァム行政地区（タシガン県）は３つのタシガン県の行政区と３つのタシ･ヤンツェ県の行政地区に囲まれている。バルツァム行政地区の面積は 35.1 平方キロメートル。タシガン県の県庁所在地であるタシガンからは約 19.5 キロメートルの距離に位置している。

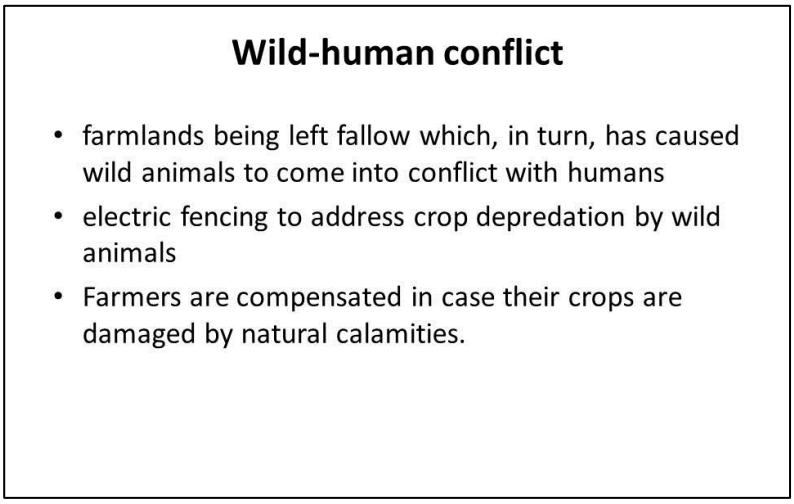
- farming main activity and the maximum source of income is from vegetable farming
- 5 vegetable farmers group and 3 community forest group
- 485 households, 30 villages
- Population - 3825
- Gungton - 135
- Community centre – 1
- Farm shop - 1: No of farm roads - 18

３）バルツァム地区内には３０の行政村があり、４８５世帯３８２５人が暮らしている。しかし１３５軒（世帯）の空き家が見られる。地区では農業が主幹生業であり、各世帯の現金収入の大部分は野菜栽培に由来している。



４）離村

バルツァム地区内には１３５軒の空き家（離村世帯）がある。離村の主な原因は、都市との収入格差、限られた学校へのアクセス、インフラの未整備（特にバルツァムでは水不足問題)。結果として労働力不足（農業）や地域文化の消失、また行政的にもセンサス情報や税金徴収などにも問題が発生している。

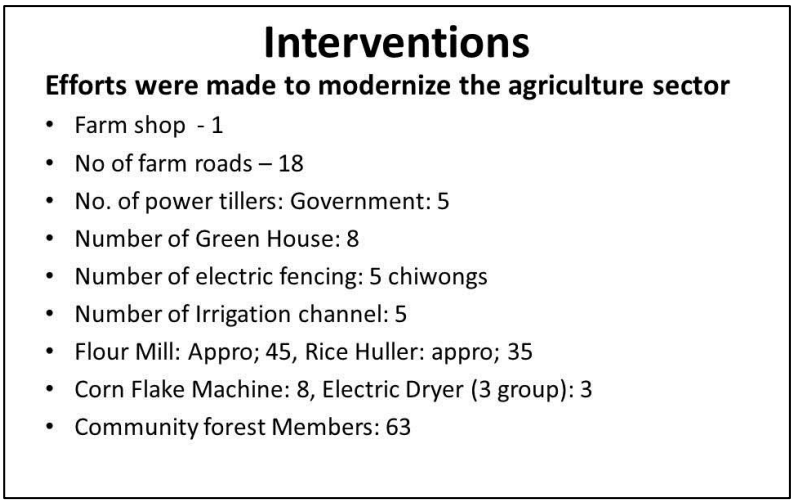


５）耕作放棄地と獣害

離村や離農によって耕作放棄地も増加。耕作放棄地の出現と藪化によって獣害も増えている。また気候変動も作物の収量に影響を出している。

—電気柵の設置

—不作への保障



６）対策

農業の近代化を通して離村に対する様々な試みがおこなわれてきた。

試み：ファーム・ショップの設置、政府による耕運機の提供（５台)、ハウスの導入（８棟)、獣害に対する電気柵の設置補助、灌漑水路の整備、製粉機（約４５台）や脱穀機（約３５台）の配置など。

Establishment of
HAPPY FARMERS GROUP

As per the His Majesty's vision unemployed youth are advised to participate in agriculture activities to sustain their livelihood and make Bhutan self sufficient. We are immensely interested to improve our agriculture activities in locality. To accomplished this, we are looking forward to form a group known as "Happy Farmers Group.
"Happy Farmers Group" is the most recently established on 24th April 2018 with 13 members from two chiwogs and three villages. We would like to do agriculture work in group and improve yields in quantity and sell in regional market.

７）ハッピー・ファーマーズ・グループの設置
都市部の失業問題や自給率の低下への懸念⇒ハッピー・ファーマーズ・グループを２０１８年４月に立ち上げる。バルツァム地区の３村から１３名のメンバーで構成。

Aims and Objectives
of Happy Farmers Group

Members of HFG: 13 (male:7, female:6)

- To produce pure organic farming products
- To encourage the farmers in various farming activities
- To prevent rural urban migration
- To solve un-employment problem
- To convert fallow land into cultivation land.
- Improve commercial farming activities

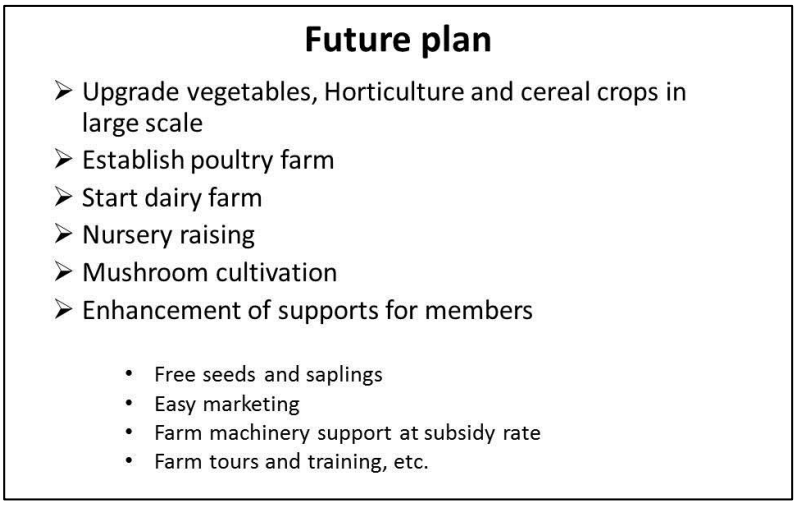
８）ハッピー・ファーマーズ・グループの目的
・有機野菜の生産
・農業に関する様々な取り組みを促進する
・離村を防ぐ
・雇用問題を解決する
・耕作放棄地を農地に戻す
・さらなる商業的農業活動を促す

Present activities

- Vegetables farming:
  Cabbage, Cauliflower, Broccoli, Peas, Beans, Mustard green, Potato, Tomato, Chili, Egg plant, Cucumber, Pumpkin, Carrot, Radish, Garlic, Ginger, Asparagus
- Horticulture farming:
  Peach, Pear, Plum, Persimmon, Walnut
- Cereal crop farming:
  Maize, Paddy, Quinoa

９）ハッピー・ファーマーズ・グループの現在の活動
・野菜栽培（キャベツ、カリフラワー、ブロッコリー、豆類、からし菜、ジャガイモ、トマト、トウガラシ、ナス、キュウリ、カボチャ、ダイコン、ニンニク、ショウガ、アスパラガス）
・果樹（モモ、ナシ、ウメ、カキ、クルミ）
・穀物栽培（トウモロコシ、イネ、キノア）

１０）グループへの機械の導入
耕運機、トウモロコシ脱穀機、飼料裁断機、チェーンソー、草刈り機、製粉機、脱穀機、農薬/除草スプレー



１１）今後の活動計画
・野菜、果樹、穀物栽培の栽培面積拡大
・養鶏事業
・酪農事業
・育苗の取り組み
・キノコ栽培
・グループメンバーへの支援強化（種・苗の無償配布）、販路、機械借用への補助、研修等）

資料②：

ブータン王立大学シェラブツェ校では2019年3月に大学と地域が協働で課題に取り組むための GNH Community Engagement Center（資料では Engagement ではなく Development と標記）が設置されました。発表ではタシ・ツォモさんが GNH-CEC の今後の活動に対する提案をおこなわれました。

Action plan of GNH Community Development Center for Rural Development

By Tashi Tshomo

Location

Vision: An internationally recognized institute in Liberal arts and sciences with an emphasis on GNH based learning.

Mission: To provide GNH inspired quality tertiary education in Liberal Arts and Sciences.

To contribute to the development of knowledge-based society through knowledge creation, sharing and advocacy.

３）ビジョンとミッション①

ビジョン：国際的に認識された GNH（国民総幸福）を基にした教育を推進する総合的学術を推進する機関を目指す

ミッション：GNH を基にした第三の教育を提供する。知識の発掘及びそれらの普及を通して知識基盤社会の創出に貢献する。

Gross National Happiness Cell

Rationale

- increasing trend in rural – urban migration - in eastern Bhutan.
- The focus on community development and "engaged learning" is carried out by Colleges through Clubs, Societies and individual initiatives but not carried out extensively as a University's goal.
- Therefore, the need for a GNH Community Development Outreach Programme has been instituted with support from CSEAS, Kyoto University with the aim to work with the rural community in and around the College to promote values and happiness through agriculture and rural development.

４）設置背景

・農村部から都市部への急速な人口流出（特にブータン東部）

・大学としての地域活動と"エンゲージド・ラーニング"の推進（学科、サークルまたは個人としては実施されていたが）

これらを推進するため京都大学東南アジア地域研究研究所の支援を受けブータン王立大学シェラブツェ校に設置。

Vision:

- Create an outstanding climate of support for rural development to enhance the well-being and happiness of the people

Mission:

- Establish institutional and community linkages
- Practically implement GNH values at the grass root level
- Research- agriculture & rural development

5）ビジョンとミッション②

ビジョン：人々の幸福を高めることによる農村開発を支援する環境づくりおこなう

ミッション

・組織的なコミュニティとのつながりをつくる

・草の根レベルにおいて実践的にGNH に基づく活動を展開する

・農村開発研究の推進

Proposed Activities

i. Identifying and adopting GNH Village

- Thragoem village - 15 minutes away from the college will be adopted as the GNH village.
- 15 households and about 150 population.
- The village is hard hit by migration and facing the problem of population aging.

6）取り組みの見通し（提案）

<u>①GNH モデル集落の設置</u>

⇒Thragoem 集落。大学より 15 分の距離に位置し、約 15 世帯 150 人が暮らす。集落は過疎や高齢化問題に直面している。

Activities to be initiated in GNH village

- Provision of basic amenities and services
- Initiate organic farming
- Marketing of agriculture products through branding
- Workshop and seminar on happiness and wellbeing
- Establishment of a retreat center for the elderly population
- Waste segregation and recycling
- Meditation and mindfulness practice

7）モデル集落での活動（予定）

・生活基盤・サービスの提供

・有機農業の推進

・農産物の販路とブランド化

・幸福についてのワークショップ/セミナーの開催

・高齢者の福祉センターの設置

・ゴミ分別とリサイクルの推進

・瞑想とマインドフルネスの実践

ii. Open traditional tools museum at Sherubtse College

- The agriculture tools will be collected from a various part of the country and will be preserved at museum.
- Display of traditional and modern tools will help understand the socio-economic transformation and status of the community.

*help to connect youths to local farming practices and rural life.

８）取り組みの見通し（提案）

②学内に民俗資料館の設置

・国内各地から民俗資料（農具等）を収集し、資料館にて保存する

・収集した民具を現代の器具などと並べて展示し、コミュニティや社会の変遷の理解を促す

iii. Organic farming

- College Organic Farming Unit: will promote organic farming in communities & support the national initiatives to increase homegrown food items.
- The GNH center in collaboration with College will start a "Farmers Market"
- To enable villagers to sell their products to College students, staff and faculties. Also- help promote their products to other parts of Bhutan.
- The center will conduct workshop and seminar on organic farming

９）取り組みの見通し（提案）

③有機農業の推進

・有機農業クラブ（学生）がコミュニティの有機農業を推進し、地域産農作物を増加させる支援を実施。

・大学と GNH センターが協同して"ファーマーズ・マーケット"を立ち上げる（教員や学生が地産物を購買できるようにする）

・有機農業ワークショップ/セミナー

vi. Support services

- This center will enable dialogue and consultation with the community local leaders and help reach support to the required sections.

Some activities include:

a. Education and awareness programme

b. Volunteer services during the peak agricultural season

and other community development related activities.

c. Donation and contributions such as clothes, rations, etc.

１０）取り組みの見通し（提案）

④サポート・サービス

・GNH センターに地域住民のための相談窓口を設け、関連する取り組みや学科などとのマッチングをおこなう。窓口の活動は以下を含む

-教育・啓蒙プログラム

-農業ボランティア活動（農繁期）

-寄付活動（服や日用品等）

v. Lifelong Learning Center

- Center to engage and support elderly people
- The college Zangdophelri will be dedicated for the elderly people to practice meditation and mindfulness.
- Such provision will provide a venue for interaction and revive the community vitality.
- Center to also provide services to retired civil servants for lifelong learning activities through membership to College Library & facilities. Some of them can be engaged in delivering guest lectures.

１１）取り組みの見通し（提案）

⑤生涯学習センター

GNH センターは高齢者支援にも従事する

・学内の寺（ザンドペリ寺）において高齢者に瞑想やマインドフルネスの場を提供する

・公務員退職者などに対して大学図書館や学科との協働のもとに生涯学習を提供する。

vi. Research with a Public purpose

- The Centre will initiate action research in collaboration with the community

Some thematic areas of research will include:

- Food security
- Human-wildlife conflict
- Depopulation
- Wellbeing and happiness
- Culture and tradition
- Agriculture and rural development
- Aging
- Rural livelihood

１２）取り組みの見通し（提案）

⑥農村のための調査

・GNH センターはコミュニティとの協働によりアクション・リサーチを実施する。リサーチは食料保障、獣害、過疎、文化と伝統、高齢社会などの領域を想定

vii. Entrepreneurship Programme

- focus on such youths through entrepreneurial training and life skill education
- The activity can be also extended to local farmers who want to pursue business to enhance multiple income sources for the local people and encourage College students to pursue business.
- The College Business Incubation programme will ensure the development of a business idea into a product.

１３）取り組みの見通し（提案）

⑦起業プログラム

・若者（大学生や村で農業に従事している若者）のための起業研修プログラムや生活技能教育プログラムを実施する。

・起業プログラムはビジネスアイデアを農村の地産物の発見・開発に大きく貢献する

viii. Village Stay

- Under this programme, students will stay in villages to provide care and support to elderly and children by helping to do agriculture and domestic works during their summer break.
- This programme will also be extended to International students through the College

１４）取り組みの見通し（提案）

⑧ビレッジ・ステイ・プログラム

・本プログラムでは、夏休み機関中に学生が村に滞在し、高齢者や子供がいる世帯の農作業や家事などを手伝うサービスを提供する

・これらのプログラムは本校の海外からの留学生にブータンの農村の生活や課題を学んでもらう上でも有効である

ix. Cultural Programme

- Villages in most parts of Bhutan are already facing the risk of losing their festivals due to acute rural-urban migration.
- Many villages report of not having enough Mask Dancers for the festivals due to aging problem.
- This programme will encourage our students to participate in local cultural festivals to enhance connectedness with the culture and tradition of our local community.

１５）取り組みの見通し（提案）

⑨文化プログラム

・ブータンの農村部では過疎化や高齢化によって祭りなどの様々な文化の消失が危惧されている。

・本プログラムは学生が村の祭りなどの文化行事に参加・支援することで地域の文化や伝統を学び保全するプログラムである。

- A yearly food festival on campus to help villagers showcase their local food culture and tradition for the students and other communities.

１６）

大学構内でフード・フェスティバルを実施することで、学生や他のコミュニティの人々に食を通した地域の文化を知ってもらうとともに、自己文化に対する認識を深める機械を創出する

資料③：合同フィールド実習 2019 実施報告（第 126 回日本熱帯農業学会（2019 年 11 月 23 日）（ポスター発表））

Depopulation and Abandoning Farming Problem as a Global Issue:

Burmese and Bhutanese Scholars' Experience in Japan, July-August 2019

Y. Akamatsu[1], K. Ando[1], K. Yajima[1], H. Uchida[1], S. Win[2] and T. Tshomo[3]
([1] Kyoto University, [2] Maubin University, [3] Sherubtse College, Royal University of Bhutan)

1. Introduction

To overcome rural development issues such as depopulation and abandoning farming, **the importance of outreach and engagement by higher education institutions** is getting to be recognized in Myanmar and Bhutan. For example, Sherubtse College, Royal University of Bhutan (RUB), established **GNH Community Engagement Center** in March 2019 to encourage local/rural contribution through a practice of Bhutanese development philosophy, called Gross National Happiness (GNH). However, their attempt is just getting started and the network for cooperation with the community is not good enough.

The Center for Southeast Asian Studies (CSEAS), Kyoto University, has established field stations in the rural area of Kyoto and Shiga Prefecture since 2008 and implemented several action researches in cooperation with local governments, residents' associations, NGOs and so on. These CESAS's working experiences and activities in cooperation with locals would be a lesson to scholars and local people in Myanmar and Bhutan to build up **University/College-Community partnership**. Furthermore, current Japanese rural revitalization activities have been practiced by **strong initiatives of community people**. The direct interaction among local practitioners would empower community activity in Myanmar and Bhutan in the grass-root level.

In the summer of 2019, the study tour was organized in rural area of Japan, and **two Burmese** (one scholar from Maubin University and one villager from Ayeyarwady Region) and **six Bhutanese** (three young scholars from Sherubtse College, RUB and three villagers from Trashigang) participated in the tour to strengthen mutual understanding and share the idea for rural issues and University-Community engagement.

2. Method

The study tour held in Japan from 29th July to 9th August, 2019 (Table 1). In addition to eight participants from Myanmar and Bhutan, four Japanese scholars accompanied with them as a facilitator as well as a translator. Furthermore, total 10 undergraduate students (grade 1-3) also took part in the study tour conducted from 2nd to 3rd August in Kamiyazu community, Miyazu-shi, Kyoto Prefecture.

■ PRA in Rural Community

The study tour was mainly conducted in the communities of Miyazu-shi (Kyoto Pref.), Nantan-shi (Kyoto Pref.) and Moriyama-shi (Shiga Pref.) (Figure 1).

Participatory Rural Appraisal (PRA) was applied to deepen mutual understanding for community issues and practiced activities through active interaction among participants and Japanese local practitioners.

Figure 1 Location of Study Tour

Table 1 Schedule of study tour from 29 July to 9 August 2019

Date	Place	Activity
29-Jul	Kyoto	Internal workshop (introduction of Myanmar and Bhutan)
30-Jul	Moriyama	Courtesy call on Moriyama city hall, visit Hayano-ku *Kominkan*
31-Jul	Miyazu	Visit Seya community and Seya *Kominkan* , Visit Hioki (lecture given by local practitioners)
1-Aug	Miyazu	Visit local farmer(Hioki), visit Kigo community
2-Aug	Miyazu	Visit Kamiyazu community (Cultural program, lecture on community activity by local practitioners)
3-Aug	Miyazu	Participation in community activity(maintanance of forest road)
4-Aug	Miyazu	Visit Kigo community
5-Aug	Moriyama	Participation in School Kids Summer Education Program
6-Aug	Nantan	Visit Kita community
7-Aug	Nantan	Visit community folklore museum(kita), Visit Chii Community Development Association
8-Aug	Nantan	Visit Chii Community Development Association
9-Aug	Kyoto	Wrap-up meeting

■ Analysis of Participants' Experience/Impression

Diary — Participants were requested to keep a diary of three most impressive experience with keywords each day. The keywords were explained by the fact-based experience or observation of each day.

Selection of keywords — Each participants selected three keywords with facts by ranking, and presented at wrap-up meeting (Table 2)

Scoring and Grouping — Each keyword was scored one point and summed up after checking the relationship between the fact and its keyword by the participants themselves (Table 3)

3. Result & Discussion

Table 2 Keyword and fact presented at wrap-up meeting by eight participants

Participant	1st Place (date)	1st Fact (observation, experience)	1st Impression	1st Keyword	2nd Place (date)	2nd Fact (observation, experience)	2nd Impression	2nd Keyword
A	Kamiyazu (8/3)	Grass cutting activity with local people	Cooperation of community people	People's cooperation	Misaki (8/5)	Water quality analysis (education program)	We can carry out the similar program in Maubin Univ with students for the community	Student contribution
B	Misaki (8/5)	Summer education program for local school kids	Collaboration program by community people and initiative in grass root level	Community based program	Kamiyazu (8/3)	Local activity	Presentation of natural resource for visitors and cultural heritage	Eco-friendly tourism
C	Seya (7/31)	Depopulated situation	I want to know the reason behind depopulation	Depopulation	Kamiyazu (8/3)	Local activity	Collaboration among people and also regulated organization	Cooperation
D	Hioki (8/1)	Organic pesticide	Instead of chemical, organic pesticides are developed in Japan	Organic pesticides	Hioki (8/1)	Floriculture	Flower can be a good commercial crop in my community	Floriculture
E	Kamiyazu (8/3)	Community activity	Elders' active participation	Citizen's participation	Seya (7/31)	Depopulation and stone inscription	Reality of depopulation in Japan	Depopulation
F	Moriyama (7/30)	Program of local government and its concept	Well-developed medical and educational facility	Decentralization of government program	Seya (7/31)	Empty houses and stone inscription	In Bhutan it would not happen because of our traditional culture	Depopulation
G	Kigo (8/2)	No native villager in Kigo village	Deterioration of landscape	Depopulation	Chii (8/7)	Preservation area of traditional buildings and landscape	Beautiful farmland, and traditional houses and landscape	Green tourism
H	Seya (7/31)	Stone inscription written about depopulation	Seriness of depopulation, Outmigration are the same issue in Japan and Bhutan	Out-migration	Kamiyazu (8/2)	Kamiyazu 21 Yume-kaigi (civil group)	This group may stop out migration and also solve issues in the community	Future vision

Participant	3rd Place (date)	3rd Fact (observation, experience)	3rd Impression	3rd Keyword
A	Chii (8/7)	Community Folk Museum	Appropriate their own culture and tradition	Cultural identity
B	Chii (8/7)	Conservated traditional farmers' house	Successful village of green tourism	Heritage of tradition
C	Misaki (8/5)	Cultural exchange program in Summer education program	Importance to know other culture	Cultural exchange
D	Kamiyazu (8/3)	Grass cutting activity in Mt.Sugiyama	voluntary work by community people	Volunteerism
E	Chii (8/7)	Folklore museum	Good for tourism and cultural heritage to young generation	Cultural heritage
F	Hioki (8/1)	Observation of organic farming	Innovation of organic pestiides	Organic pestiides
G	Kamiyazu (8/3)	Grass cutting work with local people	Sense of self-responsibility and community unity and volunteerism	Volunteerism
H	Chii (8/8)	Activities of Chii Community Development association	Attraction to tourist in different section	Sustainable tourism

Table 3 Grouped keyword and score

Keywords	Score
Community-based program	9
Depopulation	6
People's cooperation	3
Agriculture	3
Cultural heritage	2
Cultural exchange	1

● **Community-based program**

The keyword, "**Community-based program**" got the highest score through the study tour. Visited communities have practiced various activities, and participants seem to recognize the importance and potential of the community/local people's power for challenging rural development issues.

● **Depopulation**

In developing countries where Japan is considered as one of the successful developed countries, little is known about depopulation in Japanese rural areas. The reality of depopulated communities, such as ruining empty houses and closed primary school, was observed in visited mountainous communities. **The contrast between well-developed infrastructure and depopulated situation** gave a great impact on participants, especially from Bhutan.

4. Remark

At the end of wrap-up meeting, participants proposed several action plans based on the lesson from the study tour in Japan (Table 4). After a few weeks later of the study tour in Japan, some participants have reported that they have undertaken the implementation of their action plans in their communities (photo 1).

Photo 1 Collected old tools by Bhutanese participant
(Photo by G.Yoshida)

Their new trials in their communities might not solve the problems immediately, but **germination of community initiatives** and **international relationship** cultivated through the study tour would help to find a new pathway for challenging rural development issue and betterment of their rural life.

Table 4 Example of action plans proposed by Burmese and Bhutanese participants

Action plan (planner)
Establishment of traditional/heritage museum (Myanmar, Bhutan)
Establishment of model village of community development (Myanmar)
Organize volunteer group for helping aging people to help house cleaning, agricultural works, etc.) (Myanmar)
Cleaning campaign and waste segregation (Myanmar, Bhutan)
Promotion of local eco-tourism (guide book, photo contest, homestay program, etc) (Bhutan)
Re-use of abandoned farmland (floriculture, horticulture) (Bhutan)
Implementation of organic pestiside (Bhutan)

Acknowledgements

We are deeply grateful to Kamiyazu 21 Yume-kaigi, Kamiyazu Regional Council, Local guide group for Mt.Sugiyama Eco-tourism, Hioki Regional Council, Misaki residents' association, Hayano-ku Kominkan and Chii Community Development Association for their support and collaboration. This study tour program was supported by the TOYOTA Foundation's International Grant Program (headed by R. Sakamoto (Kyoto Univ.)) and JSPS KAKEN (Type A, headed by K. Ando (Kyoto Univ.))

126th Japanese Society for Tropical Agriculture @MIYAKOJIMA

次ページ：ポスター内容日本語要約

発表タイトル：グローバル問題としての過疎と離農：ミャンマーとブータンからの参加者らの日本農村での経験

発表者：赤松芳郎*、安藤和雄、矢嶋吉司、内田晴夫、ソゥ・ウィン、タシ・ツォモ

１．Introduction（背景）：近年、国際的に顕在化する過疎などの農村問題に対して、大学と地域の社会連携による取り組みの重要がミャンマーやブータンでも認識されつつある。京都大学東南アジア地域研究研究所は 2008 年より京滋の農山村で地方自治体、自治会、市民団体、NGO などと協働で研究・活動に取り組んでおり、これらは、ミャンマーやブータンの大学関係者・地域住民にとって各国の今後の社会連携や地域住民のエンパワーメントを推進していく上で大きな学びの場となる。これらを鑑み、計８名の大学関係者と地域住民をミャンマーとブータンから日本に招聘し、日本農村の現状、課題に対する相互理解を深めるとともに、地域の活動から大学-地域の社会連携、エンパワーメントを考えることを目的にスタディ・ツアーを実施した。

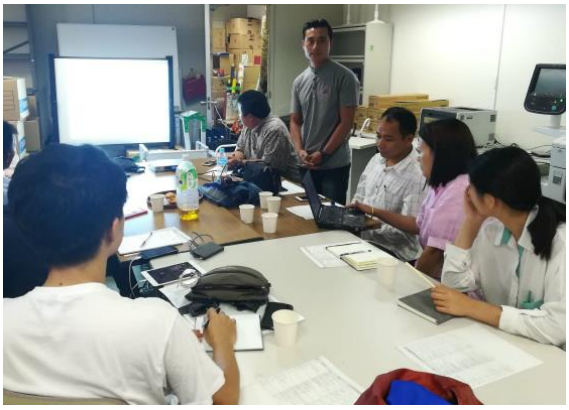
２．Method（方法）：2019 年の夏季に京滋の農山村においてスタディ・ツアーを実施し、一部のプログラムには大学生らも参加した。地域の現状や課題、取り組みをより深く理解するために参加型農村調査（PRA）の手法が用いられた。またブータン、ミャンマーからの参加者らは日誌（1 日ごとに、印象に残った３つの事柄をキーワードとその事柄を選択した理由とともに記録）を作成し、最終日に解析・まとめがおこなわれた。

３．Result & Discussion（結果と議論）：８名のキーワードをまとめた結果を下表に示した。“地域に基盤をおいた取り組み”が最もスコア（印象度）が高かった。訪れた農村では地域住民が主体となった多岐にわたる取り組みが活発におこなわれており、特に多くの取り組みが行政主導となっているブータンからの参加者は大きな感銘を受けたようである。また、実際に取り組みに参加することで“人々の協働・協力”の姿勢も印象に残ったようである。また、“過疎”は、先進国とされる日本で農村部の朽ちた空き家や耕作放棄地、廃校を目の当たりにし、地域の人々も意見交換をおこなうなかで重要なキーワードとなっている。

キーワード	スコア
Community-based program（地域に基盤をおいた取り組み）	9
Depopulation（過疎）	6
People's cooperation（人々の協働・協力）	3
Agriculture（農業）	3
Cultural hritage（文化的遺産）	2
Cultural exchange（異文化交流）	1

４．Remark（所見）：最終日のラップアップ・ミーティングでは参加者から彼ら自身を活動の主体とした時刻の農村問題に対する様々な提案がなされた。帰国後、一部の参加者からは既にこれらの提案を実際に取り組み始めたとの報告が届いている。彼らの取り組みは即座に農村問題を解決するものではないだろ。しかし、彼らの主体性、またスタディ・ツアーを通して培われた日本―ミャンマー―ブータンの交流基盤は、これからの農村開発、また問題解決を目指した大学-地域の社会連携の基盤創出に大きな役割を果たすだろう。

フィールド実習の様子：



キックオフ・ミーティング（京都大学）

守山市役所表敬訪問

公民館活動に関する講習会（速野区公民館（守山市））

世屋地区（宮津市）でのフィールドワーク

世屋地区公民館訪問と地域の現状に関する聞き取り調査

日置地区にて地域の現状・課題に関する報告および意見交換（日置公民館）

日置地域の方の農業活動視察

座禅体験（宮津市上宮津地区・盛林寺）

座禅後のお茶（宮津市上宮津地区・盛林寺）

上宮津地域のこれまでの取り組み発表及び課題等に関する意見交換会（上宮津公民館）

杉山・エコツアー実習

上宮津×ブータン×ミャンマー×京都大学～林道除草活動 in 杉山～

酢づくりと地域貢献活動の紹介（宮津市栗田地区・（株）飯尾醸造）

林道除草作業後の懇親会（上宮津公民館）

林道除草作業後の懇親会（上宮津公民館）

日本の重要伝統的建造物郡保存地区の視察（京都府南丹市美山町）

知井地区の現状と知井振興会の取り組み紹介（河野氏）と意見交換

ラップアップ・ミーティング（京都大学）

４－４．宮津市観光パンフレット改善会議（2018 年 11 月 24 日）

観光パンフレットの改善案を天橋立観光協会に持ち込み、気がついた点などに対して、学生らが天橋立観光協会の職員の方と協議をおこなった。

日程：2018 年 11 月 24 日

場所：天橋立観光協会

場所：天橋立観光協会職員：１名、大学生６名、宮津市役所職員１名、引率教員２名

＜学生からの提案（一部）＞

- 情報が多すぎるため、あまりインパクトがないので掲載情報を絞ってはどうか
- 見開きのページでテーマが異なると、わかりにくい
- 余裕をもったレイアウトにする方が見やすい（写真のすぐ横に別の説明文がくると見づらい）
- 地理学的面白さ、歴史、文化的価値の説明があるとより興味がでるのでは
- 宮津市全域の地図がないのでそれぞれの地域の位置関係がわかりにくい。市全体の地図を載せたほうが便利なのでは
- イベントを羅列するだけでない工夫があると面白い。例えば年ごとにイチ押しのイベントを一つ選んで大きく特集記事として扱ってもみるなど
- 宿泊施設の紹介は、単なる一覧表よりも、それぞれの宿の魅力や特色を伝える工夫があると面白い
- 観光エリアの紹介だけでなく具体的な店舗の紹介のほうが便利（掲載する店舗を募集してはどうか（掲載料も含めて））

＜会議を終えて（学生の感想）＞

宮津市は歴史、文化、自然など様々な魅力を備えているのはもちろん、天橋立という世界に通用する知名度を持った観光資源に恵まれています。さらに、東京からは直通夜行バス、京都や大阪からは直通特急列車や直通高速バスが運行されているなど、アクセス面でも周辺の他地域に比べて圧倒的に恵まれていると考えられます。しかし、こうした「武器」を沢山持っている宮津市ですが、宮津の様々な場所を　既存の観光案内パンフレットではそれらの魅力が十分に発信しきれているとは言い難いと強く感じたことがこの場を持たせて頂くきっかけとなりました。今回は準備不足のため、パンフレットの課題点を見つけることは出来たものの、その対案やより良い別の案の形を具体的に示すところまで行けなかったことが大きな反省点として残りました。この点については今後、継続的に宮津で活動していく中で解決の手がかりを見つけていけたらと思います。

話し合いの様子

４－５.地域医療・保健に関する視察・交流プログラム①

日程:2019 年 3 月 25 日

場所: 京都府南丹市美山町（美山診療所、旧知井小学校）

参加者: 4 名（ブータン保健省職員: 2 名、京都大学教員（引率）: 2 名）

活動概要：3 月 24 日にブータン保健省よりタシ・プンツォ氏、ウゲン・ワンチュク氏の 2 名が来日され、3 月 25 日に京都府南丹市美山町にて地域医療・保健に関する視察・交流プログラムを実施した。南丹市美山町の美山診療所、カナリヤ倶楽部（美山町知井地区）を訪問した他、かやぶきの里（北集落）や知見集落の放棄田や杉植林地を視察した。美山診療所では、所員の方より美山診療所の変遷や医療への取り組み、過疎・高齢化地域の医療問題などをご説明頂いた。さらに意見交換を挟み、デイケアセンターを含め診療所内をご案内頂いた。午後より、旧知井小学校でおこなわれているカナリヤ倶楽部（地域の高齢者の方が月に 1 度集まり昭和の歌を一緒に唄う）（2018 年 12 月より活動開始）の活動に参加した。ブータンのお二人からはブータンにおける高齢者ヘルスケアの説明とともに、カナリヤ倶楽部のような高齢者の方の活動をブータンでも取り入れていきたいとのお話をされた。また、お二人からはブータンの歌もご披露頂き、このような交流活動を今後も積極的にしていきたいという要望も参加されていた地域の方から頂いた。かやぶきの里や耕作放棄田の視察では、急速な農村部から都市部への急激な人口流出がブータンでも起こっている中で、どのように地域の伝統や資源を守り利用していけるか、議論がなされた。

旧知井小学校で地域の方（カナリア倶楽部）と交流

４－６.地域医療・保健に関する視察・交流プログラム②

日程:2019 年 12 月 16 日～12 月 21 日

場所: 京都市、宮津市（京都府)、南丹市（京都府）

参加者: 6 名（マウービン郡・郡保健局職員（ミャンマー）：１名、PAID（GNO)・事務局長（カメルーン)：1 名、大学教員: 3 名、学生：1 名）

プログラム概要：2018 年度に実施した南丹市美山町（京都府）での地域医療・保健に関する視察・交流プログラムに引き続き、宮津市を中心に視察・交流プログラムを実施した。プログラムにはマウービン郡・郡保健局（ミャンマー）よりトゥ・カ・チャン氏を招き、地域づくりに関連した地域医療・福祉の取り組みについて宮津市社会福祉協議会、宮津市保健福祉部（宮津市役所）を訪問し、取り組みの概要説明を受けるとともに意見交換をおこなった。また、チャン氏とともにアクション・リサーチによる博士プログラムを実施している Pan African Institute for Development（PAID）（カメルーン）よりエマニエル・カムデム氏を招へいし、地域福祉を含めた大学・社会連携について協議をおこなった。大学・社会連携の取り組みについて相互の知見を深めるため、市川昌広教授（高知大学）を交えて、ワークショップ「Action Research for Rural Development through Direct Involvement of University」を開催した。

実施内容：

12 月 15 日：キックオフ・ミーティング（京都大学)

12 月 16 日：移動（京都市－宮津市）
宮津市社会福祉協議会訪問・取り組み説明（午後）
宮津市役所表敬訪問（午後）

12 月 17 日：農村視察（宮津市世屋地区・木子地区）（午前）
宮津市保健福祉部（宮津市役所）・取り組み説明（午後）
移動（宮津市－京都市）（午後）

12 月 18 日：国際ワークショップ（京都大学)

12 月 19 日：移動（京都市－南丹市）（午前）
民俗資料館及び周辺集落視察（午前）
知井振興会・活動説明（午後）
移動（南丹市－京都市）（午後）

12 月 20 日：介護付き有料老人ホーム　ライフ・イン京都視察

12 月 21 日：ラップアップ・ミーティング（京都大学)

ワークショップ・プログラム（12 月 18 日）:

13:30-13:40 開会挨拶（安藤和雄・京都大学)

＜発表＞

13:40-14:10 “The program of Action Research of the Pan African Institure for Depelopment”（Dr. Emmanuel Kamdem・PAID）

14:10-14:40 “Health Care System and Challenges in Myanmar”（Dr. Thu Kha Chan・District Publich Health Department, Ministry of Health and Sport, Myanmar）

14:50-15:20 “Role and Activity of Faculty of Regional Collaboration, Kochi University”（市川昌広・高知大学）

15:20-15:50 “Field Medical Camp in Tosa, Kochi Prefecture”（坂本龍太・京都大学）

15:50-16:20 “Activity of Kyoto University Students for University-Community Engagement in Miyazu, Kyoto Prefecture”（赤松芳郎・京都大学）

16:20-16:50 討論・意見交換

活動の様子：

宮津市社会福祉協議会（左）、宮津市保健福祉部（右）での取り組み説明の様子。国・地域がすすめる「地域包括ケアシステム」について、“むら”や“いえ”が色濃く残るミャンマー、カメルーンの参加者からは、ケアシステムにおける“家族の役割”に関する質問が出ました。

ぶらぶら体操に加わる参加者ら（12 月 17 日・宮津市福祉協議会）

ワークショップの様子（12 月 18 日・京都大学）

４－７「北近畿をいじる！アイデアコンテスト」での発表

日程:2020 年 1 月 12 日

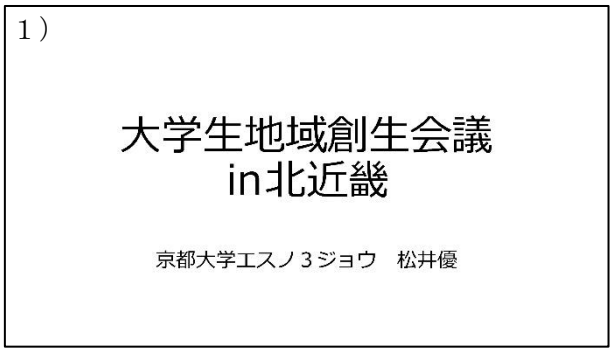
場所: 京都大学百周年時計台記念館 2F 国際交流ホール（京都市）

発表者: 松井優

概要：ふるさともう一度会議（福知山市、朝来市、丹波市、福知山公立大学）による総務省関係人口創出・拡大モデル事業「北近畿をいじる！アイデアコンテスト」が 2020 年 1 月 12 日に京都大学を会場に開催された。京都大学の学生サークルである「地域創生サークル S3（エスノ 3 ジョウ)」、また「京都大学地域振興研究会」に所属する松井優（法学部 1 回生）が、「大学生地方創生会議 in 北近畿」と題して発表をおこない、優秀賞を受賞した。

＜発表原稿・スライド＞

私自身は愛知県出身で今年度から進学を機に京都にやってきました。大学の講義の活動地域が宮津ということで北近畿に偶然関わるようになり、現在まで宮津市上宮津地区、日置地区で活動をしています。私たち大学生が活動で訪れるたびに歓迎してくださり、活動にもこころよく協力していただいています。その一方、私たちと同様に上宮津地区で活動を行う福知山公立大学の学生さんがいらっしゃることを最近はじめて知りました。今の宮津での活動をより良いものとし、地域をさらに活性化したいという思いのもと、私は今回「大学生地域創生会議 in 北近畿」を発表します。

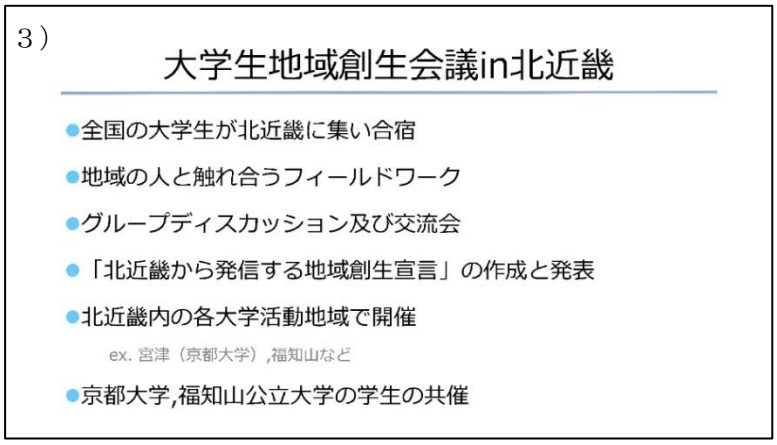


１）それでは会議の概要について紹介しますこの会議では全国の地域創生に関わる大学生を北近畿に集結させます。そして参加者が自分の活動地域や活動内容、北近畿の魅力ついて熱く議論を交わしあうことで、交流を深め地域の活性化につなげる。これが大学生地域創生会議 in 北近畿の概要です。ところでみなさん、大学生地域創生会議についてご存知でしょうか。多くの方が初めて耳にされると思います。

２）大学生地域創生会議とは、「大学生が地域にいることを当たり前に」を理念として、私が所属する地域創生サークル S³（エスノ 3 ジョウ）で昨年から開催している企画です。参加者は地域の方から直接地域の現状や課題を聞き、何

が地域の活性化につながるのか、真剣に考えぬきます。私はこの大学生地域創生会議をパワーアップさせ、ぜひ北近畿で実施したいです。

３）それでは会議の詳細について紹介していきたいと思います。この企画では全国の地域創生に関心のある大学生を北近畿に集め合宿形式で行います。地域の魅力や課題、地域での大学生の活動について学ぶフィールドワークを行ったうえで、地域創生に関するグループディスカッションや交流会を行います。会議の最後には会議を通して学んだことや、今後の大学生と地域の関わり方についての方針を盛り込んだ、「北近畿から発信する地域創生宣言」を発表します。開催場所としては北近畿内の各大学活動地域での開催を想定しています。例えば、私が現在活動している宮津市上宮津地区や日置地区、また福知山市での開催が考えられます。この企画については京大生と、福知山公立大などここにいる北近畿に関心がある大学生の方とぜひ共催したいと考えています。



４）最後に私が実現したい北近畿の未来について語ります。未来を語る前に私は地域が抱える深刻な問題があると考えています。それは進学や就職を機に若者が町を離れてしまう結果として起こる、街の担い手不足です。大学生が地域に入り活動することで、「関係人口」という形で北近畿の新たな担い手となることが可能です。また、地域で活動する大学や団体同士が交流したり連携したりする「横のつながり」は決して十分ではないと思います。他の学生との交流を通して、これまで気づかなかった地域の魅力や「大学生が地域で活動することの意義」について改めて考えることができます。さらに、北近畿は大学及び大学生の地域での活動が非常に活発です。その北近畿で大学生地域創生会議を開催することで、北近畿が大学生の地域創生の拠点としての役割を担うことができると私は考えます。この会議の実現によって、より多くの大学生に北近畿の魅力を知ってもらい、地域の活性化につなげたいと思っています。

４－８「第２回宮津わかもの会議」での発表

日程:2020 年 2 月 22 日

場所: 宮津市福祉・教育プラザ（京都府宮津市）

発表者: 森下航平、北野清子、我妻俊介

概要 :「宮津わかもの会議」実行委員会による「第 2 回宮津若者会議」が 2020 年 2 月 22 日に宮津市で開催され、話題提供として京都大学地域振興研究会の学生３名が、宮津でのこれまでの活動発表をおこなった。

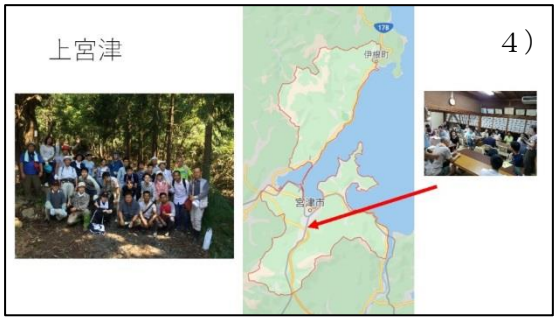
＜発表内容・スライド＞

１）

２）

１）、２）地域振興研究会の始まりは、1 年生の前期に主催された ILAS セミナーという入門ゼミがきっかけです。ILAS セミナーはたくさんあるのですが、その中で「京滋の在地に学ぶ実践型研究」という名前の安藤和雄先生が主催するゼミがあり、そこに集まったメンバーのうち、ゼミの期間が終わっても活動を続けたいと思い残ったものたちが「地域振興研究会」を作りました。もともとのメンバーは 5 人で、学部は総合人間学部、工学部、経済学部、文学部と様々になっており、そこに新しく総合人間学部と法学部の 1 年生の二人が加わり今のメンバーとなっています。

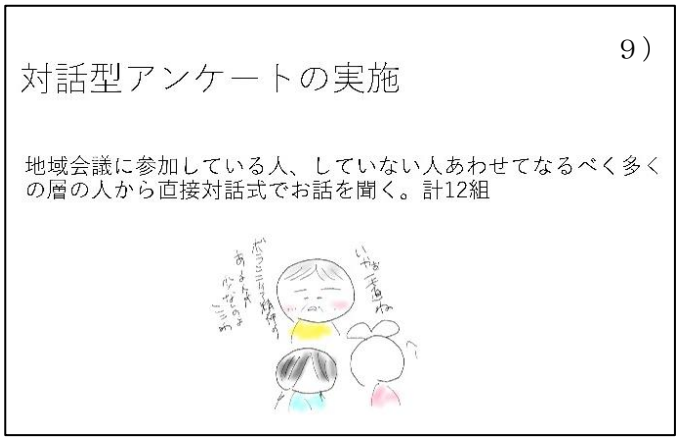
３）、４）、５）次に実際の活動について紹介していきたいと思います。私達は宮津の中でも３つのフィールドで活動しています。一つ目はまごころ市です。宮津の農業がどうなっているかを調査し離農について理解を深めるために始めました。二つ目は上宮津、そして三つ目は日置です。



6）まごころ市での活動です。まごころ市ではまず生産者対面アンケートを取りました「生産者が元気になるアンケート」をやってほしいという要望があり、それを受け実施したアンケートです。二つのグループに分かれ 3 日間をかけ合計組の生産者さんのお宅を訪ねお話を聞きました。また質問内容は作図家面積など基本的データとまごころ市にのぞんでいることなど自由記述のデータを口答でとっていきました。また、まごころ市来客に対してのアンケート調査を二日間実施しました。さらに、まごころ市売上データの分析をおこないました。

7）上宮津での活動です。私たちの連携団体である上宮津 21 夢会議は、「10 年間以上の活動持続力」、「長年の活動が基盤になっているからこその安定した組織力」、「義務感ではなく楽しんで活動」、「新しいことにチャレンジする意欲があり、多くのイベントなど

をこなすフットワークの軽さ」などが特徴の地域の活動団体です。しかし、「自分たちの活動に対する外からの評価がなく自信が持ちづらい」、「持続力がある新しいアイデアがなかなか思い浮かばない」といった課題を抱えています。そこで、私たちは上宮津の地域イベントに参加したり上宮津でフィールドワークをしたりしながら上宮津の地域資源を掘り起こし、新しい活動のアイデアを地域会議さんに伝えることに。今はこのアイデアの実現に向けて上宮津のみなさんと一緒に準備をおこなっています。



８）、９）最後に日置です。日置は初めて活動する地域だったので、まずは現状把握のため、地域会議に参加することから始めました。その結果、現状についてわかったのは、「活動はしているもののまだ実績がない」、「地元の人から認知されていない」、「本音の話し合いや議論が行われていない状況」、「一部の言うことにみんながついていく形で話が進んでいく」ということです。そこで、地域会議を①若い人も意見を言いやすい雰囲気に、②地域会議に参加していない人も巻き込めるように、そして③日置全体の将来を率直に話し合える場にしていきたいと考えました。これらを実現するためまず地域会議に参加している人、参加していない人それぞれが、日置についてどう思っているのか、どうしていきたいのかという率直な思いを、なるべく多くの層の人から直接対話形式で聞き、課題の整理をおこないました。今後はさらに多くのひとの声を聞くために地域会議のみなさんと一緒になってアンケートを作り、全戸配布する予定です。そしてこれをもとに日置の人みんなで日置をどうしていくか話し会える場を作っていきたいと思っています。

１０）以上が簡単な私たちの活動紹介です。ご清聴ありがとうございました。

終章

おわりに～編集後記

わたしたちが宮津とかかわるきっかけなったのは、ILAS セミナーという 1 年生のためのゼミであった。安藤和雄先生が主催している「在地の参加型実践研究で学ぶ過疎・離農問題」という名のゼミに集まったのは、色んなバックグラウンドがありながらも田舎に興味や愛着を抱いている生徒たち。もともとシラバスには、宮津や美山で活動している地元の人が毎回お話をしてくれると書いてあったのだが、実際は安藤先生自身が経験で培ってきたメゾットや哲学を聞くというのがメインであった。シラバスとは違う授業にかなり困惑しながらも、フィールドワークや自分自身の経験、理論の実践に重きを置く先生の姿勢は、いつのまにか私自身の思想の土台になっており、今の活動に大きな影響を与えている。

もともと半期で活動終了するゼミであったが、ゼミが終了したあとも安藤先生の誘いがあるたびに宮津のフィールドワークに参加しており、気づけばそういう仲間が 5 人残っていた。そして、安藤先生の 2020 年 3 月末での定年退職に伴って自分たちで活動していく流れになり、気づけば補助金で活動の支援を受け、そして気づけばこんなに活動をしていたというわけである。地域振興研究会という学生活動グループ（今は任意団体）の名前も、その時にできた名前である。文字面どおりのこの名前、もう少し馴染みやすいものにしようよという話もでたのだが、結局決まっても定着せず今に至っている。

私達は、地域の人たちの目線で活動することを大事にしている。宮津に行って地元の人の会議に参加する、まごころ市を見る、イベントに参加する。はじめは安藤先生に連れられ、受け身でやっていたことではあったが、次第にこのような積み重ねが地元の人への愛着や信頼を深めていくことであると気づいたのだ。受け身すぎず、しかし突っ走りすぎず、ちょうどよいあんばいを見つけながら今後とも宮津に関わっていけたらとても嬉しく思う。

最後に、いつもお世話になっている宮津の方々、安藤先生、赤松先生どうもありがとうございます。これからもどうぞ、よろしくお願いします。

京都大学地域振興研究会
北野清子

発行　京都大学東南アジア地域研究研究所実践型地域研究推進室

〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46

https://pas.cseas.kyoto-u.ac.jp/

ISBN978－4－906332－43－4

発行日　令和 2 年 3 月 30 日

（裏表紙イラスト：きたのさやこ）